
 翻 訳

スイヤブ（アク・ベシム遺跡）のキリスト教会

—第8号遺構：キリスト教会複合体—

山内 和也^{※1}・岡田 保良^{※2}

※1 帝京大学文化財研究所 ※2 国士舘大学

はじめに

第8号遺構：キリスト教会複合体

1. 南側の複合体 A (部屋 1～9)
2. 複合体 B
3. 複合体 C

4. 複合体 D

5. 設計および層位

6. 建設の歴史

7. 年代確定の問題

8. キリスト教会復元図

9. 複合体の用途

はじめに

本 翻 訳 は、*Суяб, Ак-Бешим, Государственный Эрмитаж (Россия), Институт Истории НАН Кыргызстана, Санкт-Петербург, 2002. [Suyab, Ak-Beshim, Gosudarstvennij E'rmitazh (Rossiya), Institut Istorii NAN Kyrgyzstana, Sankt-Peterburg, 2002.]* (『スイヤブ、アク・ベシム』国立エルミタージュ (ロシア)、キルギスタン国立科学アカデミー・歴史研究所、サンクト・ペテルブルク、2002年) に収録されている、Семенов Г. Л. “Раскопки 1996-1998 гг.” С. 11-114 [Semenov G. L. “Raskopki 1996-1998 gg.” pp.11-114] (G. L. セミョーノフ「1996～1998年の発掘調査」pp.44-114.) の一部をなす“Объект VIII. Церковный комплекс” [Ob'ekt VIII. Cerkovnij kompleks] (第8号遺構：キリスト教会複合体) の翻訳である。

中央アジアのキルギス共和国の北部に位置するアク・ベシム遺跡では(補図1)、東方キリスト教会に関連する3つの遺構が確認されている。そのうち2つは、1953～54年にクズラソフによって調査が行われた AKB-3区と AKB-4区である(補図2)。発掘者のクズラソフは、AKB-3区は「キリスト教徒墓地」で7～10世紀、AKB-4区は「キリスト教会およびキリスト教徒墓地」で8～9世紀に属するものと推測している。もう1つは AKB-8区という地点名で呼ばれる「キリスト教会」である。かつてスイヤブと呼ばれていたアク・ベシム遺跡のシャフリスタン1の南東隅に位置しており、1996～98年に

セミョーノフが調査を行ったものである。発掘者は、出土したコインに基づき、この教会は10～11世紀に属するものであると推測している。その後、ヴェデウータヴァが2000～2001年に部分的に発掘を行っている。

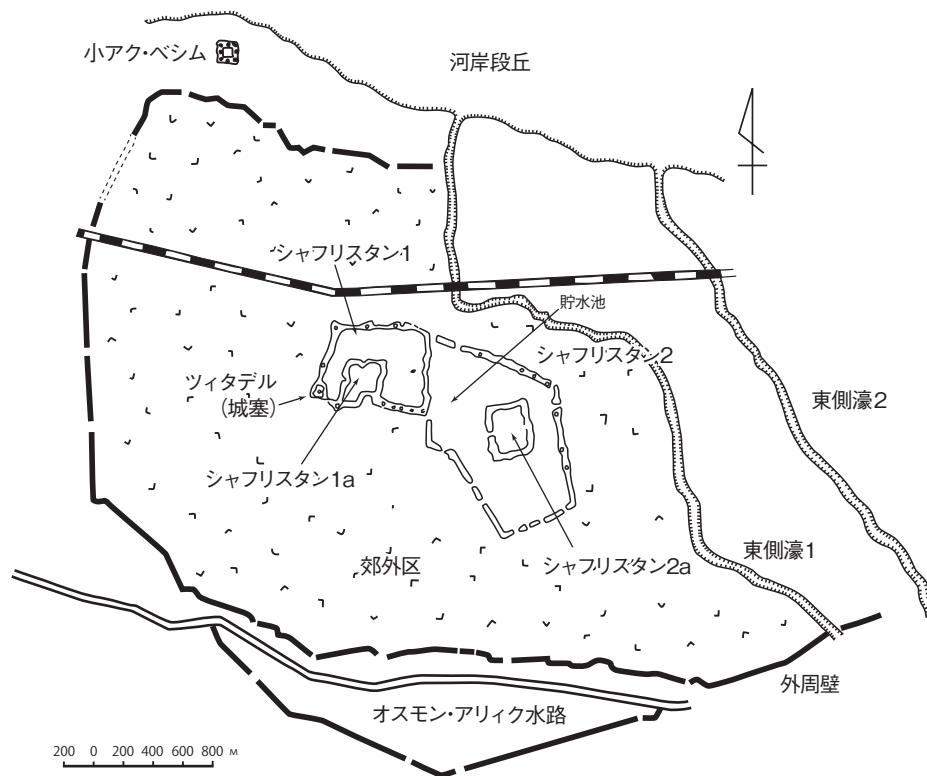
かつて撮影された航空写真には、このキリスト教会址が明確に写っている。1966年に撮影された航空写真によれば、シャフリスタン1の南東隅、東壁に沿って、南北約160m×東西約70mの長方形の建物の痕跡が明確に確認される(補図3)。セミョーノフによる発掘後の2002年に撮影された航空写真(補図4)では、発掘された建物が明瞭に写っている。

しかしながら、2002年に撮影された航空写真(補図4)および2019年に撮影された空中写真(補図5)では、セミョーノフによって作成された平面図(補図6)と比較すると、北側および北西側に向かって発掘区が拡張されている様子が確認される。この部分は、ヴェデウータヴァが2000～2001年に発掘を行ったとされる部分である(補図7)。

セミョーノフによるキリスト教会址 (AKB-8区) の発掘調査の報告の翻訳に入る前に、ここでは、このキリスト教会の年代および立地に関して、注目すべき点について述べておく。

まずは、このキリスト教会が機能していた年代についてである。報告書のなかで、セミョーノフは出土したコインおよび壁画断片の文様等に基づいて、このキリスト教会の年代を以下のように推測している。

「1998年には、発掘中に36個の貨幣が発見された。



補図 1. アク・ベシム遺跡全体図



補図 2. アク・ベシム遺跡発掘地点番号（全体）



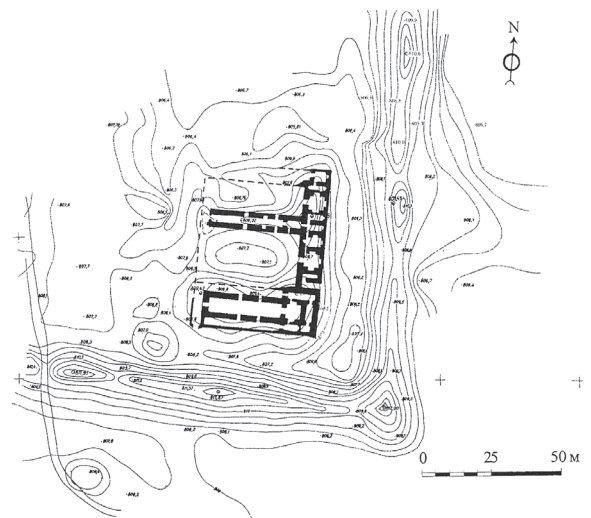
補図 3. キリスト教会複合体の全体写真（1966 年撮影）



補図 4. キリスト教会複合体の全体写真
（2002 年撮影）



補図 5. キリスト教会複合体の全体写真
（2019 年撮影）



補図 6. アク・ベシム遺跡の第 8 号遺構（AKB-8 区）



補図 7. アク・ベシム遺跡のキリスト教会複合体（第 8 号遺構）の平面図

(Кольченко В. А. Средневековое христианство Кыргызстана по данным археологических источников // *Религии Центральной Азии и Азербайджана*. Том IV. Христианство. – Самарканд: МИЦАИ, 2018. – С. 48-103. Рис. 10.)

現場で応急的なクリーニングが行われた。同定は外観に基づいている。35個のコインのうち（No.34 はツイタデル〔城塞〕で出土）、中央に正方形の孔がないのは4個だけである。4個のうち、2個の中央部にはイスラーム教のシンボルがある。そのほかのコインはトゥルギシュまたはツフス〔ワナントマーフ〕・コインである。部屋 24 でもっとも数多く発見された。もっとも早い〔古い〕床の下で正方形の孔がある小さなコイン、下層の3つの床で正方形の孔があるコイン、3つの床のなかでもっとも上〔新しい〕の床ではトゥルギシュのコインが1枚発見された。より新しいコインで年代を確定するとすれば、おそらく No.16 はカラハン朝のコインであることから、部屋 3 の下層の床は10世紀以降となる。部屋 1 の上層の床の上にあった No.28 もカラハン朝のコインであろう。いくつかの部屋の下層の床で見ついている施釉陶器もこの年代を裏付けている。素焼きの土器もこの年代とは矛盾しない。

部屋 8 で出土した大甕の口縁部のスタンプは A.N. ベルンシュタムが発表したセミレチエ地区のカラハン朝の陶器のスタンプと同じである。部屋 2 の天井画とロゼットは10～11世紀の敦煌石窟の天井画ときわめて似ている（第440～442号窟、第150号窟、

第157号窟、第302号窟）。

数多く武器が出土している上層の床は、10～11世紀の間であると推定するべきである。したがって、複合体全体の建設および使用は約100年間で、比較的短期間で終わっている。」

また、報告書の部屋 3 に関する部分では、「部屋 3 の床 2 はタイル状に窪んでおり、なかには厚い灰（20cm まで）が堆積している。灰溜まりのなかからは、多くの大型と小型の有角獣の骨、多量の土器の破片が見つかった」との記述がある。この状況に基づけば、床 2 の時期ののち、この床面を利用して、この教会とは関係のない人たちが居住し、簡易的な炉を造っていた可能性がある。この灰溜まりからは施釉陶器の破片も見つかっていることから、カラハン朝期には、教会はすでに機能を失っていた可能性が考えられる。

現時点では、このキリスト教会の建設時期を明らかにする資料はないものの、セミョーノフが推定している「10～11世紀」頃という年代観については、今後の発掘調査等で発見される資料をもとに再考する必要があるだろう。

次に、キリスト教会の立地についてである。ア

ク・ベシム遺跡では、異なる宗教、つまりキリスト教徒墓地（AKB-3区）やキリスト教会およびキリスト教徒墓地（AKB-4区）、キリスト教会（AKB-8区）、仏教関係では、第0仏教寺院（AKB-0区）や第1仏教寺院（AKB-1区）、第2仏教寺院（AKB-18区）、ゾロアスター教関係では都市域の北側で蔵骨器（オスアリ）が見つかったとされている。そのほかにも、発掘者のクズラソフが初期マニ教徒の「沈黙の塔」としている遺構（AKB-5区）がある。その一方で、住民の多くが信奉していたと推測されるゾロアスター教の神殿、あるいは、10世紀以降にはこの地域の支配的な宗教となったと考えられるイスラーム教のモスクや墓はシャフリスタン1の域内外を問わず、これまで確認されていない。

これらの諸宗教に関係する施設は、基本的にシャフリスタン1の周壁の外側に位置している。しかしながら、キリスト教会（AKB-8区）は、唯一、シャフリスタン1の南東隅、周壁の内側に位置している。ここでは、その理由として考えられる作業仮説の骨子を提示する。この仮説の前提となるのは、外来の宗教に関連する施設は、街、つまりシャフリスタン1の外側に位置すべきであり、ここで扱っているキリスト教会址（AKB-8区）はその例外であるという考えである。

イスラーム教については、一般的に、10世紀のカラハン朝のサトゥク・ボグラ・ハーンによるイスラーム教への改宗以降、この地域のイスラーム化が進み始めたと考えられている。その一方で、放射性炭素年代測定法によれば、シャフリスタン1の最上層の文化層は、11世紀の初めに属するものと推定されている。それゆえ、墓域を含め、イスラーム教関係の施設が確認されないのは、かつてのスイヤブではイスラーム教が支配的になる以前に、都市としての機能を失い、放棄されてしまったためであると考えることが可能である。

ゾロアスター教については、もともとの住民の信仰であるとして行うことができるのであれば、シャフリスタン1の内側、街の中心部に位置していたのかもしれない。いずれにしても、その痕跡は現時点では確認されていない。

仏教寺院については、シャフリスタン2に位置する中国式の第0仏教寺院（AKB-0区）を除けば、第1仏教寺院（AKB-1区）と第2仏教寺院（AKB-18区）はともにシャフリスタン1の外側、壁の南側に

位置している。また、AKB-10では仏像の断片が見つまっていることから、これを第3仏教寺院とする考えもあることを付け加えておく。

キリスト教に関連する施設については、キリスト教徒墓地（AKB-3区）はシャフリスタン1の東側、キリスト教会およびキリスト教徒墓地（AKB-4区）はシャフリスタン1の西側（シャフリスタン2内、おそらく碎葉鎮城の放棄後に建設されたものであろう）にあり、いずれもシャフリスタン1の外側に位置している。そのなかでも、キリスト教のみならず、仏教も含め、キリスト教会址（AKB-8区）は唯一、シャフリスタン1の内側に位置している。

セミョーノフの年代観が正しければ、街が衰退していき、放棄された時期にあたることから、その時期にこの地にいたキリスト教徒集団が壁の内側に進出したということになろう。しかしながら、キリスト教徒墓地（AKB-3区）とキリスト教会およびキリスト教徒墓地（AKB-4区）が、それぞれ7～10世紀、8～9世紀に年代付けられている点を考慮すれば、街そのものが衰退していくなかで、この地にキリスト教徒が住み続けていたという積極的な証拠が存在しない。

その一方で、このキリスト教会の建設を、ティモテの書簡に登場するチュルク族のキリスト教への大規模な改宗に関連付けるという考えも可能かもしれない。紀元後781年頃、ティモテは、書簡のなかでこのチュルク族の改宗について言及している。「チュルク人の王が、[彼の] 国の（住民の）ほぼ大部分とともに、[彼の] 古い偶像崇拜を離れ、キリスト教徒になり、[彼は] 書簡のなかで、私たちに、彼の国のために首都大司教 [Metropolitan] を設立するよう求めた。そして、これはなされた」、また「チュルク人のために司教 [Bishop] を任命した」と記している (Alphonse Mingana, *The Early Spread of Christianity in Central Asia and the Far East: A New Document*, 1925: 306)。この「チュルク人の王」がスイヤブ（アク・ベシム遺跡）の周辺を支配していた王であり、要請した「首都大司教 [Metropolitan]」の設立のために、キリスト教会を建設し、それがアク・ベシム遺跡に残されたキリスト教会 (AKB-8区) であったのかもしれない。その場合、王の命令によって街のなかにキリスト教会を建設したということも考えられることも可能であろう。その建設にあたっては、比較的広い敷地が残されていたシャフリスタン1の南

東隅が選ばれたのかもしれない。

いずれにしても、今後の発掘調査によって、さらに年代を確定することができる資料が見つければ、さらなる論を展開することが可能となろう。

この報告の翻訳はマリヤ・コヴィジヤエヴァが行い、山内和也と岡田保良が加筆、修正したものである。文中の〔 〕で示したものは補訳であり、見出し番号および見出しは山内が追加したものである。

第8号遺構：キリスト教会複合体

P. M. カジミヤカが宮殿式の遺構と推定していたシャフリスタン [1] の南東隅の部分において、1996年に発掘調査を開始した（図1）¹⁾。

発掘の結果、町シャフリスタン [1] のこの地点には、日干しレンガとパフサ [練り土]・ブロックで造られた大規模な建造物があったことが明らかとなった。遺構の大きさは56×42mであった（この大きさは、まだ発掘されていない外壁の厚さを除いたものである。遺構の外壁の厚さを入れた場合、少なくとも60×46mとなるであろう）。発掘調査は完了していないものの、いくつかの結論を提示することが可能である。建物の複合体は、3つ、もしくは4つの部分で構成されていた。各部分は、東西方向に細長い、長さ25mの部屋（そのうちの1つの部屋 [空間] は中庭であると想定される）、そしてその東側に隣接し、壁龕と祭壇を有する正方形の平面プランの部屋（5×5m）で構成されている。この祭壇をもつ部屋の間には、遺構の東側の外壁に沿って、さらにいくつかの部屋があった。長い通路が3方向から建物 [全体] を囲んでおり、この通路によって建物が分けられていた（図2～3）。

建物の南側部分（複合体A、部屋1～9）には、東壁と北壁、南壁に壁龕、そして西壁に出入り口がある正方形の平面プランをもつ部屋2がある。この出入り口は細長い部屋3（[長さ] 25m）と繋がっている。[この部屋3は] 西側では、部屋3に直交するように配置されている部屋9に繋がっている。複合体のこの部分の中心（部屋2、3）は、東側、北側、南側にあるヴォールト式の [天井をもつ] 一連の部屋（部屋1、4～8）で囲まれており、これら [の部屋] は、それぞれが出入り口で繋がっている。また、別の通路 [出入り口] が中心の部分とその周縁にある一連の部屋を結んでいた。

複合体Aの北側には複合体Bが位置していた。東西に伸びる広い中庭（18×30m）があり、その中庭の東側には、いくつかの部屋（19～24）が接している。この部屋群の中央 [に位置する] 部屋（部屋21）は、中庭の長軸線上に位置しており、南側部分の部屋2と平面プランが類似している。庭の北側は、一連の通路（部屋29、部屋30）で囲まれている。これらの通路には、東側、南側 [の大中庭への]、そして、北側にも大きさが小さめのもう1つの [小]

中庭（10×31m）への出入り口がある。大中庭と同じように、小中庭の長軸線上には、部屋21および部屋2と類似する平面プランをもつ正方形の部屋（25）がある。この部屋が複合体Cである。

北側には独立した部屋26～28からなる建物群（複合体D）がある。複合体 [建物群] ごとに、それぞれの部屋の説明を記す。²⁾

1. 南側の複合体A（部屋1～9）（図4～6）

1-1. 部屋2

部屋2は、床2 [建設の第2期の床] のレベルまで発掘された。床の石膏の層と壁に残る石膏の痕跡をもつこの [建設] 時期は、ほかの部屋でも観察されている。部屋 [の平面プラン] は正方形（5×5m）であり、東壁と北壁、南壁には幅2.5m、奥行き1mの壁龕が配置されていた。東壁の壁龕は中央に配置され、北壁と南壁の壁龕は中心から西側にずれている。西壁には、東壁の壁龕に対応するように幅2mの出入り口があり、この部屋 [2] と部屋3とを結んでいた。壁の残存状態が良好ではないため推測になるが、東側の外壁沿いの部屋と同じように、壁龕の上部はヴォールト状 [アーチ型] になっていたものと仮定できる。北壁と南壁の壁龕のなかには、西側の側面に沿って狭い出入り口が設けられており、部屋を囲む通路と繋がっていた。幅85cmの南側の出入り口には2段の階段があり、石灰で塗られた床をもつ部屋6に通じていた。北側の出入り口では同じような階段は検出されなかったが、隣の部屋 [1] の床もまた、出入り口より低くなっていた。

床の石膏層の下層には日干しレンガが敷かれていた。東壁の前面の石灰の床は、部屋の軸線 [東西方向] に沿って高くなっているが、[これは] 壁龕の側面 [奥壁] に接する長方形の壇があったことを示している。

部屋27の発掘後、[これは] 東壁の前に位置する祭壇の高まりであることが明らかとなったことから、[部屋2および部屋27の] この2か所については、以下、祭壇と呼ぶこととする。東壁の壁龕は壁画で装飾されており、堆積土のなかからは、青色と赤色の顔料の痕跡が残っている壁土のプラスターの破片が発見されている。おそらく天井から落ちたものと思われる断片の1つには、内側に花が描かれた大きなロゼット状 [花のように中心から放射状に配置されている文様] の装飾が観察されている。部屋2と

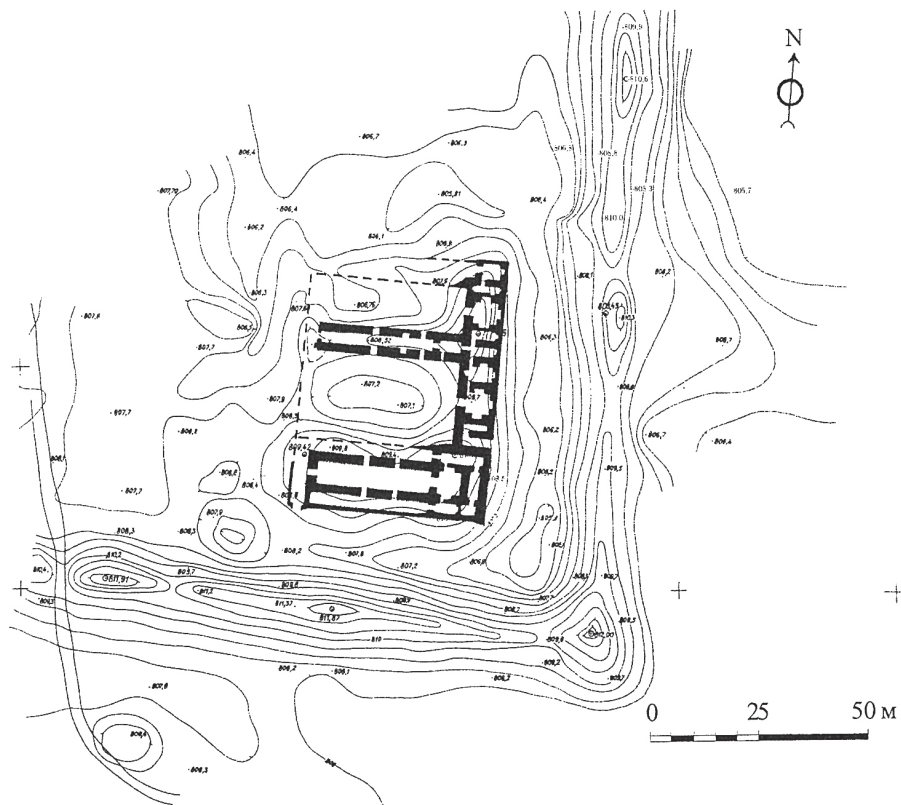


図1. シャフリスタン [1] の東南隅の地形図：第8号遺構 [AKB-8区]

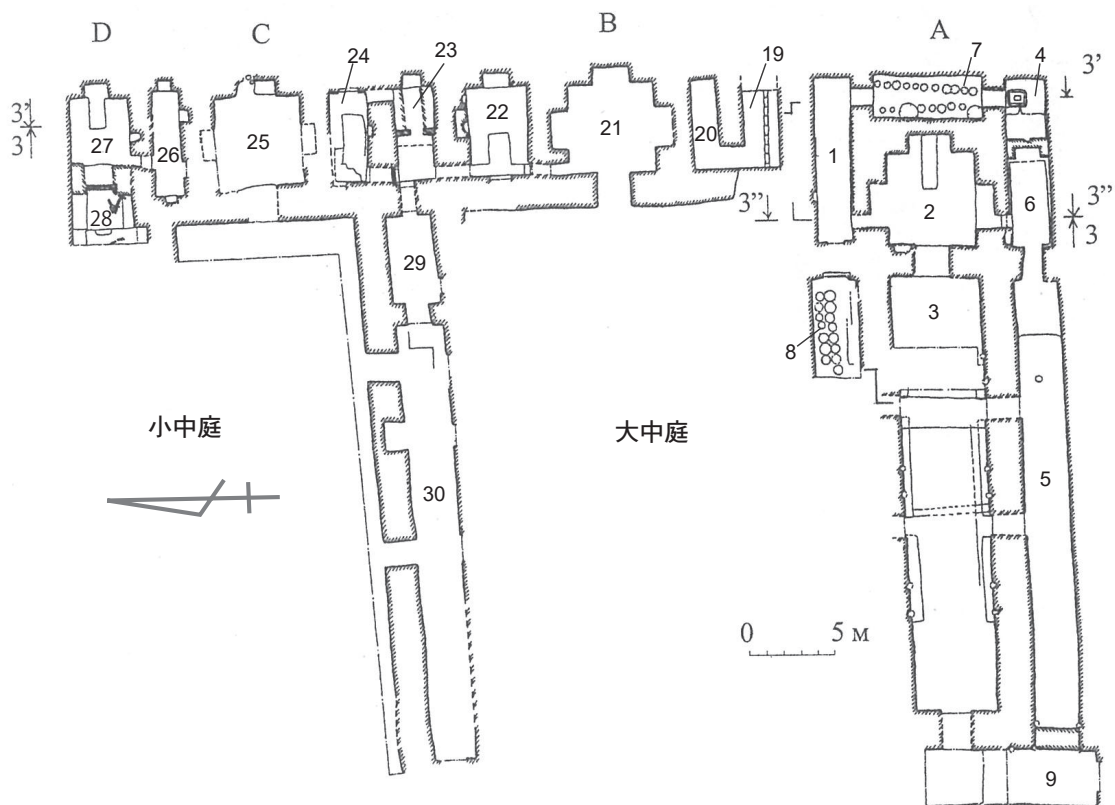


図2. 第8号遺構：平面プラン：大中庭、小中庭 [部屋番号は山内が加筆]

部屋3の間の出入り口から出土した別の壁画の破片は、比較的残存状態が良く、衣服もしくは布のひだが見えており、参拝者〔奉献者〕の銘文が残っている。V.A. リフシツの推定によれば、銘文は古代ウイグル語で書かれたものであるが、現在では銘文が崩れてしまっているため、まったく判読できない(図8～9)。

壁龕の下部の堆積には、流れ出た泥の水性堆積の痕跡を示す層〔以下、水性堆積層と呼ぶ^{説註6)}〕、そして、ぎっしり詰められたレンガの堆積があった。石膏の床とほぼ同じレベルで流れ出している泥の水性堆積

層のなかからは、残存状態が良いトゥルギシュのコインが発見された。また、同じ種類のコインが北側〔北壁〕の壁龕のプラスター層のなか、石膏の床のレベルより低い地点でも見つかった。この部屋では、コインのほかに、固定用のピン〔突起〕が付いたベルト用の青銅製品の先端部分、水差しの破片が2片見つかった。1つの（大きさは、大きめで把手が1つと注口が付く）水差しの破片は部屋の南西隅で、もう1つの（下部しか残っていない）水差しの破片は部屋の南東隅で、両方とも部屋の床に近いレベルで出土した。

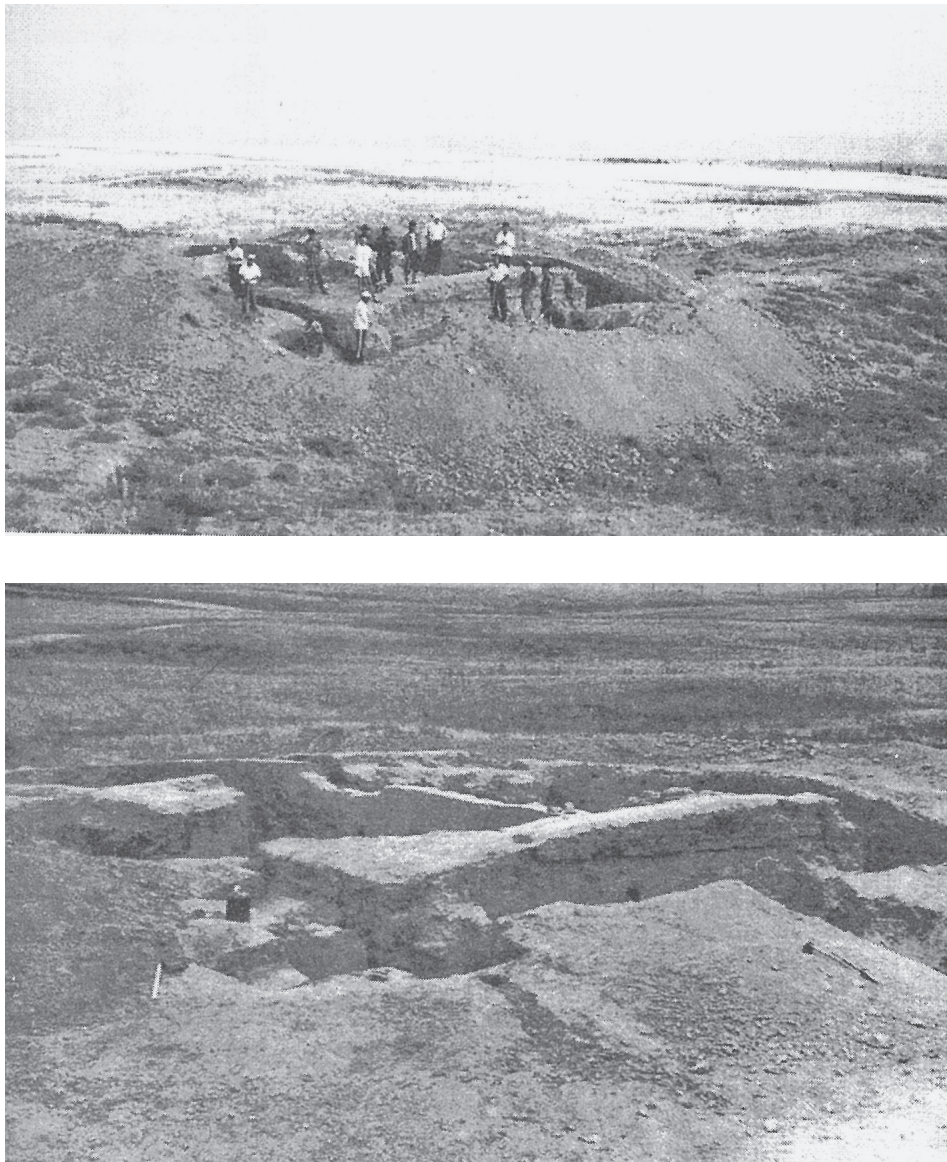


図3. 第8号遺構：発掘開始時の全景写真

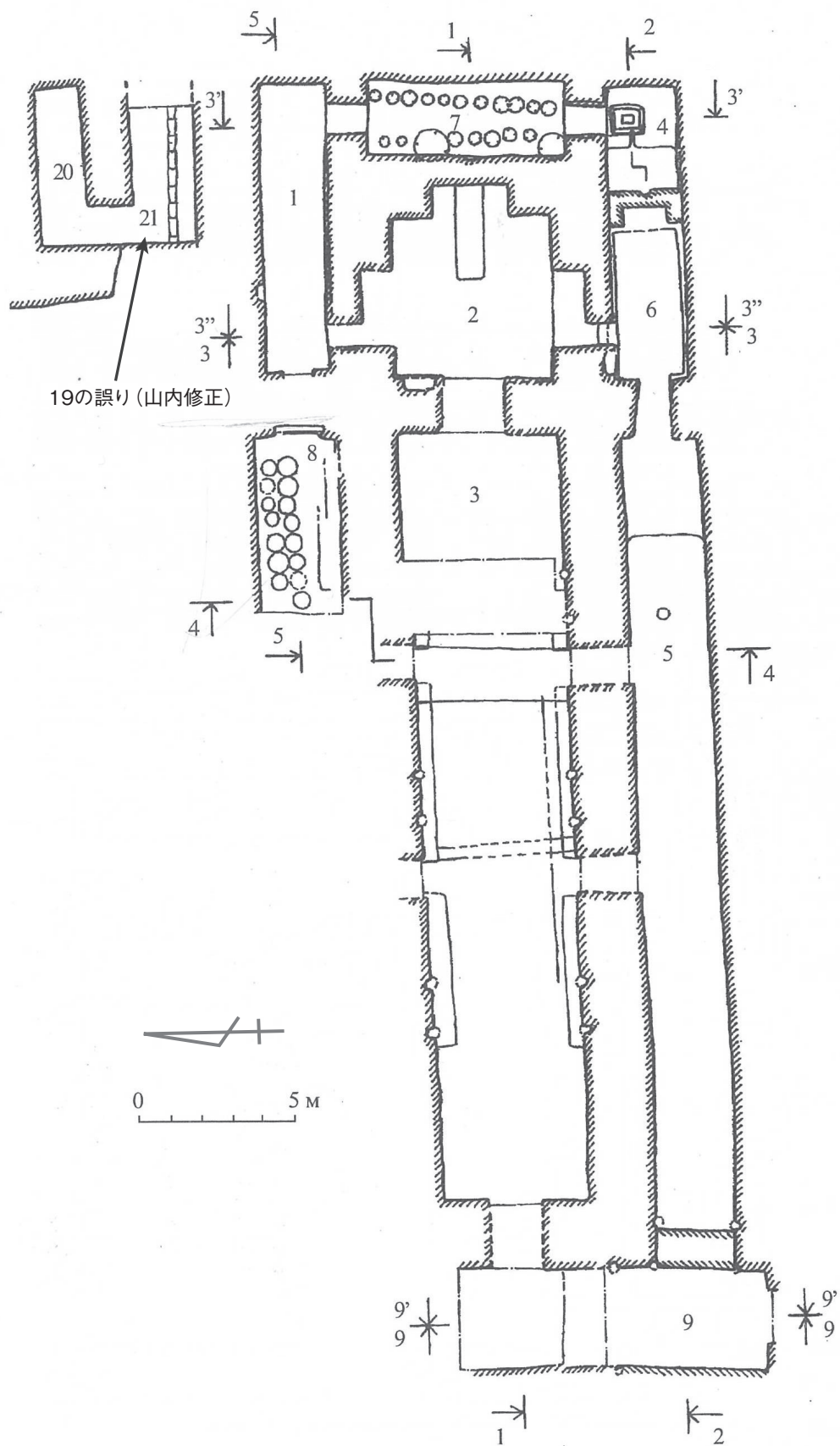


図 4. 複合体 A：平面プラン

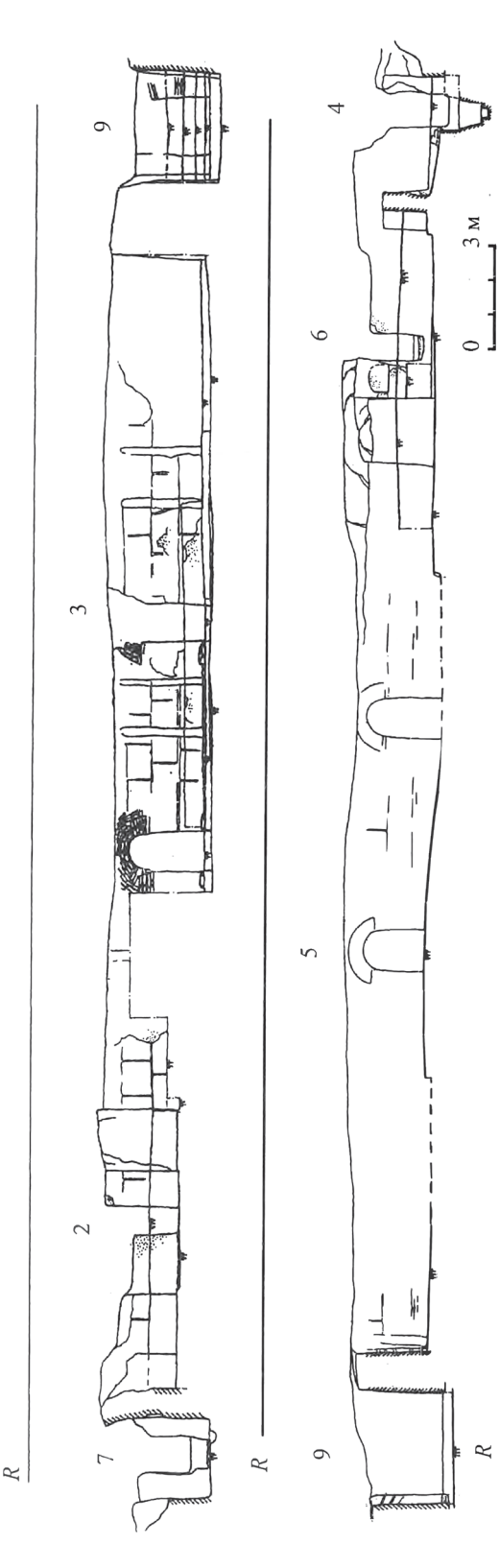


図 5. 断面図 : 1-1、2-2

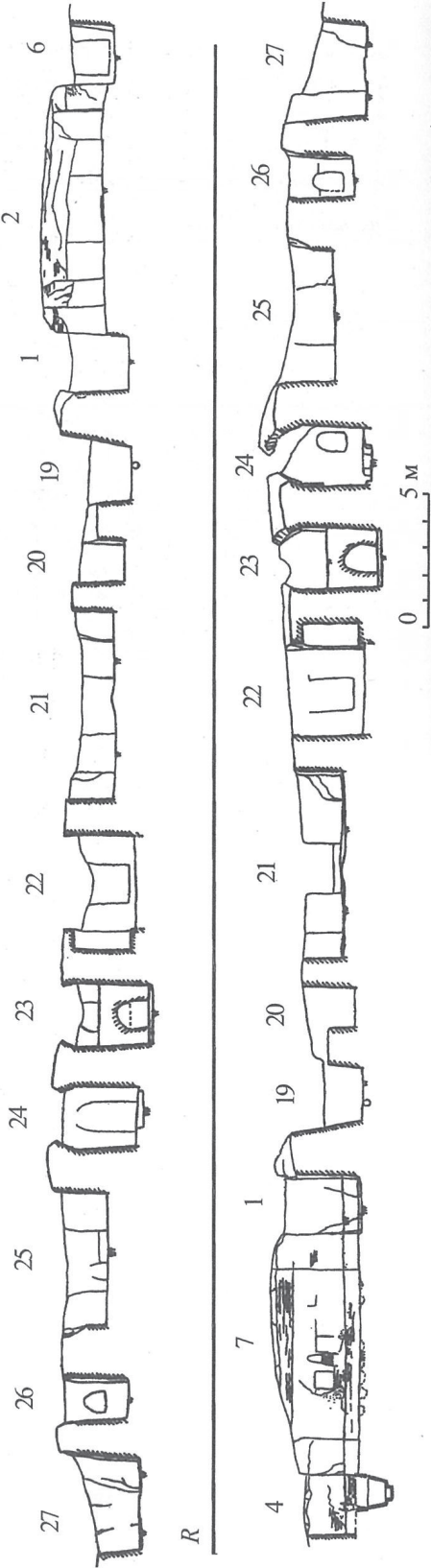


図 6. 断面図 : 3-3、3'-3'

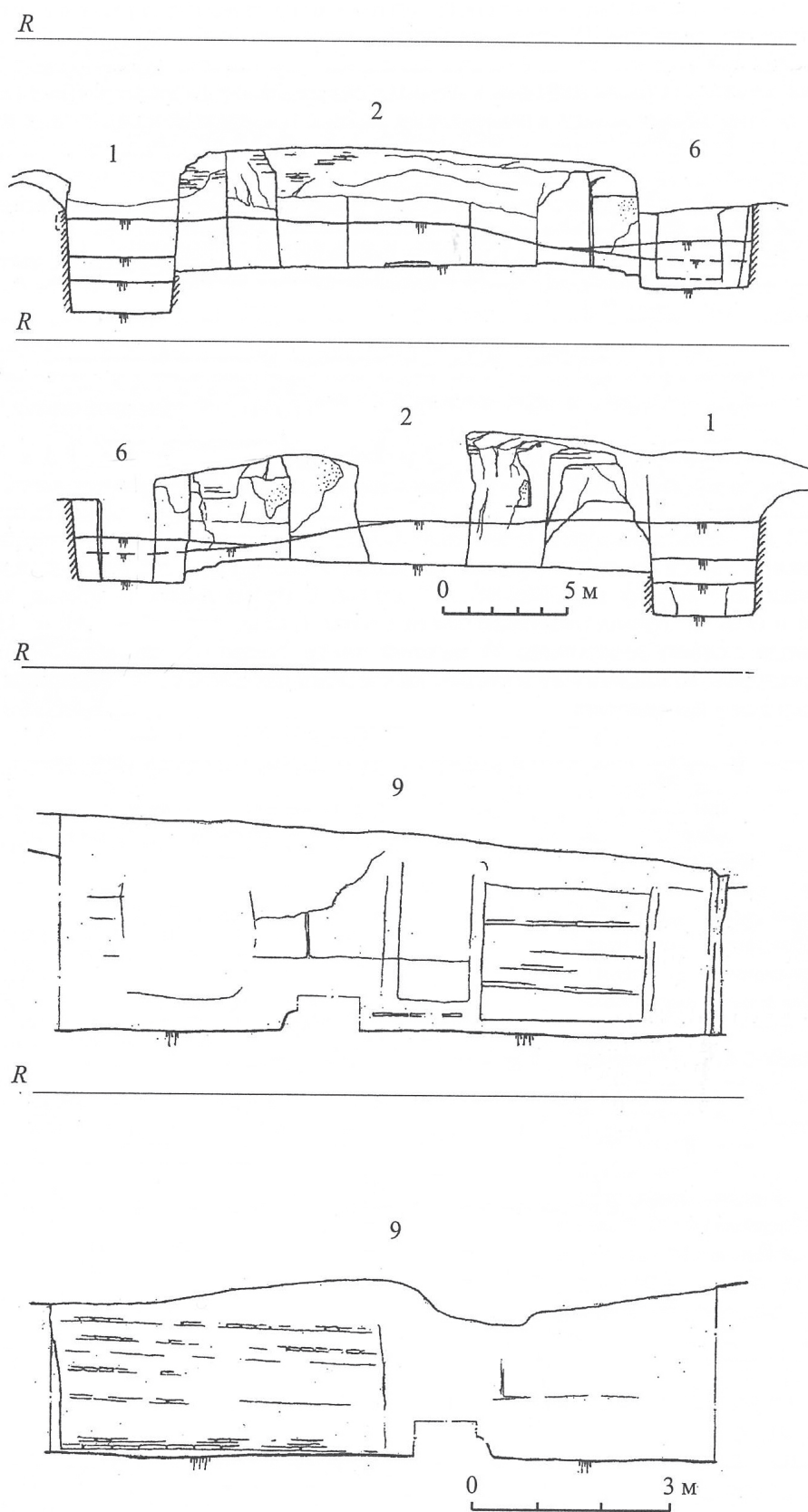


図 7. 断面図（部分）：3-3、3''-3''、4-4、4'-4'



図 8. 部屋 2：壁画の破片

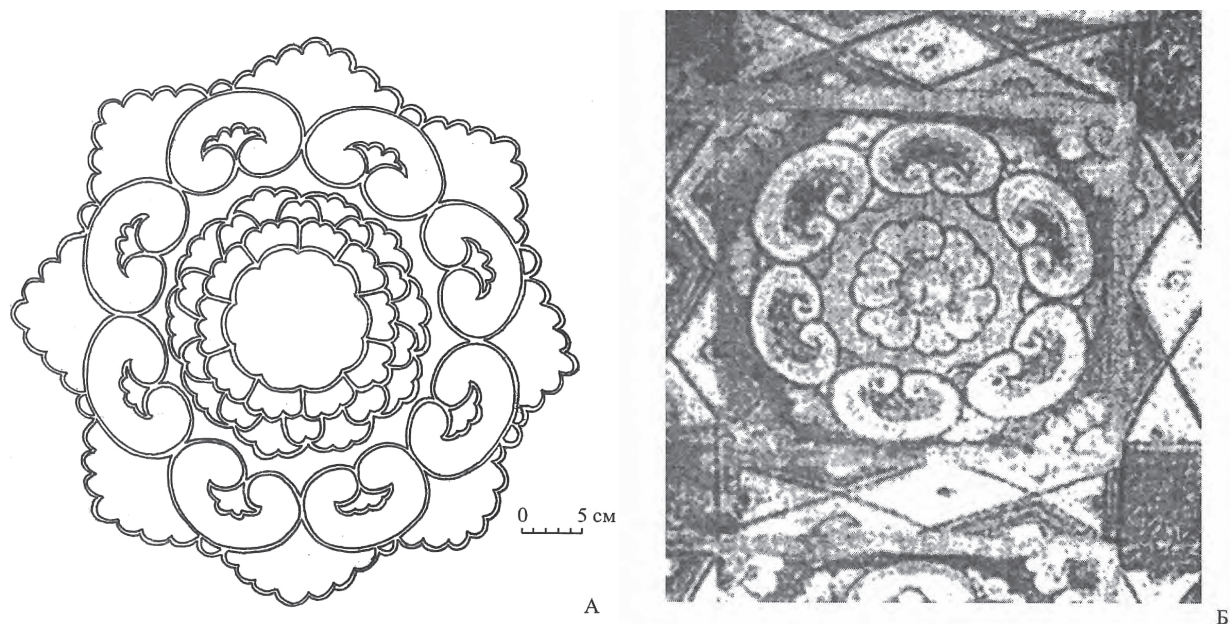


図 9. A：部屋 2 のロゼット〔花卉〕装飾の復元図；B：敦煌の壁画のロゼット〔花卉〕装飾

1-2. 部屋 3（図 4～5）

〔第 8 号〕遺構の南側部分にあり、東西に細長く、西側は部屋 9、東側は部屋 2、南西側と南東側は部屋 5 と出入口で繋がっている。さらに、北壁にも 2 つの出入口があって、南壁の出入口と向かい合っている。部屋の大きさは〔東西〕25×〔南北〕5.2m である。部屋は、長軸線のトレンチと 2 つの横断トレンチ〔直交するトレンチ〕で（北西、北、東北、南西、南、南東の）6 つの部分に分割されている。

1-2-1. 東壁

東壁の厚さは 1.9m で、高さ 2.5m まで残っている。2 段のパフサ・ブロックで構築されており、その上にレンガが 8 段積まれている。パフサ・ブロックの下段の高さは 85cm、上段の高さは 80～83cm で、パフサ・ブロックの幅は 38～74cm、パフサ・ブロック〔間〕の目地の厚さは 3～5 cm である。レンガ積みは、南側では高さ 5 段まで、北側では 8 段まで残っ

ている。レンガ積みは不規則で、レンガの大きさは 46×21×9 cm である。〔東〕壁には、部屋 2 に通じる出入口がある。壁の〔出入口の〕北側部分の長さ〔幅〕は 1.35m、南側部分の長さ〔幅〕は 1.60m である。出入口の側面〔側壁〕はひどく崩壊している。壁の下部では 2 層のプラスターが検出され、2 つの層のうち、あとで塗られた〔上層の〕漆喰の層は部屋の床の上層に対応している。

1-2-2. 北壁

北壁は、発掘したレベルから高さ 2.8m まで残っていたが、壁の東側部分の高さは 2.2m である。これは、部屋の北東側と南東側の部分では上層の床までしか発掘されていないためである。壁は 4 段のパフサ・ブロックで構築されている。下から上に向かって、段の高さは以下の通りである。2 段目は 75～78cm、3 段目は 65～68cm である。パフサ・ブロックの幅は 55～100cm で、パフサ・ブロックの 1 段目



図 10. 部屋 3：南壁

と2段目の間にはレンガ（ $39 \times 20 \times 8$ cm）が積まれている。

壁には2層のプラスターが残っており、青色顔料と赤色顔料の痕跡から判断すると、上層〔のプラスター〕には壁画があったものと思われる。壁の北西側と北東側には2つの出入り口があり、いずれも壁の中央部分に位置している。現在では、出入り口の天井部は完全に崩落しているが、おそらくアーチ型〔ヴォールト式〕であり、南東側の出入り口と同じであった。出入り口の側面〔側壁〕^{訳註7)}の残存状態は良くなく、基部にはスーファが構築されている。出入り口の幅は109cmである。北西側の出入り口の堆積土のなかからは赤色顔料の破片が出土した。

東側と中央の組の溝（柱穴）の間の距離は1.38mであり、中央と西側〔の溝の間の距離〕は1.34mである壁には、6つの幅の狭い垂直方向の円形の溝（柱穴）があることから、おそらく柱が設置されていたのであろう。溝（柱穴）は3対配置され、東側

の対は北東隅から4.2 m、中央の対は北西側の出入り口から〔東へ〕0.83m、西側の対は北西隅から5.3mの位置にあった。対になる東側組と中央部の溝（柱穴）との間隔は1.38mであり、中央部と西側との間隔は1.34mである。壁面に埋められた〔掘り込まれた〕溝（柱穴）の寸法は（幅×奥行き、東から西に）、 33×18 、 22×20 、 29×16 、 32×22 、 30×20 cmである。スーファよりも低いレベルにも溝の痕跡が残されていることから推定すれば、溝（柱穴）の基部は部屋の下層の床にほぼ一致している。

下層の床のレベルから、壁に接してスーファが構築されており、通路〔出入り口〕で3つの部分に分かれていた。東側の部分では、西端の部分しか残っておらず、北東側の出入り口に接している。高さは29cm、幅は42cmである。通路〔出入り口〕の間にある中央部のスーファの長さは575cm、幅は41cm、下層の床〔床1〕からは高さは26cm、この床面の漆喰層からは高さ22～23cmである。北西側のスーファ



図 11. 部屋 3：垂直の柱の溝が見える南壁

は部屋の西壁の手前で途切れており、大きさは〔長さ〕450×〔幅〕58～66×〔高さ〕19～27cmである。

スーファの側面は薄いプラスターの層で覆われており、床1の上層の漆喰層に滑らかに続いている。

1-2-3. 南壁

南壁は、レンガの積み方や出入り口の配置および構造や柱用の溝（柱穴）、スーファなどの多くの点で北壁と類似している（図10～12）。パフサ・ブロックの高さは（下から上に）76、76、78cmである。パフサ・ブロックの1段目と2段目の間には、大きさ46×22×8cmのレンガが積まれている。ブロックの幅〔長さ〕は47～92cmである。部屋5と繋がる東南側の出入り口は残存状態が良く（図12）、高さは240cm、基礎の高さでの幅は120cm、アーチの基部の幅は115cmである。出入り口のアーチは半円形で、センタリング（木製の仮枠）を用いて、5段のレンガ（46×22×7cm）で構築されている。そのうち3

段は側壁のなかにあり、8cmの深さまで埋め込まれている。アーチは出入り口の側壁を構成する横置き（図註9）のレンガ〔追元〕の上に載っている。アーチの内径は55～57cmである。南東側の出入り口の東側には、壁のなかに高さ39cm、幅34cm、奥行き20cmの楕円形の壁龕が設けられている。

南西側の出入り口も部屋5と繋がっており、南東側の出入り口と比べて残存状態が良くないものの、おそらく構造は同じであった。アーチの東側部分が残っており、出入り口の高さは245cm、幅は110cmである。

柱用の溝〔柱穴〕は北壁の溝に対応するように配置されている。東側の対は東南隅から〔西へ〕4.5m、中央の対は南西側の出入り口から〔東へ〕1.5m、西の対は南西隅から〔東へ〕5.5mに位置している。中央の対の溝〔柱穴〕の間隔は1.27m、西の対は1.26mである。溝〔柱穴〕の大きさは（東から西に）〔幅×奥行き〕33×17、29×14、26×17、23×16、28

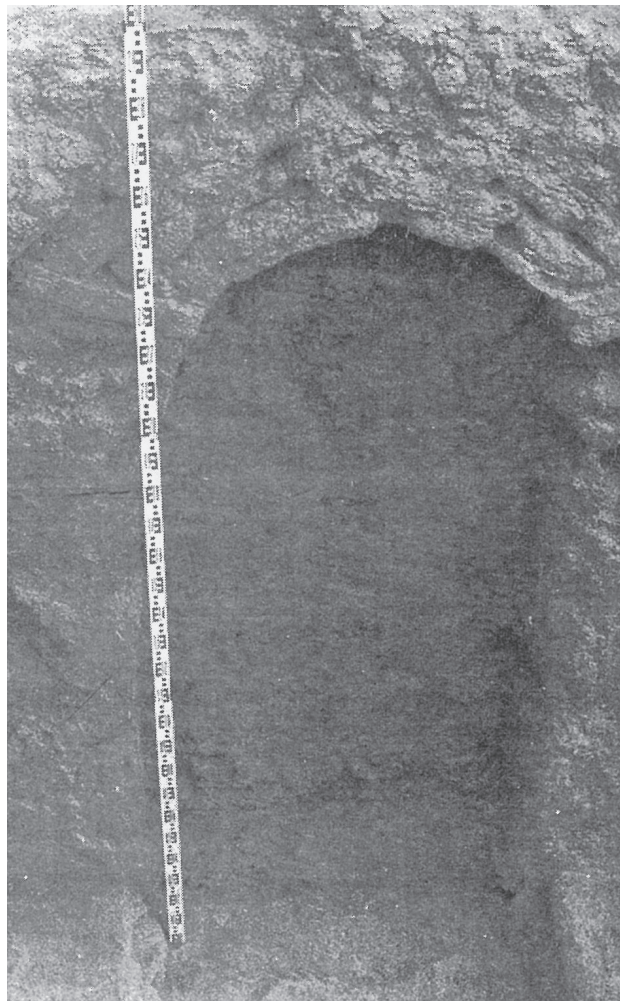


図 12. 部屋3：部屋5との出入り口

×17cmである（図11）。

スーファは、東側部分では高さ21cm、幅40cmである。中央部分では大きさ560×40×15～19cm、西側部分では450×48×16cmである。

1-2-4. 西壁

西壁は、北壁および南壁と同じような構造をしている。パフサ・ブロックの高さは下から上に向かって72、78、75cmであり、その間に積まれたレンガの大きさは43×19×8cmである。西壁には、幅162cmの部屋9への出入り口がある。出入り口の側面はひどく壊れている。おそらく出入り口の北側の側壁はレンガ積みであった。下層の床〔床1〕のレベルで検出された出入り口の東南隅は隅丸で、傾斜している。壁の北側部分の長さ〔幅〕は155cm、南側部分は157cmであった。

1-2-5. 部屋3の堆積

下層の床（床1）は粘土造り〔土間〕で、粗く、中密度で〔やや締まりがあり〕、部屋の中心に向かって低く傾斜している。この床は南西部の2つの箇所のみで発掘されている。スーファおよび壁との床の接点部分は隅丸になっていない。2層のプラスターが塗られており、厚さは計8～10cmで、〔床の〕上層のプラスターはスーファと壁のプラスターへと繋がっている。このプラスター層は西〔壁〕の出入り口に向かって高くなり、北へ向かって低くなっている。〔出土した〕遺物は、少数の土器の破片とフィリス・コイン〔青銅製コイン〕である。

床1の上にある基礎は、レンガとその破片を不規則に詰めたもので、固く締まっているが、南西隅では柔らかい堆積物になっている。スーファの〔ある〕レベルでは、この層は床2で覆われている。床2は粘土造り〔土間〕で、固く締まっており、厚さは3～4cmである。床2はスーファを覆っており、しかもスーファのレンガ層〔積み〕の直上にある。このことから、床2を構築する前には、スーファの表面が取り除かれた〔削られた〕ものと思われる。南西隅では床は途切れがちになり、レンガの堆積のなかから鉄の鎧札がまとまって見つかった。同じような鎧札の集積は、南側の灰溜まりのなかでも検出されている。

北西側の出入り口では、床に3つのレンガを並べた長さの基礎〔敷居〕がある。この基礎〔敷居〕は

北壁沿いのスーファの中央部と西側部分を結んでいた。レンガの大きさは41×20×8cmである。

床2では、鎧札のほかにいくつかの土器の破片が発見され、そのなかには、白釉が施された破片もあった。

床2のレベルでは、北東側と南東側の出入り口間の空間は、厚さレンガ1つ分〔1段分〕の2つの小さな壁で区画されていた。西側の小さな壁の高さはレンガ1つ分〔1段分〕で、東側はレンガ2つ分〔2段分〕である。レンガのサイズは41×23～24×7～8cmである。〔2つの〕小さな壁の間隔は出入り口の幅と一致している。仕切られた空間では、床はタライ状に窪んでおり、なかには厚い灰（20cmまで）が堆積している。^{訳註10)}灰溜まりのなかからは、多くの大型と小型の有角獣の骨、多量の土器の破片が見つかった。土器は、おもに大型のものが多く、そのなかには鍋、大甕、動物模様のスタンプが押された机〔台〕、さらには青釉陶器の破片1点が見つかった。出入り口の前では、鉄製の釘とその破片が出土した。

北西側と南西側の出入り口の東側壁付近でも、5つのレンガを並べた長さの小壁が確認された。北西側の出入り口にも灰溜まりがあった。

床2、灰溜まりおよび出入り口に隣接する壁は、有機物が多く混入する柔らかいプラスターで塗られていた。部屋の東側と南側の部分には、その一部を覆うように、いわゆる「後期のスーファ」が構築されている。〔スーファの〕前面の〔側壁には〕大きさが整っていないレンガの破片が粗く積まれている。南側のスーファは南壁に接しており、南東側の出入り口の〔西側へ〕15cmほど引っ込んでいる地点から、南西側の出入り口を越え、さらに西へ2.7m続いていた。中央部分の幅はおおよそ80～90cmであり、西側では35～40cmまでに狭まり、上端の幅はさらに5～10cmほど狭くなっていた。このスーファの高さはレンガ6～7段分（60cm以下）である。レンガの壁がない〔スーファの〕中央の部分はパフサで埋められていた。壁に接する部分は、レンガの破片と柔らかい土で充填されていた。充填された土のなかからは、鎧札と鎌が見つかった。

東側のスーファは、部屋の東壁と平行する側壁しか残っていなかった。壁は割れたレンガの4段積みで、〔その上には〕プラスターが塗られている。プラスターは断片的に残っており、上層の床3の隅丸

部分によって復元可能である。このスーファの充填材は南側のスーファと同じである。スーファの壁は鈍角となって、西に伸びている。スーファの幅は185～200cm、高さは31～37cmである。南側のスーファに比べて高さが低い理由は、出入り口の間の仕切り〔敷居〕と灰溜まりを覆う床3によって説明可能である。

床3はもろく、有機物の混入が多く、床〔3〕を除去した際、厚さ3～4mmの暗茶色の柔らかい層が検出された。この床は床2の上層の上塗り層であり、後期スーファの建設後に使用された。スーファ自体には上塗りがなく、東側の出入り口では、このスーファを覆う床が部屋2の石膏の床になる〔の床に続いている〕。部屋の上部〔上層〕ではレンガの堆積が検出された。レンガの小口を内側に向けていたことから、おそらく木製の仮枠によって造られたアーチに由来するものであろう。さらにその上は、継続的に溶けて流れ出た泥の水性堆積層とパフサ・ブロックとレンガが混在する堆積物で部屋が埋まっていた。

1-3. 部屋4（図13～14）

複合体の南東の隅に位置する。部屋の大きさは、南壁は長さ3.35m、西壁は2.13m、北壁は3.29m、南壁〔東壁の誤りか〕は2.19mである。

1-3-1. 西壁

西壁は、ほか〔の壁〕と比べて残存状態が良い。この壁は〔大きさ〕48×24×9cmの日干しレンガ積みで、表面は計3cmの厚さのプラスターからなり、粘土のプラスターの上には、さらに厚さ0.5cmの石灰が3層塗られている。北西隅に残る漆喰層は、最大高で〔もっとも高く残っているところで〕高さ68cmである。壁の中央には、床のレベルにあわせて壁龕が設けられている。奥行き17cm、外側の幅は36cm、奥では狭まり、幅21cm、高さは少なくとも34cmである（上端は、はっきりしない）。壁龕の床は傾斜しており、石灰が塗られている。

1-3-2. 北壁

基礎から35cmの高さまで、レンガの小口積み（幅24cm、厚さ8cm）の段が観察される。その上に高さ70cmのパフサ・ブロックがあり、プラスターが塗られている。この層の上にもレンガが数段積まれている。

この壁には部屋7への出入り口がある。出入り口の幅は0.92cmで、西隅から1.7m、東隅から0.62mに位置している。出入り口の床〔敷居〕には2段の日干しレンガ（上層が長手積み、下層が小口積み）敷かれており、その下には流れ込んだ砂層が堆積している。東壁には、床のレベルから5段の日干しレンガ積みがあるが、これも砂層の上に位置している。出入り口の西側の側壁には直径30～35cmの^{訳註11)}導管の口〔孔〕があり、おそらく部屋7の南西隅に位置する排水坑に繋がっている。

1-3-3. 東壁

3段の日干しレンガ積み、そしてその上のパフサ・ブロックで構築されている。レンガは小口積みで、その下層には厚さ17～19cmの砂層があり、さらに下には小口積みの2段のレンガ積みがある（42～48×22×8cm）。東壁は北壁にもたれかかっていた。

1-3-4. 南壁

構造は北壁および東壁と同じである。

1-3-5. 水槽〔ワイン製造施設〕

部屋の西側には3層の^{訳註12)}石灰の漆喰が塗られた水槽があり、出入り口まで伸びている。水槽は西壁に直に隣接しており、壁との繋ぎ目にも石灰が塗られている。水槽の北壁と南壁に沿った縁は、長手積みのレンガで構築されている。東側の縁は、水平に並ぶ2列（？）のレンガ積みである。水槽の床は、東側の排水口に向かって22cm傾斜している。水槽の東端のほぼ中央、水槽の側面には排水口があり、そこには内径7.5cmの素焼きの導管が挿入されていた。液体は導管を通り、焼成レンガで構築され、内側に厚さ3cmの石灰層が塗られた長方形の受水槽へと流れ出た。受水槽の上の〔に伸びる〕導管は板で支えられていた。

受水槽の壁は階段状になっており、基礎に向かうほど狭くなっていた。受水槽の残存高は1.05mで、西壁だけが完全に残っている。基底部では、貯水槽の大きさは68×82cmである。受水槽のなかに長方形の窪みがあり、この大きさは26～28×39～40cmで、深さは20cm、壁は垂直である。受水槽の基礎から66cmの高さでは、壁には幅4～6cmの棚〔段差〕が造られていた。隅のレンガ積みは整っていない。レンガの大きさは24×10.5×4.5cmであるが、受水槽内

の堆積物のなかからは、小口が15～17cmのレンガも見つかっている。レンガ積みの厚さはレンガ半分であった。土壌の観察によれば、受水槽は床の基礎の下層にある均一な水性堆積層に掘り込まれている。

1-3-6. [出土] 遺物

水性堆積層のなかからは、鉄の釘が1本、鎧札が1枚、直径1.5cmの正方形の穴が開いたブロンズ製のツフス・コイン（図註14）が見つかった。焼成レンガで構築され、壁および床に石灰が塗られた水槽、さらに同じように石灰が塗られた受水槽（図註15）とそれと繋ぐ導管は典型的なワイン製造施設の例であり、ペンジケントやアク・トベなどの遺跡の発掘で知られている。

〔部屋4は〕ワインの貯蔵用の大甕があった部屋7および8とともに、一体となった複合体をなしている。〔この施設は〕発掘された第2期の時期に増築されたものである。

1-4. 部屋6

複合体の南側部分に位置し、東西に細長く、部屋2および部屋5と出入り口で繋がっている。部屋の大きさは5.5×2.25mである。

1-4-1. 北壁

北壁は、発掘されたレベルから2.2mの高さまで残っている。パフサ・ブロックで構築されており、3層のプラスターで覆われている。1層目は、ワラが混ざっている厚さ3cmほどの粗いプラスターであり、2層目は厚さ1cmほどの薄いプラスター、3層目は厚さが最大3mmの薄い漆喰である。この3層目は石膏の床2まで続いていて、床と壁の継ぎ目は隅丸（図註16）となっている。基礎に向かって傾斜している東壁では、隅丸の痕跡が確認されている。

壁の西側部分には、床2のレベルで、部屋2への出入り口が設けられている。〔この出入り口の〕基礎部の幅は80cmである。後期の居住の段階（床3）では、西側の側壁は炉によって壊されている。出入り口には3段の階段があり、部屋2と部屋5の石膏の床に繋がっていた。それぞれの段の高さは23、8、12cmであり、石膏が塗られている。

出入り口から西へ30cm、東隅から20cmのところには、ほぼ正方形の壁龕が壁に造られている。この壁龕の上部は丸くなっている。壁龕の基礎部は石膏の床から〔高さ〕120cmに位置している。壁龕の大き

さは、幅65cm、高さ60cm、奥行き39cmで、プラスター層には白い漆喰と黒い顔料の痕跡が観察される。

1-4-2. 西壁

西壁はパフサ・ブロックで構築されており、部屋5への出入り口がある。南側では、床2から160cmの高さまで残っており、幅は50cmである。北側の幅は64cmで、発掘されたレベルから170cmの高さまで残っている。壁はパフサ・ブロックでできており、水性堆積層によってひどく壊されている。部分的には、北壁のものと同一ようなプラスターが残っている。

1-4-3. 東壁

東壁は発掘されたレベルから170cmの高さまで残っている。部屋5〔部屋6の誤り〕と部屋4を仕切っており、ほかの壁の約1/2の薄さである。プラスターが塗られ、床1のレベルで小口積みのレンガ列が発見された。レンガの幅は24～25cm、高さは8cmである。壁には崩壊した壁龕があるが、おそらくこの幅は145cm、奥行きは55cmであったと思われる。

西壁を除き、すべての壁では赤色と青色の顔料の壁画の痕跡が確認された。さらには、壁画の破片は、床2の床のレベルから、床1と床2の間の堆積のなかを含め、最上層にいたるまで見つかっている。

1-4-4. 部屋6の堆積

下層の床1はもろく、有機物の混入が多いため、記録が難しかった。〔床1は〕部屋の東側の部分のみで明確に観察できた。この床面では、断面が長方形を呈する、鍛造製のロッド〔棒状のもの〕を整形して作られた鉄製の火打石が発見された。床の造りは部屋3の床2の上塗りと同じである。このレベルでは、東側の壁龕の基底部に、次の〔上層の〕床のレベルまで、高さ30cmのレンガとパフサ・ブロックが積まれている。下方〔下層〕には4段からなる焼成レンガが不規則に積まれていた。レンガの大きさはさまざまで、27×15×6.5cmと35×21×3.5cmの大きさのレンガが確認された。レンガの上層〔とパフサ・ブロックとの間〕には10cmの層があり、そのなかからは、漆喰と赤色の顔料が塗られたプラスターの破片が見つかった。1段目のレンガの間には砂が詰まっていた。

部屋の残りの部分では、床の基礎は中密度の〔や

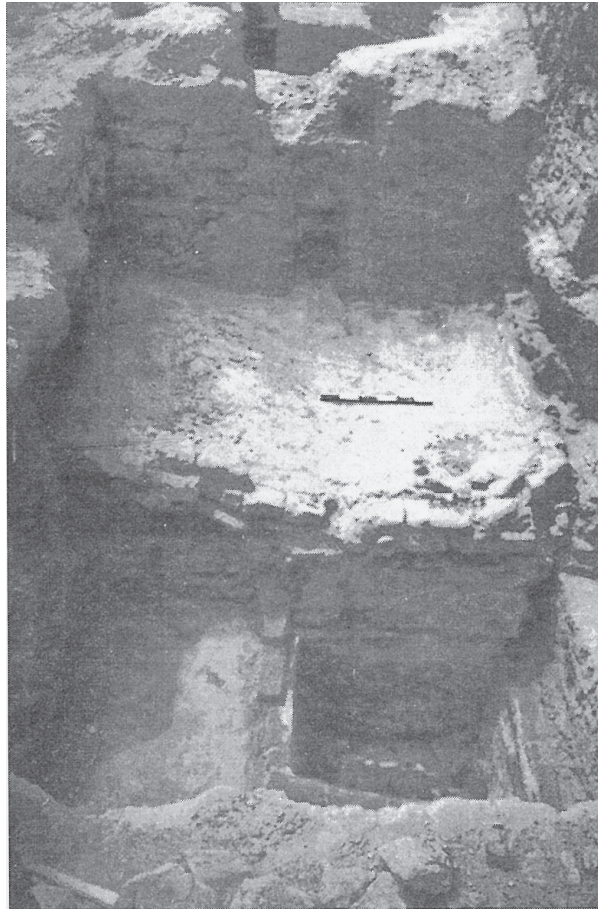


図 13. 部屋 4：東より

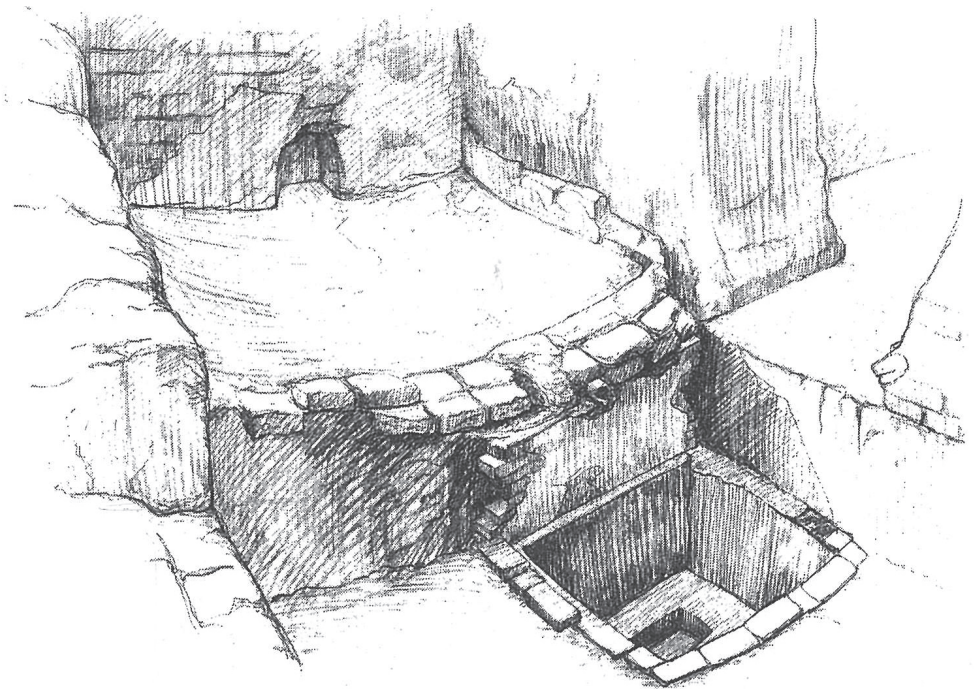


図 14. 部屋 4：復元図

や締まった] パフサとレンガの破片で構築されており、この上に、ひどく壊れているものの、黄色の石灰が塗られた床2が造られている。[この床は] 部屋2および部屋5の石膏の床と一致している [同じである]。この床面では、壁龕のなかに高さ15cmのスーファが設置され、厚さ1cm以下の2層の石灰が塗られている。

石灰プラスターと床2との継目の部分は隅丸となっている。スーファは [側] 壁面から5cm張り出している。床2は、レンガが混在する厚さ80~85cmの泥の水性堆積層で覆われている。この上層には、3cmの後期の居住層があり、同じように、ほとんど現在の地表面のレベルにまで達する泥の水性堆積層で覆われている。

1-5. 部屋5

複合体の南西部に位置し、大きさは26×2.5mで、東西に細長い通路である。部屋3および部屋6と出入口で繋がっている。

1-5-1. 北壁

北壁は発掘されたレベルから [高さ] 2.6m まで残っていた。積み方は部屋3の北壁と南壁の積み方と同じである。つまり、3段のパフサ・ブロック、そして1段目と2段目の間にはレンガが積まれている。下から上に向かって、パフサ・ブロックの高さは80、72、85cm、幅80~105cm、レンガの大きさは41×20×8cmである。壁には2層のプラスターがある。厚さ1.5cmのワラが混ざった粗いプラスター層

と0.5cmの薄いプラスター層で、[この層には] 漆喰の痕跡が残されている。

壁の中央部には部屋3との出入口が2つあり、その位置は部屋 [3] の南西側と南東側の出入口の位置に対応している。両方の出入口 [の上部] は半円形であり、木製の仮枠によって造られたアーチがあり、壁面に10cmほど埋め込まれている [2つの出入口 [の上部] には、木製の仮枠によって造られた半円形のアーチがあり、側壁に10cmほど埋められている]。アーチの側壁面にはプラスターと漆喰が塗られている。出入口の側壁面の残存状態は悪い。北西側の出入口の基礎部のレベルでの幅は125cm、アーチの迫元の部分での幅は116cm、発掘された面からの高さは195cm、アーチの内部の高さは40cmである。北東側の出入口の基礎部のレベルでの幅は122cm、床1からの高さは225cm、アーチの内半径は48cmである。

北西隅から15cmの地点には、部屋3と同じように垂直の柱の溝（柱穴）があり、幅は29cmである。

1-5-2. 西壁

西壁では、レンガと粘土紐状のパフサが混在して積まれている。上層の床に、大きさ46×8cmのレンガを1段、長手積み（？）に積んでいる。さらにその上は、大きさ20×8cmのレンガの小口積みの6段とその間に挟まれる厚さ17~18cmのパフサ帯によって壁が構築されている。壁にはプラスターが塗られている。

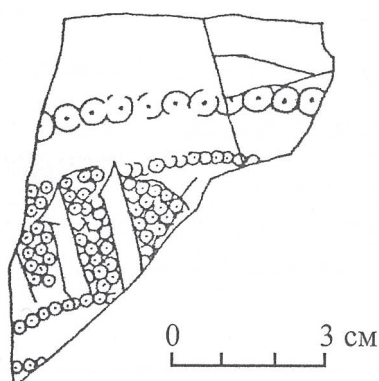


図 15. 部屋5：擬似銘文が記された青銅製鉢の薄い側面（？）の破片

1-5-3. 南壁

南壁は、発掘されたレベルから高さ2mまでに残っていたが、ひどく破損していた。3段のパフサ・ブロックからなり、2段目の高さは72cmである。南側では、南西隅から10cmのところに、北壁の溝と同じような垂直の柱用の溝（柱穴）がある。幅は19cm、奥行きは18cmである。東側部分では、南東隅から4m離れたところにレンガ積みが5段確認されているが、これはおそらく修理の痕跡であり、その上に厚さ4cmほどの粘土層が塗られている。レンガの大きさは38×22×7cmである。

1-5-4. 東壁

東壁には部屋6への出入り口がある。床2のレベルで出入り口の幅は107cmである。[出入り口の]北側の壁は高さ200cmまで残っており、幅は50cmである。南側の壁は高さ155cmまで残っており、幅は86cmである。出入り口の北側の側面ではレンガの段が見えており、[これは]北壁のレンガ積みが続いている。側壁の角は斜めに切り取られているが、これが崩壊の結果であるかどうかは明らかでない。床2のレベルでは、出入り口の側壁面で、漆喰の痕跡が残る、大きさ30×30cm、高さ35cmの長方形の掘り込みを検出した。

1-5-5. 部屋5の堆積

部屋の東側部分では、長さ約5mの範囲で、硬く不均質な粘土造り[土間]の床1が確認された。[この床は]部屋3の床2に対応している。この床面では、北壁の西側の出入り口の中心線から1m東には、部屋の中央に口縁を下にした大甕が埋められており（深さ20cm）、タンディル[パン焼き竈]として使われていた。穴の側面には[厚さ]10～12mmの粘土が塗られていた。北壁の東側の出入り口の床1は、厚さ20cmほどの灰溜まりで覆われており、おそらく部屋3から続いているものと思われる。北東側の出入り口の3.2m東では、床が高さ25～30cmのレンガで構築されており、プラスターで覆われた段差があり、この段差は部屋全体を横切っていた。このように高くした床は、この漆喰の痕跡が発見されている出入り口まで続いていた。

床1は床2で覆われているが、[床2は]よりもろくて柔らかく、白っぽい薄い層である。床2は灰溜まりの上に造られており、東側の部分はローム土

で上塗りされていた。^{訳註18)}東側の出入り口では、部屋6および部屋2のような石膏の床に変わっている。床面では、ヒスイ[翡翠]の十字架、丸いカーネリアン[紅玉髓]のビーズ、象牙の小指輪、鎧札が発見された。とくに興味深いのは擬似銘文が書かれた薄手の青銅製の鉢(?)の破片で、背景は円形の模様で埋められている(図15)。

部屋の北側部分の床は厚い泥の水性堆積層で埋まっており、南側部分には壁の崩壊によって生じたパフサ・ブロックとレンガが堆積していた。この堆積物は、部分的に北壁にまで伸びており、その場所では北壁も崩壊していた。

東側の出入り口のおよびこの西側にある空間の堆積物の上層部分は、崩落した天井のレンガの堆積であり、一部に中密度の[やや締まった]水性堆積層が混じっていた。堆積の下層では、床2より70cm上のレベルで、最大で厚さ10cmほどのもろい炭化物と砂の層が確認された。[これは]部屋6の出入り口に向かって薄くなり、部屋6の後期の居住レベル[時期]に対応する焼土層で覆われていた。

1-6. 部屋1

[大きさ]8×2mの細長い部屋であり、部屋2および部屋7の北側にあり、部屋8とは東側[西側の誤り]に位置する出入り口で繋がっていた。部屋の北壁の下部はパフサ・ブロックで構築されており、ヴォールトの^{訳註20)}迫持ちの部分からレンガ[積み]になっている。これに対して、南壁はパフサ・ブロックの1段目だけは良く残っているが、これより上の部分、とくに壁の上部は崩壊している。

[北]壁の中央部では、パフサ・ブロックを掘り込んだ、部分的に残っている壁龕が見つかった。壁龕の最大高は40cm、奥行き26cm、基底部の幅50cmで、上部は丸く、基底面はパフサ・ブロックの1段目と2段目の間の水平の目地と一致している。基礎から20cmのところで、壁龕の縁は、わずか6cmの幅で、壁面に埋設し、丸みをおびている。壁龕の内面にはプラスターが塗られていた。

1-6-1. 部屋1の堆積[状況]

表土の下では、崩落したヴォールト状の天井が確認された。堆積状況、そして東壁で支えられている斜めに積まれた断片[迫持ち]に基づけば、天井の型式はヴォールト[天井]と結論付けることができ

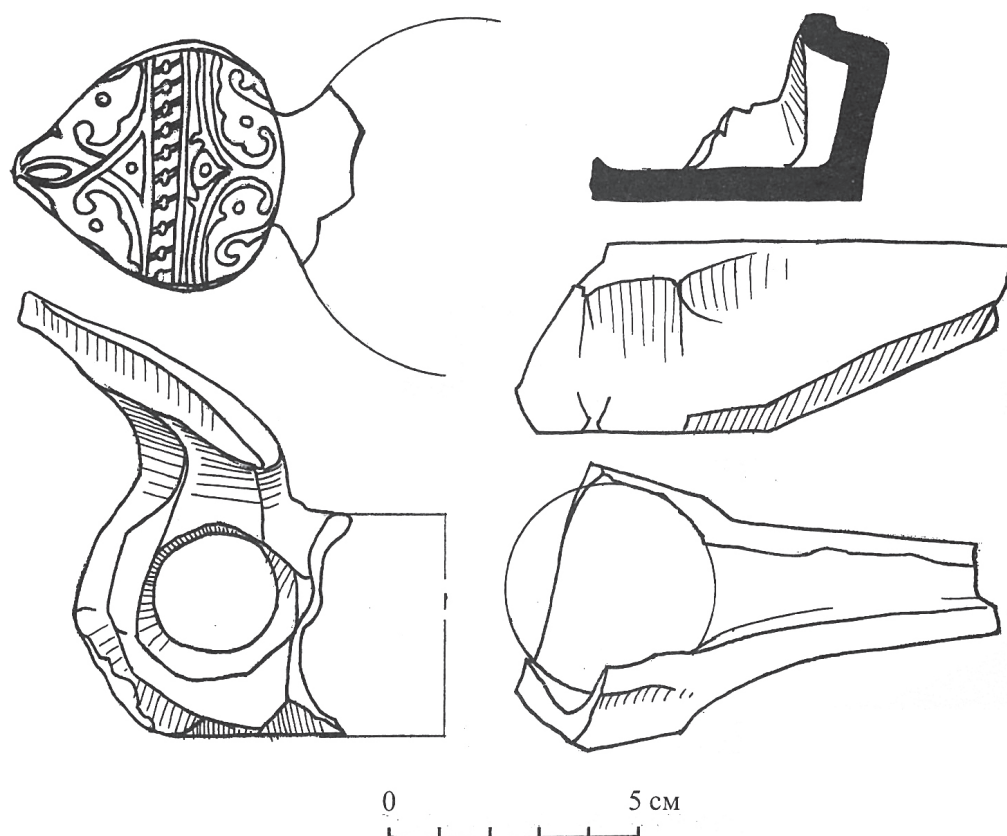


図 16. 部屋 1：施釉ランプ

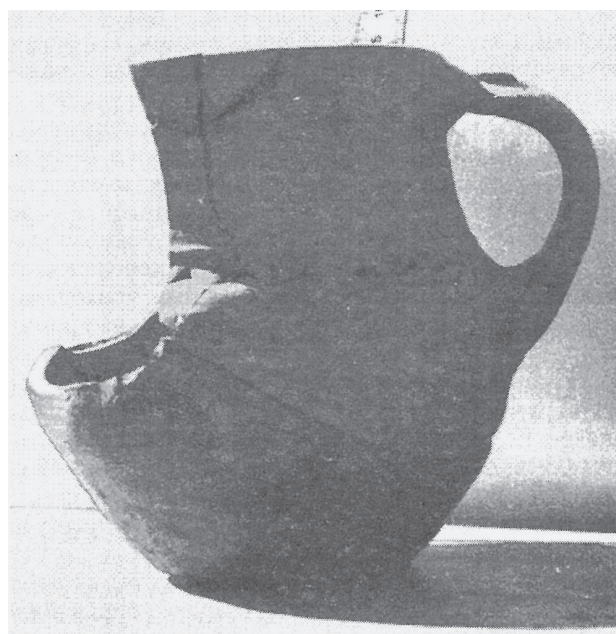


図 17. 部屋 1：碗－水差し

る。レンガの堆積の下方の通路の一部には、1段の日干しレンガが敷かれていた。この舗装された部分の高さは、おおよそパフサ・ブロックの2段目の半分の高さに一致している。[この]堆積の下層には、厚さ約50cmの水性堆積層があり、その高さで部分的に壁を破壊されている。

水性堆積層の下方には、[厚さ]50～60cmからなるいくつかの文化層がある。コインや土器、動物骨、焼成レンガの破片、金属製品などが混在する薄い灰と炭化物の層、および点在する腐植土の集積からなっている。この層から見つかった遺物は以下の通りである。トゥルギシュと「ツフス [ワナントマーフ]」のコイン、土器（施釉土器を含む：暗緑色の釉が掛けられたランプ、碗、「踵」の形をした茶色の釉が掛けられたランプの破片、底に渦巻型のロゼット [円花] が描かれた鉢など）、鉄製品（台形の鏃、キノコ型の頭部の釘、穴とピンがある板状の製品、鎖の環）。

無釉陶器 [土器] の代表的なものは以下の通りである。スタンプ装飾が施された台^{訳註21)}（蓋？）の破片、本体 [胴部] に楕円形の凹みを持ち、頸部の下に三角形の装飾が刻まれたコップ－水差し、縁の部分が焼成を受けている粗製の「複数の」鉢 [兼] ランプ皿、または熔鋳用のひしゃく、芯用の口を持つ鉢型ランプ、複数の手捏ね製の鍋（球状の胴部と円弧状の把手を有し、胴部への貼付け場所には楕円形の凹みがあり、波状の口縁部を持つ）、半球状のボウルなどである（図16～17）。

この新しい文化層の前の時期には、部屋は一時的に使用されていないが、その時期は建物全体からみれば、第1期と第2期の間の時期にあたる。おそらくこの使用が停止していた時期は第1期と同じように長くはなかった。第1期および第2期の境界は明確な床面で区分することはできないが、部屋の堆積の断面では明確に観察される。このレベルは第1期の上層に対応する。第1期の文化層の厚さは、下の床から15～20cmであり、遺物は発見されていない。第2期の初めには、部屋7および部屋1の間の敷居にレンガ積みによる段差が設けられた。部屋7側からは、日干しレンガ10個を長い面を出入り口に向けて角度をつけて積み、部屋1側からは出入り口の端にレンガを2段積み、中央部にはレンガを1段積んでいる。この下に、レンガの破片と小石からなる基礎がある。ここで土製 [素焼き] の浅い皿の破片も

見つかっている。おそらく、部屋1の第2期の文化層が堆積するにつれて敷居の高さを上げていたのであろう。

1-7. 部屋7（図18～19）

部屋2の東側にある。南北に細長く、大きさは2.5×6.4mであり、部屋1および部屋4と出入り口で繋がっている。壁の下部はパフサ・ブロックで構築されており、パフサ・ブロック間にレンガ（48×24×10cm）が1段ずつ挟まれている。西壁には、レンガ5段からなるヴォールトの迫元が観察された。その上のヴォールトの [迫持ちの] レンガが始まる場所からは壁が残っていなかった。

西壁の表面にはプラスターが塗られており、煤の痕跡が残っている。この壁では、上部が楕円形をなし、奥行き18cm、煤がこびりついた壁龕が見つかった。もともとの高さは1.3mであったが（図19）、後に壁龕の底面から高さ55cmまでレンガを積み、表面にプラスターを塗っている。

[この] 通路 [部屋7] では、数面の床が検出されている。上層の床1は、通路部分の数か所にしか残っていない。床1は、壁龕の基礎より20～30cm低いレベルに位置していた。通路の全面は発掘されており、一面にたまった塩類の白い層によって [この] 床 [の存在] が確認できる。出入り口の東側の近くには朽ち果てた筵の痕跡があった。北側部分の床とその直上の堆積のなかからは、金属製品（環、指輪、釘3本、板状製品）と薄緑色の釉が掛けられた土器 [施釉陶器] の碗の破片が見つかった。

床3は通路の中央部でしか確認できない。[床3は] 厚さ7～10cmの「舌」状になった小石 [砂利] 層で、土から析出した塩で覆われている。床は北側に向かって高くなり、床2のレベルと繋がっている。北側の出入り口には小石はなく、南側に向けて「舌」の幅は100から50cmまで狭くなり、南側の出入り口から [北] 2m付近で徐々に消えてしまう。2つの壁沿いにはレンガの破片が混在する、柔らかく、掘り返された土があり、南側部分には緻密な [固く締まった] 基礎があった。

小石 [砂利] の層の下には厚さ10～15cmの固い土の層がある。床4には床3と同じように小石 [砂利] が敷き詰められているが、20cm長い。その上に灰溜まりがあり、部分的に西壁の崩壊した部分に入り込んでいる。さらに上層には、厚さ15cm以下の濃茶



図 18. 部屋 7：南より

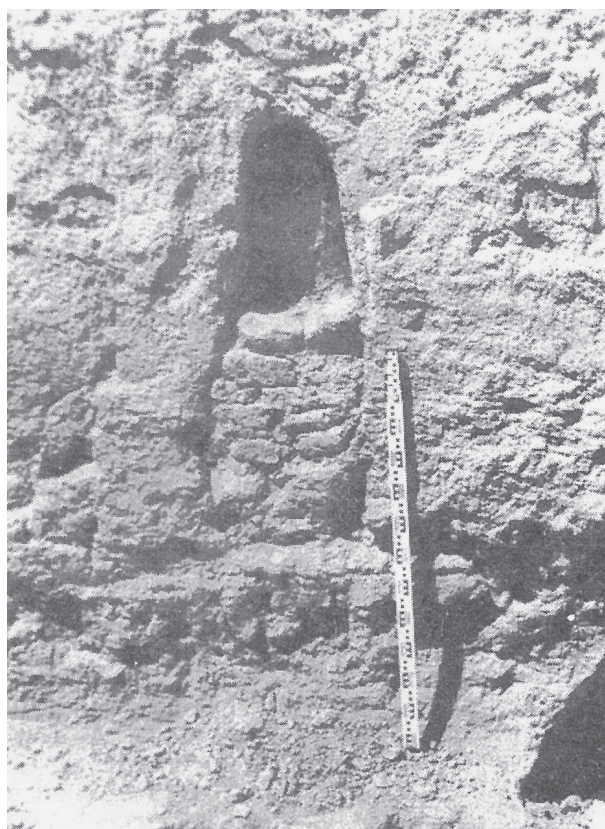


図 19. 部屋 7：西壁の壁龕

色のローム土の泥の水性堆積層がある。壁沿いには掘り返された柔らかい土があり、そこからは遺物は出土していない。下層の床5は固い床面であり、壁に向かって低くなっている。そこには、直径30～60cm、深さ15～30cmの2列の穴が掘られていた。全部で穴は18個発見され、西壁沿いには7個は、東壁沿いには11個あった。おそらく、ほかの穴は床3のレベルから掘られた2つのゴミ穴によって壊されたのであろう。部屋の南側部分では「ツフス〔ワナントマーフ〕」タイプのコインが発見された。通路には2つの出入り口があった。南側の「出入り口」は幅93cmで、部屋4に繋がっている。北側に位置する〔出入り口〕は部屋1に繋がっており、幅93cmである。〔北側の出入り口は〕床の上面に小端平張り積みでレンガ（22×8×?cm）が1段積みまれている。

1-8. 部屋8

部屋1と同じ軸線上に位置していて、西側〔東側の誤り〕にある幅1.5mの出入り口で繋がっている。部屋の大きさは2.6×5.5mである。北壁の下部は日干しレンガで構築されている。南壁はパフサ・ブロックでできており、基礎の部分にレンガが1段積みまれている。壁はパフサ・ブロックのレベルまで残っているが、この高さではウォールト〔天井〕の迫元は確認されていない。北壁の隅から5.5mの地点では、北への出入り口（?）の側〔壁〕面が見つかった。その前面には部屋を横切るように日干しレンガが数段積みまれている。

東壁では、出入り口の床に敷居の横木があった（図20）。横木の残存状態は良くなかったが、固く締まった堆積であるため、形状を推定することが可能である。大きさは10×15×155cmの長方形の断面をした横木であり、部屋8側の敷居上面には約3×3.5cmの出っ張りが残されていた。それゆえ、扉は部屋1側に開いたものと予想できる。また、同じく横木の圧痕によって、中央部が摩耗していたものと想定できる。南壁沿いには、基盤となる床では、大きさ30×40cmのスーファが構築されているが、床2で覆われている。床2のレベルでも、南壁沿いには幅71cm、高さレンガ1段分しか残っていないスーファがある。レンガの大きさは20×38×9cmである。

この部屋では、床1あるいは床2〔のレベル〕で2列の大甕が埋められていた（図21）。各列には、

高さ65～85cmの大甕が7個ずつあった（図23）。口縁は同じ型式であり、外側に向かって外反し、先端部は尖っているか、丸みを帯びている。口縁部の外側の上面の広い部分には、円形のロゼット〔花文〕と数種類の格子状のスタンプの痕跡がある（図24）。胴部の底部に近い部分には注ぎ出すためのような孔がある。口縁部の1つには、焼成前に記されたソグド語の銘文が残されていた。

1-8-1. 部屋の堆積

床2には、緊密なレンガ堆積、そして、その上に水性堆積層があって、床2は人が住んだ最後の層である。このレベルで床に大甕が埋められた。部屋8で大甕が発見されたことで、部屋7の2列の穴が、かつて埋められていた大甕の痕跡であると断定することができた（図18、22）。

おそらく、部屋8は部屋4および部屋7と一体となった複合施設であった。部屋4はワインの製造施設^{図註23)}であり、ほかの2部屋はワインの貯蔵所であった。部屋7では、かつて置かれていた貯蔵容器の〔埋められた〕痕跡だけが見つかるが、部屋8には容器そのものもあったので、おそらく〔この2つ、つまり部屋7と部屋8の〕貯蔵所は、同時には機能していなかったものと思われる。

1-9. 部屋9

部屋3の西側にあり、幅1.7mの出入り口で繋がっている。部屋9の幅は3.15～3.20mであり、長さ12mまで発掘されている。部屋9は部屋3、5、おそらく部屋8に直交して位置しており、遺構〔建物群〕の西側の境であろう。

部屋9の東壁の構造は不均質である。部屋3への出入り口の南側にある部屋の一部はパフサ・ブロックで、南側部分はレンガで構築されている。壁のパフサ・ブロックの部分では、4本の柱が発見され、そのうちの2本は部屋5の壁の延長線上にあり、その間の距離は2.5mである。柱の幅は30cm、26cm、25cm、奥行き13cm、11cm、21cmで、壁面に埋められていた。木製の柱は横木〔水平に置かれた板〕の上に設置されて、この横木は1段の焼成レンガ積みの上に載せられた。

南壁の下部はパフサ・ブロックで、上部はレンガで構築されており、南へ通じる幅1.7mの出入り口がある。西壁はレンガの小口積みである。基礎の部



図 20. 部屋 8：東壁、出入口の敷居の横木



図 21. 部屋 8：大甕：西より

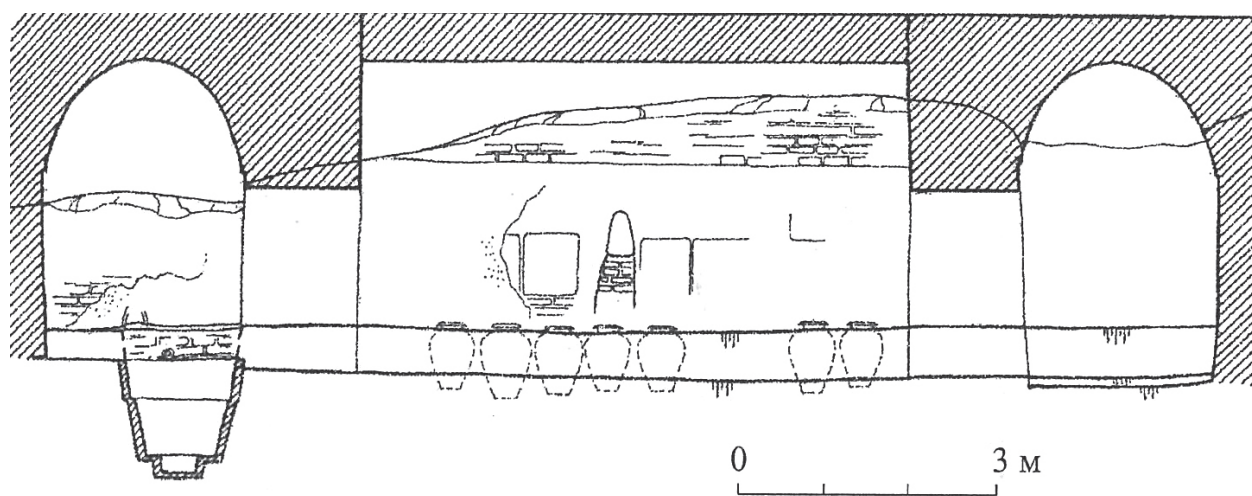


図 22. 部屋 7：復元図

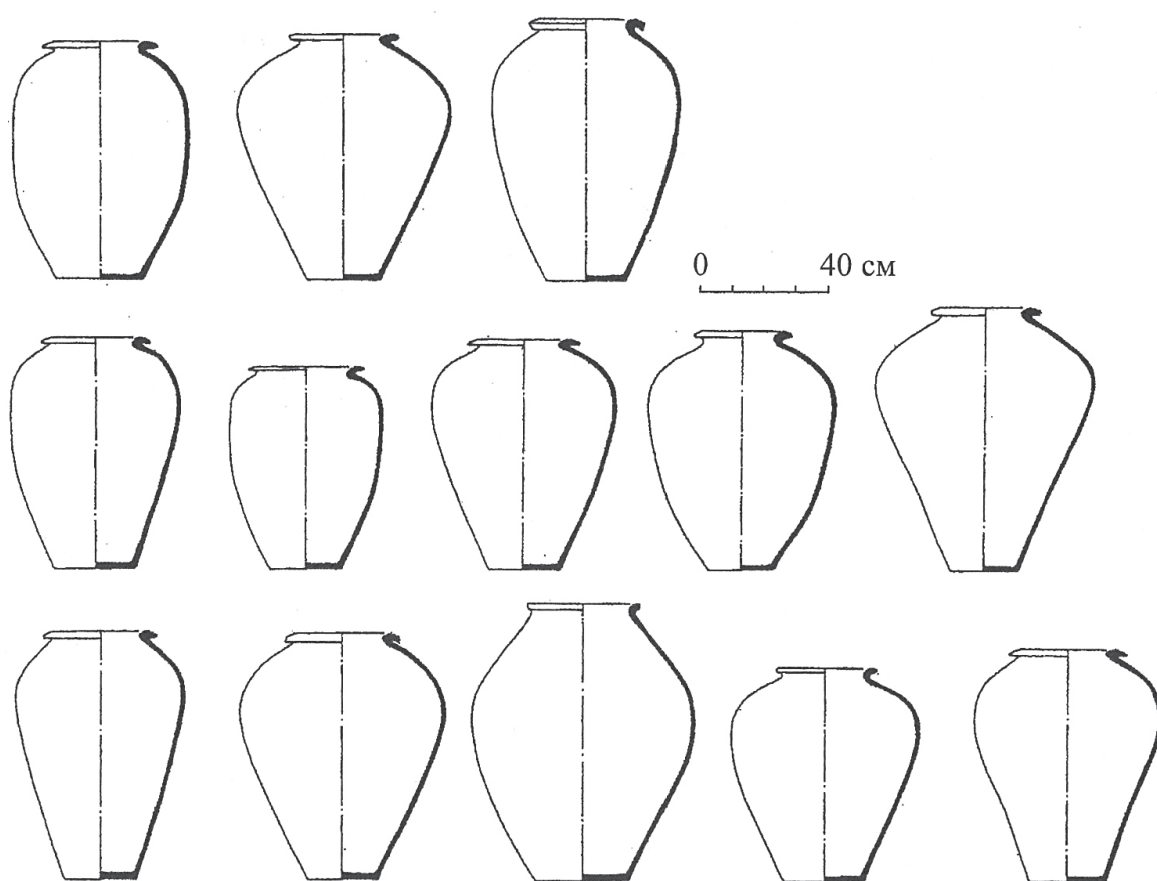


図 23. 部屋 8 出土の大甕、復元図

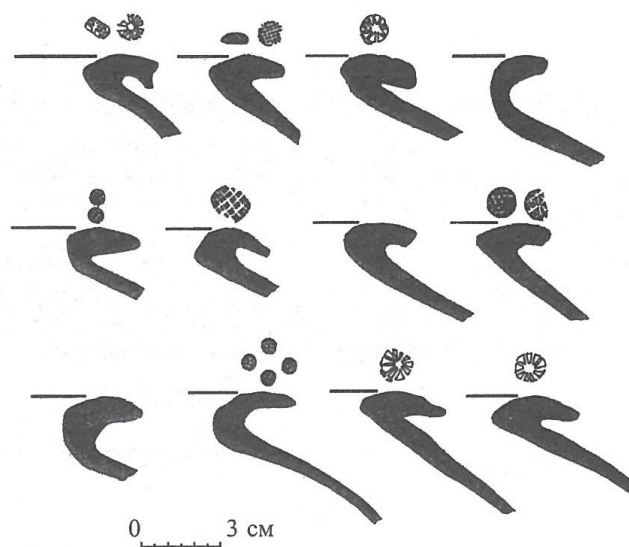


図 24. 部屋 8：スタンプ装飾が施された大甕の口縁

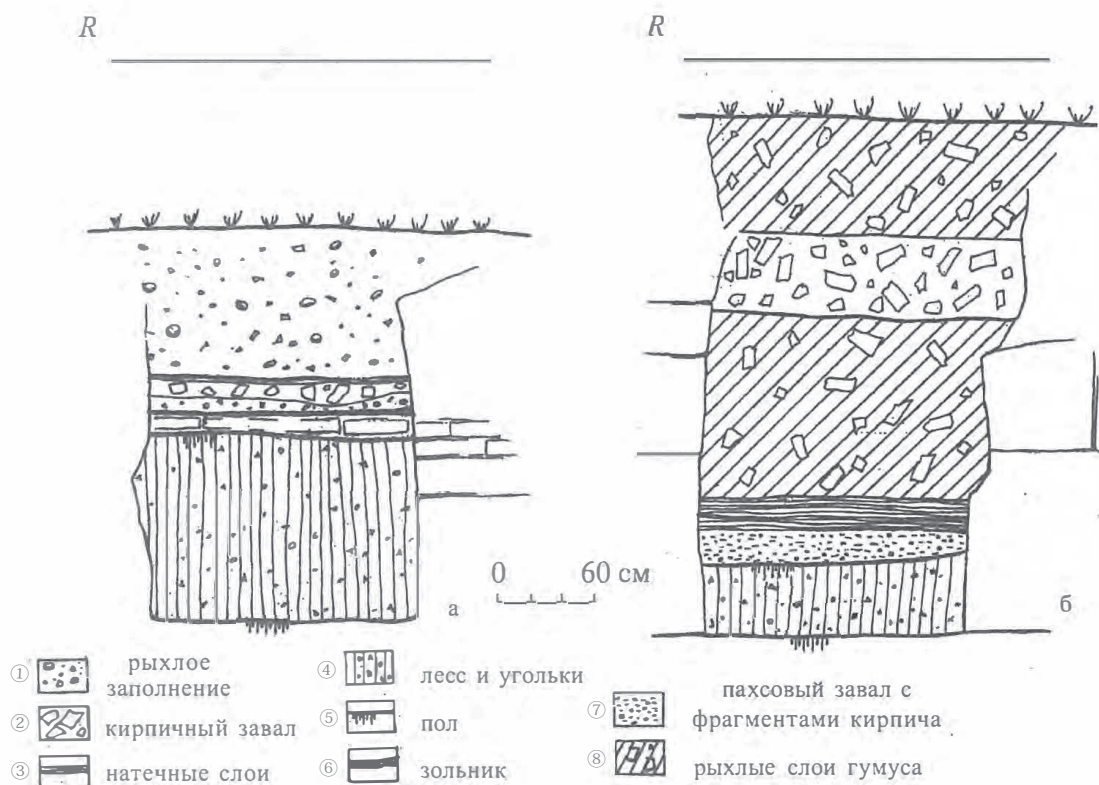


図 25. 部屋 9 の堆積状況：a. 南側の出入り口の堆積状況、b. 北側の出入り口の堆積状況
①柔らかい堆積、②レンガの堆積、③泥の水性堆積層、④レス土および炭化物、⑤床、⑥灰溜まり、
⑦レンガの破片が混ざったパフサの堆積、⑧柔らかい腐植土層 [凡例の丸数字は山内加筆]

分では、長手積みのレンガ（ $20 \times 39 \times 5$ cm）が1段積み重ねられており、[壁の] モルタルの厚さは、下の段の2 cmから上の段の23 cmまでと、厚さを増している。壁の北の部分はひどく崩壊しているが、おそらくパフサ・ブロックで構築されていたものと思われる。パフサ・ブロック [の壁] とレンガ [の壁] が接するところでは、壁のなかに埋め込まれている1本の木製の柱が発見された。堆積のなかでは数面の床が確認され、その間には泥の水性堆積層およびレンガの堆積が挟まっている（図25）。

1-10. 部屋19および20

複合体Aの部屋1の北側には、隣接する部屋19および20がある。この2つの部屋の特徴は、複合体のほかの部屋と繋がっていないことである。部屋19では、東側に幅2.05 mの複合体の外側への出入口が位置していたと想定することができる。当初は、

西側に出入口がなく、この2つの部屋は独立していた。部屋19と北側に平行して位置する部屋20は、西壁に沿ったスリップ式〔スライド式〕の出入口で繋がっていた。出入口の幅は1.25 mで、部屋19および部屋20の間の壁の厚さは1.45 mである。

部屋20の長さは5 mで、幅は〔部屋19と〕同じである。すべての部屋の壁は、高さ75～80 cm、幅0.7～1.06 mのパフサ・ブロックで構築されていた。壁にはプラスター層がなかった。また、ほかの部屋では、プラスターの下からパフサ・ブロックにつけられたナイフによる切り込みが見つかっているが、これも観察されなかった。南壁のみが例外で、下部でプラスターの痕跡が観察された。この壁にはファサード〔外壁〕のように傾斜があることから、部屋19と20は、後になって既存の部屋1～9の建物に増築されたものであると考えられる。

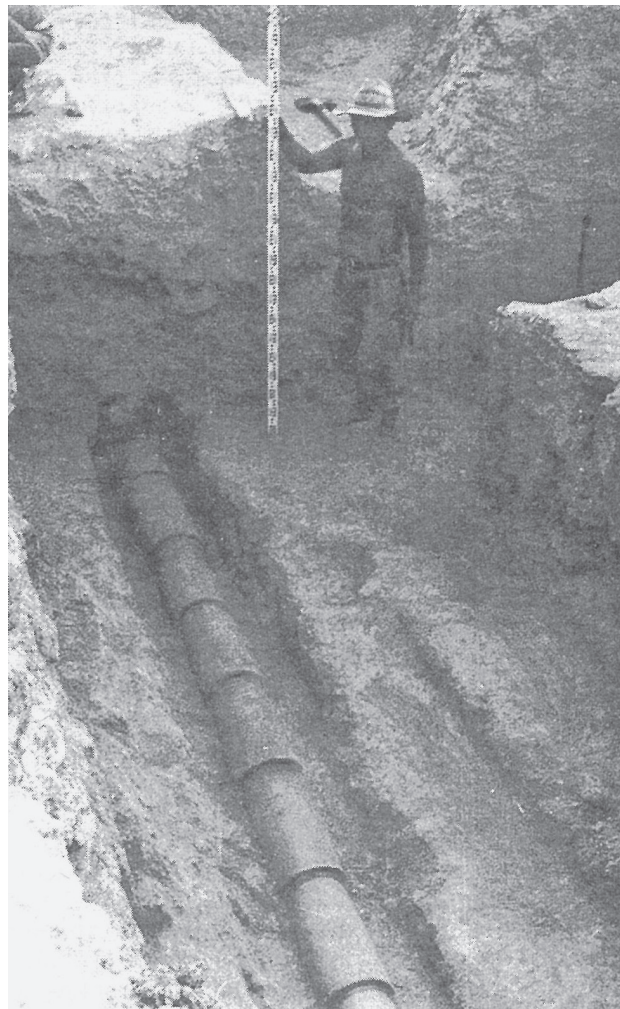


図 26. 部屋 19：床の下の導管の列、西より

1-10-1. 部屋の堆積

部屋19では、数面の床の中央部分には凹みがあるが、このような凹みは屋外の層の特徴である。床[と床]の間には粘土の固く締まった基礎があり、レンガと混在することもある。上層の床には、灰溜まりが数層ある。このレベルでは、西壁の南側部分に出入りが設置された。灰溜まりの層は、壁の残骸を覆っている。部屋の用途については、最下層の床の下で検出された導管の列によって説明することが可能である。導管の列は直径28cmと22cm、長さ50～54cmの9本の大きな土製〔素焼き〕の土管からできている。5mで8cmの勾配が付けられていた（図26）。導管の接続方法、そして確認された線〔方向〕の双方の事実は、〔これが〕壁の後ろ〔東側〕の通路から部屋の西側にある庭へと水を供給する導管であることを示している。当初、独立していたこの部屋20は、複合体の倉庫または門番の部屋であろう。

1-10-2. 部屋20の堆積

この部屋では、基礎部の床までは発掘されていない。発掘された床の最下層には混じりのないレス土層〔黄土層〕がある。この上層には丸みを帯びた石の堆積があり、さらにレンガの基礎がある。上層の床の灰溜まりのなかからは、数多くの鉄製の鎧札、鉄のナイフが見つかった。

2. 複合体 B（図27～28）

2-1. 部屋21

部屋20の北側に位置し、厚さ2.2mの壁を共有している。正方形のプランの部屋であり、大きさは5.02×4.97mである。壁はパフサ・ブロックで構築されており、その表面はプラスターとの接着を良くするためにナイフで突いてある。粘土のプラスターの上には、顔料層をともしなわな薄石灰の漆喰が塗られている。部屋の3方の中央部には奥行き1m、幅2.2mの壁龕が設けられ、同じくプラスターと漆喰が塗られている。部屋は、南側の複合体〔複合体A〕の部屋2に類似する十字架型の平面プランである。

おそらく、隣接する部屋と同じように壁龕はアーチ形であった〔と思われる〕が、残っている高さではアーチの構造は検出されなかった。部屋には2つの出入り口があり、西壁の中央部には幅1.8mの西側への主要な出入り口、そして西壁沿いには幅70

cmの北側へ抜ける出入り口があった。主要な出入り口に向かい合う壁龕の床には、焼成レンガ（24×10×4cm、34×18×？cm）が敷かれていた。部屋は、基礎部〔最下層〕の床のレベルまでは発掘されていない。おそらく、部屋の中央部では、床面はそれ以前の構造を覆っており、高くなっている。部屋22への出入り口の2層の床は北に向かって下っている。

2-1-1. 部屋の堆積〔状況〕

表土の下では、崩落した日干しレンガ造りの天井の残骸が見つかっている（図29）。上下を向いているレンガ〔の並び〕は、〔それぞれ〕ほかのレンガの並びに対して一定の角度で配置されていた。崩落した天井のレンガは、石膏プラスターの2つの水平な層の上に載っていた。これは、おそらく〔天井の〕内面の上塗り、もしくは上層の床〔面〕であろう。2つの水平な層の下には厚さ60～70cmの日干しレンガの堆積があり、このレンガの堆積は上層の床の上に位置していた。

2-2. 部屋22（図30～31）

部屋21の北側に位置し、出入り口で繋がっている。部屋の間の壁の厚さは2.4mである。北壁および南壁では、部屋の長さはそれぞれ5.02m、5.07mであり、幅は東壁で3.57m、西壁で3.45mであった。すべての壁はパフサ・ブロックで構築されており、高さ3段目まで残っている。パフサ・ブロックの高さは約70cm、幅は65～67cmで、粘土のプラスターが塗られ、この上には漆喰層が残されていた。北壁では、パフサ・ブロックの上層に4段のレンガ積みが残っていた。レンガ積みは隣の部屋のヴォールトの迫元と同じ高さから始まっている。平面〔的に見ると、断面〕では、壁龕の周りでは、レンガ積みがパフサ・ブロックの側面から〔内側に〕3～5cmはみ出している。残存する壁の最大高は、基底面から3.25mである。部屋の東側全体は高さ0.35～0.38mのU字型のスーファによって占められているが、西壁沿いにある北側と南側への出入り口部分にはスーファがない。スーファの幅は、北壁沿いが1.10m、南壁沿いが1.05m、東壁沿いが2.6mである。この部屋には、北側と南側に通じる2つの出入り口があった。部屋21と繋がる南側の出入り口は幅85cmで、2段の階段があった。幅〔踏面〕は20cmで、下段の高さ

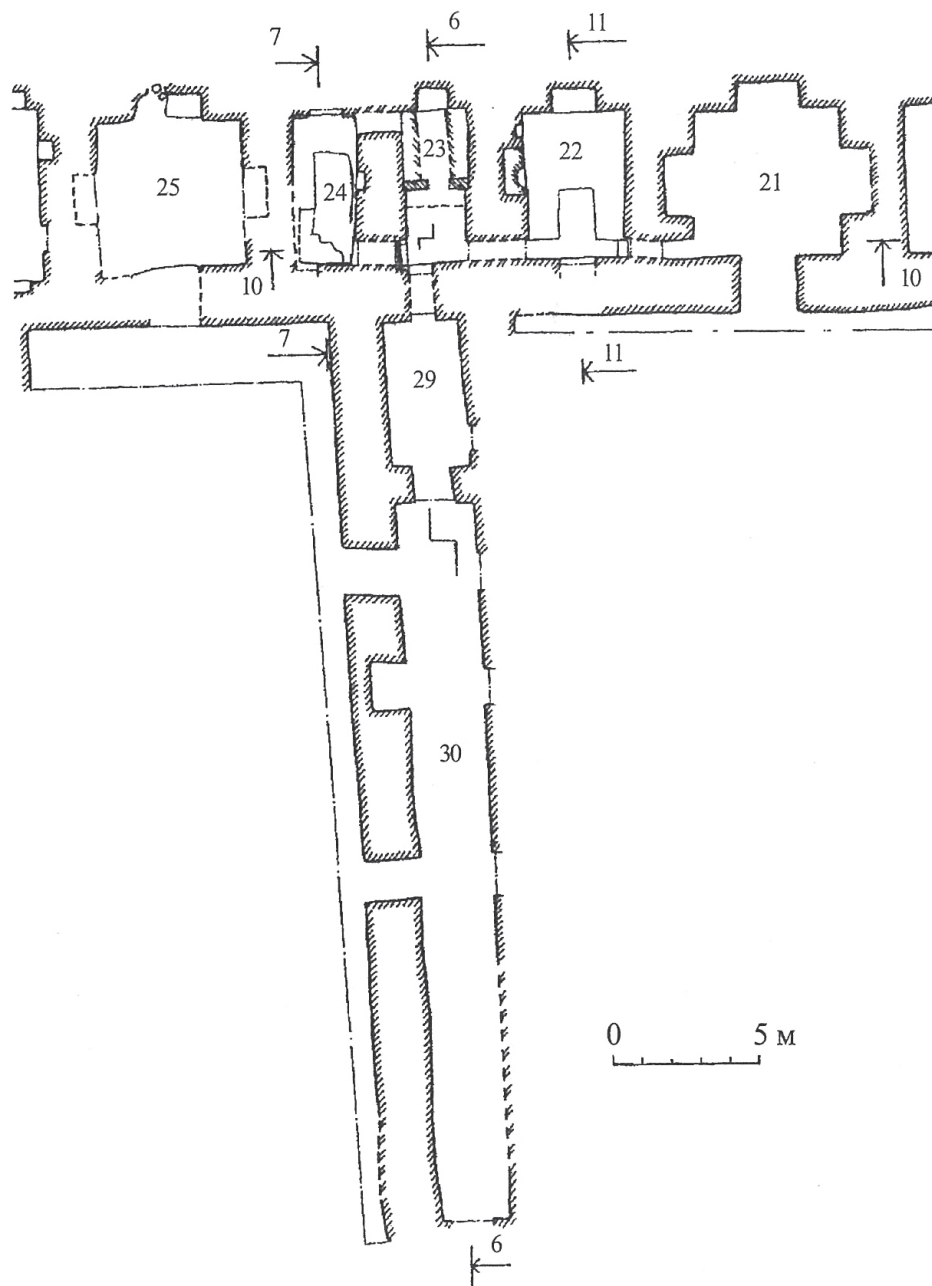


図 27. 複合体 B：平面プラン

は30cm、上段の高さは30cmであった。迫元までの出入り口の高さは1.7mで、天井は残っていない。北側にある部屋23への出入り口の幅は70cmであり、階段はない。天井は残っておらず、迫元までの残存高は2.25mである。

東壁の中央部には、奥行き0.78m、幅1.4mの壁龕が設けられ、壁龕の床〔基底面〕はスーファの上面〔の高さ〕と一致している。北壁の中央部にはもう1つの大きな壁龕がある。この壁龕の幅は1.5m、

奥行き0.7m、高さ2.05mである。壁龕の上部はヴォールト状で、小口積みの6段のレンガで構築されている。アーチの弧はレンガの積み始めより高いレベルに位置している。その後、壁龕はレンガで埋められ、表面にプラスター、漆喰が塗られている。〔この〕埋めた〔壁龕の〕なかに、新たに上部が半円形をした小さな壁龕が造られている。この新しい壁龕は、奥行き26cm、幅60cm、高さ35cmで、床から〔高さ〕1.17mに位置していた。この壁龕の東側、スー

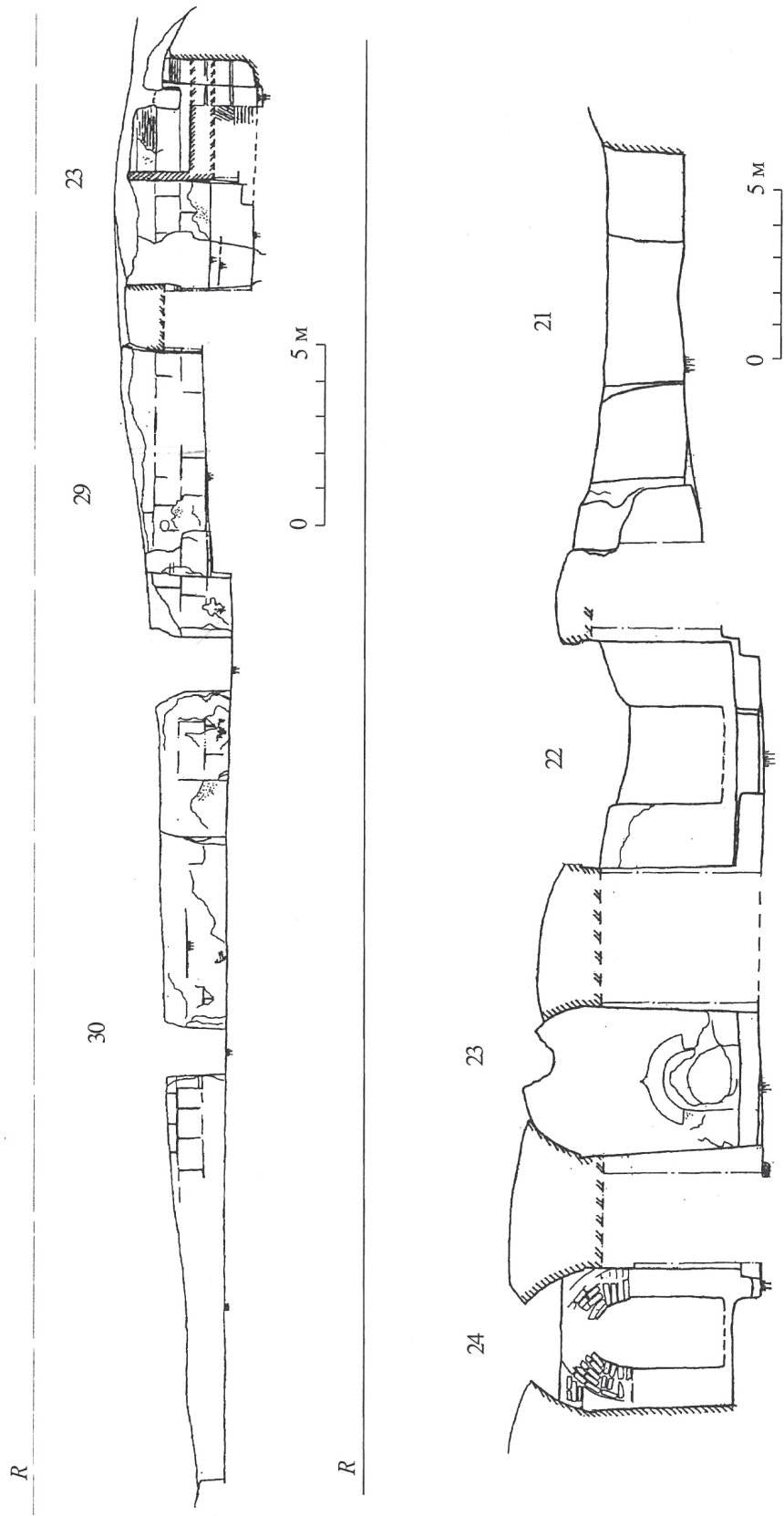


図 28. 複合体 B : 断面図 6-6、10-10

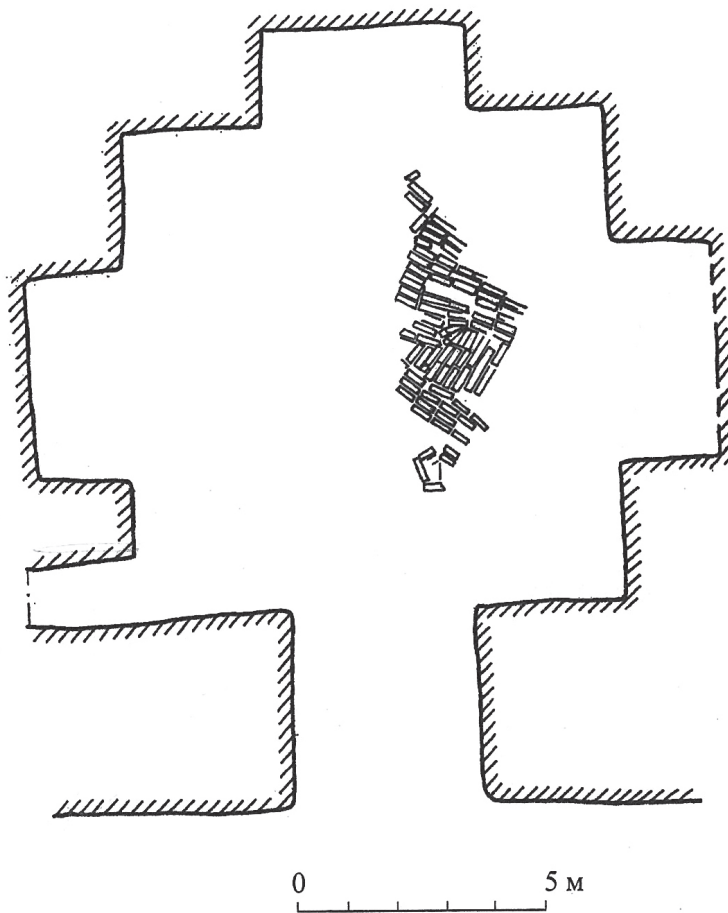


図 29. 部屋 21：落ちた天井の一部を含む平面プラン

22

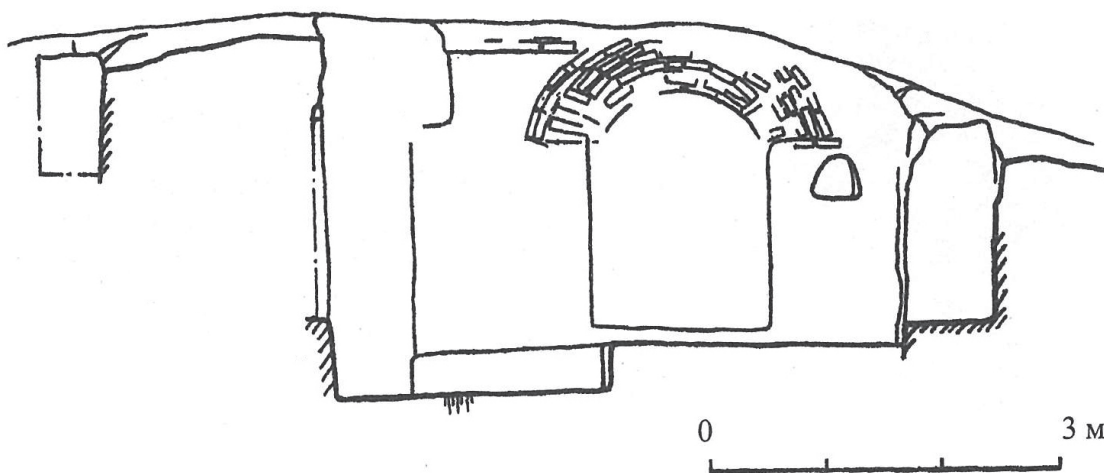


図 30. 部屋 22：断面図 11-11

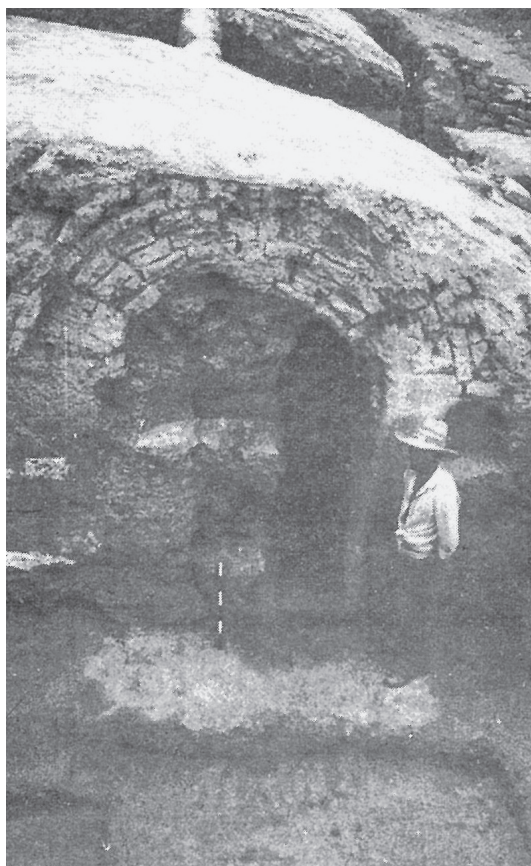


図 31. 部屋 22：北壁



図 32. 部屋 22：部屋の堆積状況：断面の上部に見える崩落した天井のレンガ

ファの上面から〔高さ〕1.2m、東壁から〔西に〕0.4mのところ、上部が半円形をなす、高さ0.4m、幅0.45m、奥行き20cmの別の壁龕がパフサ・ブロックのなかに設けられている。

西壁には、ほぼ中央部に幅1.2mの出入り口、もしくは壁龕が設置された。この〔壁龕の〕床は部屋の床（基礎部の床）より70cm高くなっている。上部〔構造〕は残っていない。

2-2-1. 部屋の堆積〔状況〕（図32）

基礎部の床（H-5.94m：〔基準点からの深さ〕）〔の上層〕には、日干しレンガの破片が混じる柔らかい土があった。この上層を、スーファの表面から高さ5～10cmの〔レベルの〕床2（H-5.4m）が覆っている。床2の上層、部屋の中央部には20～25個からなる焼成レンガの破片が堆積していた。レンガの一部には石灰の痕跡がある。レンガの大きさは31～32×15～19×4～5cmである。そのなかには、胴面に縦溝〔条痕〕がある灰色の粘土で作られたレンガ（16.5×5.8cm）の破片が3つあった。おそらく、床2の時期に壁が漆喰に塗られた。床2の下には漆喰の痕跡がなく、床3の下に部分的に残っている。床3は基準点からH-5.3～-5.37mのレベルにある。部屋の壁を洗い崩した泥の流出はこのレベルで出現するので、おそらく床3の使用時期に天井の崩壊が始まったのであろう。出入り口には、床3より高いレベルに2、3層の薄く、不明瞭な居住層があり、そのなかには薄い灰溜まりもある。最上層には、塊となって落ちた天井の一部のレンガがある。

2-2-2. 遺物

床1の南壁沿いのスーファの上では、青銅製のバックルと環状のコップの把手の破片が見つかった。このコップの別の破片は隣の部屋23の床1で見つかった。

床2の上およびこの上にあった堆積のなかでは、穀粒形と丸い真珠（？）のビーズ2点（0.6cm）、（考古学的にみれば、完全な形で残っている〔といえる〕）中空の管状鉄製品（9cm）、いくつかの〔土器の〕口縁の破片とネストリウス派式十字架が描かれている素焼きの土製スタンプが見つかった（図54）。

床3の上にあった堆積のなかからは、陶器の破片が数片、鉄製のバックル、青銅板製の飾り、鉄製の「ヘアピン」、そして、壁のレンガ積みが始まるレベ

ルでは残存状態が良いトゥルギシュ・コイン（直径2.5cm）が出土している。

2-3. 部屋 23

複合体の東側の外壁に沿った一連の部屋の1つであり、部屋22と部屋24の間に位置し、西壁に沿った出入り口で繋がっている。別の出入り口では、西側の部屋29に繋がっている。部屋の大きさは5.1×2.2mである。壁は、高さ0.7m、幅0.6～0.75mのパフサ・ブロックで構築されている。床から3段のパフサ・ブロックが検出されているが、床の下層には基礎の役割を果たしているもう1段のパフサ・ブロックがある。パフサ・ブロックの間には日干しレンガが1段積まれている。北壁および南壁のパフサ・ブロックの上に、ヴォールトの迫元として平行に積み上げられた7段のレンガがあり、この上にヴォールト〔天井〕のレンガが斜めに積まれていた。壁とヴォールトは高さ3.5mまで残っていた。復元されるヴォールトの天頂までの高さは3.75mである。

東壁には、幅1.02m、奥行き0.7mの壁龕がある。現在、壁龕の底面は、床の基底まで雨水によって崩れているが、おそらく〔壁龕の基底部は〕2段目のパフサ・ブロックのレベルであったと考えられる。南壁には、西壁に沿って幅0.8mのスリップ式〔スライド式〕の出入り口がある。ヴォールトの迫元までの高さは1.7mで、上部は残っていなかった。西壁では、北壁側に〔沿って〕部屋29へのスリップ式〔スライド式〕出入り口があり、幅は0.85mで、迫元までの高さは2mである。この出入り口の北の側壁面は、約10cm壁面に引っ込んでいる。北壁にも部屋24へ通じるスリップ式〔スライド式〕出入り口があり、西の側壁面は同じく、10cm壁面に引っ込んでおり、東の側壁面は角度がついている。出入り口の上部の幅は1.45mで、床の基礎レベルでは1mである。ヴォールトの迫元までの高さは2mであり、床では朽ちた敷居の横木が見つかった。

〔この部屋が〕建設されてすぐ、部屋の東側部分は長さ2.75m、厚さ35cm（レンガの半分）のレンガ壁によって区切られ、この壁はヴォールトと同じ高さまで残っている。それ以後、部屋のこの部分は2階建てになる（図33～34）。1階は古い〔当初の〕壁に挟まれ、傾斜している断片からなる狭いヴォールトによって構築され、高さ1.2m、幅1mの低い通路となった。ヴォールトは壁龕があった東壁で支

えられた。この時点で壁龕は埋め込まれていたはずであり、壁龕の床に2段のレンガの痕跡が発見された。

1階への出入り口は高さ1.5m、幅1mのオジーアーチ〔頂部がS字形の反転曲線になった尖頭アーチ〕で装飾されていた。壁とアーチの表面にはプラスターがあり、白く塗られている。〔この〕アーチには、縞形が付く外側のアーチがあり、壁の表面から4cm窪んでいる。内側の2つ目のアーチも表の〔1つ目の〕アーチと同じく、さらに壁面から窪んでい

る(図35)。1階の壁と天井にはプラスター層がない。大きさ47～49×20～21×8～8.5cmのレンガが用いられている。ヴォールトのキーストーン〔要石〕のレンガの大きさは40×16(6)×8cmである。

1階の床は、日干しレンガの破片の堆積、そしてこの上を覆っている風成層〔風によって運ばれた土の層、レス土層〕とで埋まっている。ヴォールトのレンガの上に、2段の日干しレンガとその破片がある。西の外壁の下ではレンガが1段積まれており、部屋の内側にはみ出している。2階への出入り口は、

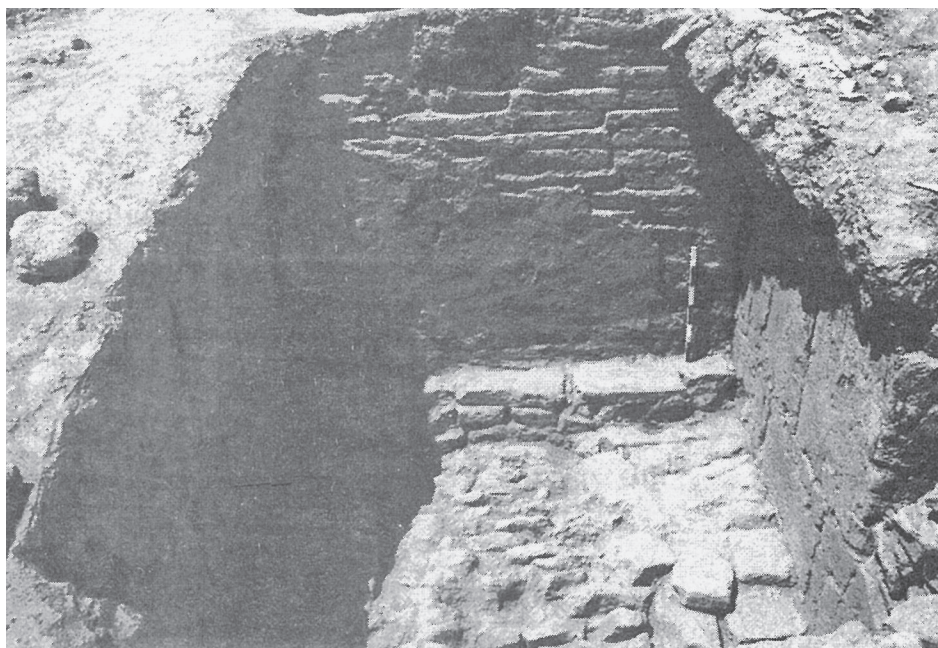


図 33. 部屋 23 : 2 階の部屋、東より



図 34. 部屋 23 : 1 階のヴォールト〔天井〕の断面、東より



図 35. 部屋 23：アーチ



図 36. 部屋 23：東壁の壁龕の埋葬

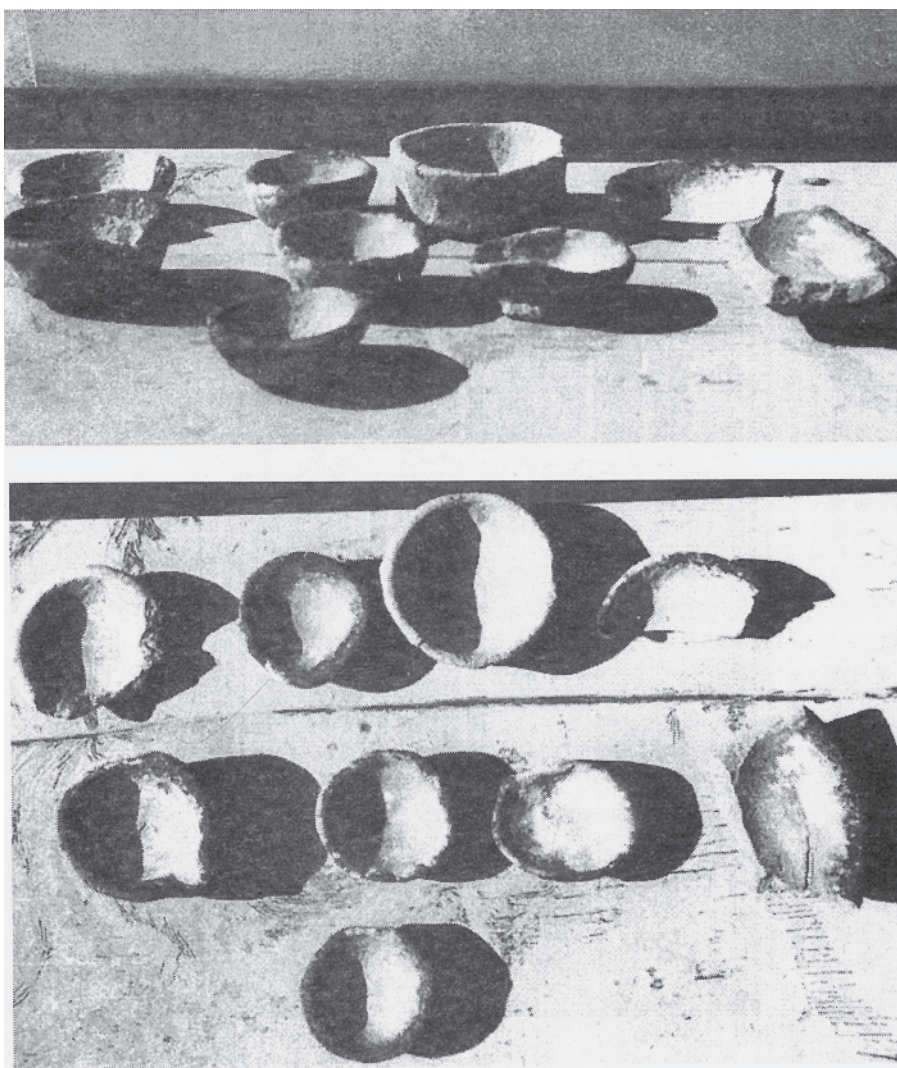


図 37. 部屋 23：部屋 23、皿型のランプ

おそらく東隅にある、パフサ・ブロックが取り除かれた隙間であったと思われる。出入り口の壁と床にはプラスターの痕跡がある。出入り口は部屋23と部屋22の間の窓のようでもある。幅は70cmで、高さも同じくらいである。

2-3-1. 部屋の堆積

2階の床の上には、日干しレンガの破片や風成層や表土層が載っていた。部屋の西側部分には、基底の床（基準点から〔-〕5.94m）の上に構築された壁に沿って、高さ20cm、幅55cmのスーファ（訳註26）が設置され、この上にオジーアーチの壁が造られた。アーチの前では、基底の床（P-5.98）と床2の間の堆積のなかには、レンガの破片と風に運ばれた砂〔土〕があった。この上には、水平な泥の水性堆積層の痕

跡があった。隣の部屋22との出入り口では、以下の層が記録されている：基底の床の16cm上に床2、この12cm上に床3、さらに29cm〔上〕に床4がある。その上層には、風に運ばれた50cmの砂〔土〕の層、〔さらにその〕上にレンガの堆積がある。出入り口の〔敷居の〕横木が床2および3の間に検出された。

2-3-2. 遺物

東壁にすでに存在していた壁龕の基礎の下方、ある時点でパフサ・ブロックの一部を掘り込んで造った壁龕のなかでは〔人骨の〕埋葬が見つかった。骨は密集していたが、解剖学的には原位置を保っていなかった。四肢、骨盤骨1つ、肩甲骨、頭蓋骨が見つかった（図36）。ヴォールトの下および部屋23の西側の堆積のなかでも骨が数片発見された。おそらく動物によって荒らされたのであろう。基底の床

の西側では、残りの良いトゥルギシュのコインや正方形の孔が開いたコインの破片、丸みを帯びた肩が付いたコップの破片（部屋22出土の破片と接合が可能）や数個の直径4～10cmの皿型のランプが見つかった。同じランプは1階のヴォールトの下に堆積のなかでも出土している（図37）。その同じところで鉄製の釘と青銅のピンが見つかった。

2-4. 部屋24（図38～39）

部屋23の北側に位置しており、幅1.75mの壁を共有している。西壁に沿って、幅80cm、1段の段差をもつ南側への出入り口がある。部屋の大きさは、2.1m（東壁）、1.9m（西壁）、長さは5mである。壁はパフサ・ブロック造りで、パフサ・ブロックの間にレンガが積まれている。南壁と北壁では、基底の床から高さ2.8mのところ、7段の日干しレンガ積みかなるヴォールトの迫元がある。壁は高

さ3.6mまで残っており、ヴォールトの天頂までの復元高は3.8mである。北壁の中央部分は崩壊している。東壁には幅1.05mの半円形のアーチ型の壁龕が設けられている。西壁の北西隅のパフサ・ブロックのなかにも幅0.75m、高さ1.25m、上部が円形をなす壁龕があるが、奥行きは確認できなかった。南壁にも、同じように、パフサ・ブロックのなかに壁龕が造られており、プラスターが塗られていた。壁龕の幅は60cm、高さ60cm、奥行き23cmであった。おそらく後期の床のレベルでは、この壁龕の上に幅45cm、高さ50cm、奥行き35cmの別の壁龕が造られた（図40）。部屋のすべての壁沿いにはスーファが設置されており、南西隅の出入り口の部分のみ、スーファが切れている。

南西隅のスーファは2段で構成されている。北壁沿いのスーファの幅は60cmであり、南壁沿いのスーファは25cm、東壁沿いは1.25mである。パフサの

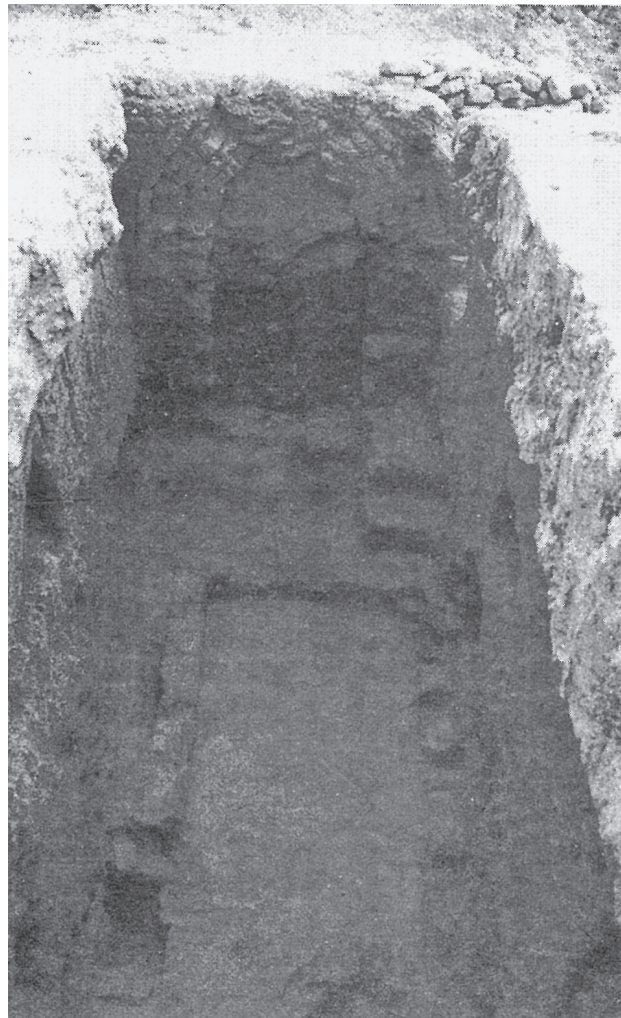


図 38. 部屋 24：東

壁は床のレベルよりも下方に続いている。

2-4-1. 部屋の堆積〔状況〕

レンガの堆積は基底の床を覆っており、さらに上層にはスーファに続いている床がある。この上に、ヴォールト〔天井〕のレンガの堆積と混じって、泥の水性堆積層がある。

2-4-2. 遺物

基底の床では、大きさ28×28cmの正方形の皮の薄片が発見された（図42）。周囲では、端から少し離れたところに鉄製のリベット（？）〔一端に頭をもった柱状体の金属製締めつけ用部品〕の頭が検出された。同じ床では、長さ3.5～4.5cm、2片からなる鉄製の蝶番が数個見つかった（図41）。蝶番の下部分は〔先端が〕尖った板であり、上から1/3のところには小さな孔が開いている。2つの蝶番の孔のなかには、半球形をした壊れた釘の頭が残っていた。板

の上端には、ループ〔環状の折り返し〕が2個付いている。

蝶番の上部は、高い帽子の形をした釘に似ており、端部は環状にねじってある。蝶番の上部と下部は、ループに差し込まれた針金で繋がっていた。この遺物の用途については、ここで発見された文書資料の痕跡によって説明できる。これは、土〔プラスター〕の上に残る文字の痕跡、そして完全に朽ちた〔羊皮〕紙の痕跡である（図43）。1つの例では、黒いインクで書かれた文は2列に配置されて、間に赤い「星」があった。文字の一部は赤いインクで書かれていたが、〔これは〕大文字の可能性もある。V.A. リフシツは実物を見ていないが、おそらく文書はソグド語で書かれていたとのことである。

計10個の断片が出土した。

No. 1 : 22.5×19.5cm

No. 2 : 27×15cm



図 39. 部屋 24 : 西

R

24

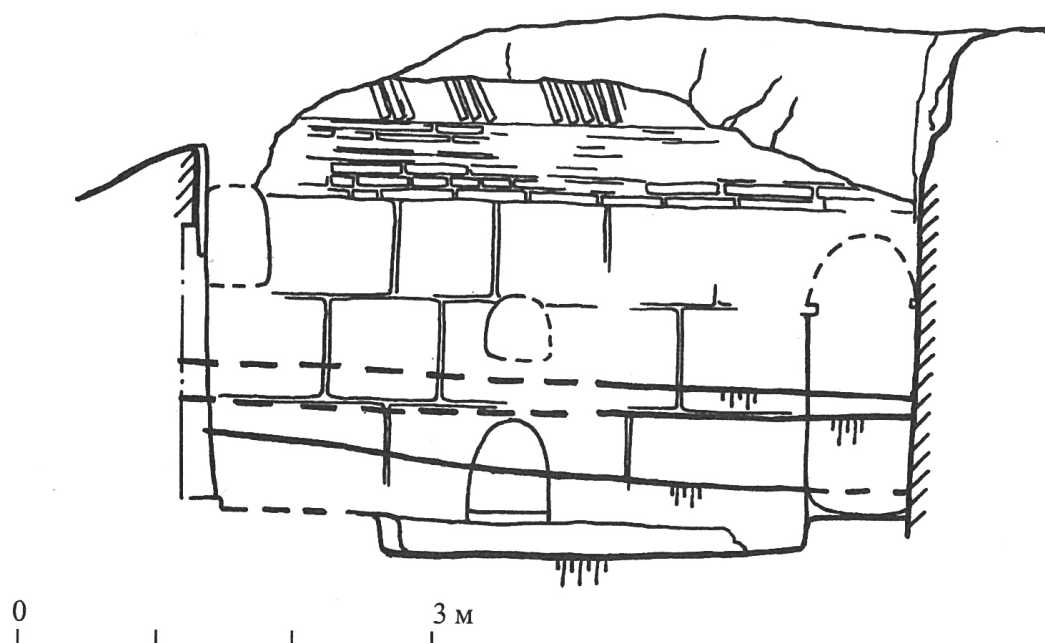


図 40. 部屋 24：断面図 7-7

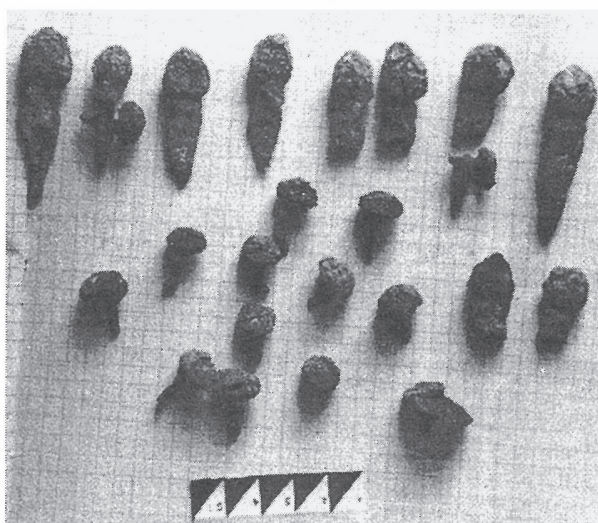
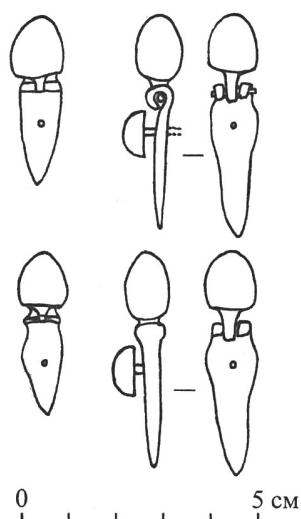


図 41. 部屋 24：鉄製のヒンジ [蝶番]



図 42. 部屋 24：書物の表紙の破片

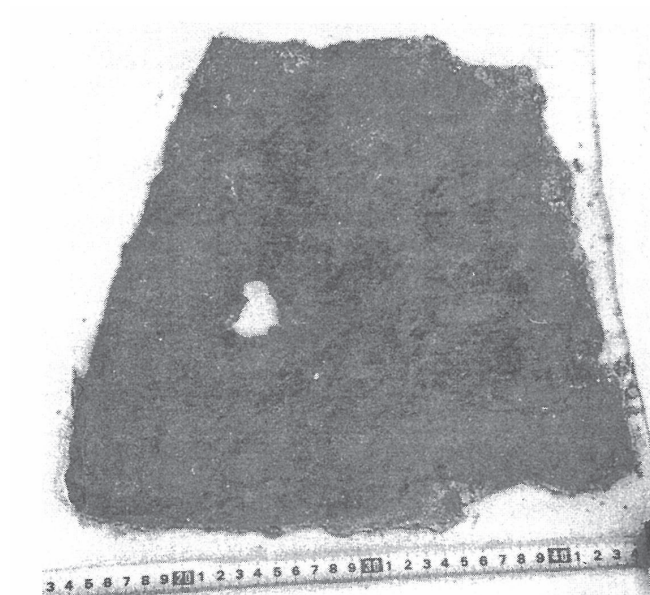


図 43. 部屋 24：[書物の] 頁の破片

No. 3 : 9.5 × 10 cm

No. 4 : 14 × 8 cm

No. 4a : 13 × 12 cm

No. 5 : 12.5 × 8 cm

No. 6 : 14 × 16.5 cm

No. 8 : 6 × 5 cm

〔羊皮〕紙の痕跡が残るプラスターの破片 2 個 :

17.5 × 7.5 cm および 31 × 29.5 cm

さらなる断片の研究には、実験室での修復が不可欠である。おそらく、革の断片は書物の表紙で、鉄製の蝶番は締め具または留金の部品だったと思われる。床では 2 つのランプも見つかっている（図 37）。

2-5. 「大中庭」

部屋 8 の北側、部屋 29 および 30 の南側には、地形

的にみて 18 × 30 m の長方形〔の区画〕となっていることから、「大中庭」と名付けられた。東側の境界は部屋 19～22 の壁で、西側の境界は、おそらく部屋 9 が続いていた部分だと思われる。大中庭の東西方向の中心軸は部屋 21 の出入り口である。3 つの壁龕がある正方形の〔平面〕プランの部屋 21 は、基本的に部屋 2 および部屋 27 に類似しており、ともに祭壇室であった可能性がある。この場合、大中庭は、開けた庭またはいくつかの回廊をもつ部屋〔空間〕であったものと思われる。この発掘シーズンでは、東壁沿いに幅の狭い部分だけを発掘したが、天井の痕跡はなかった。発掘が完了しない段階では、この問題は未解明のままである。部屋 19 を抜けて大中庭までに引かれた導管〔の存在〕に基づけば、この区画はおそらく開けた空間であったと考えられる。

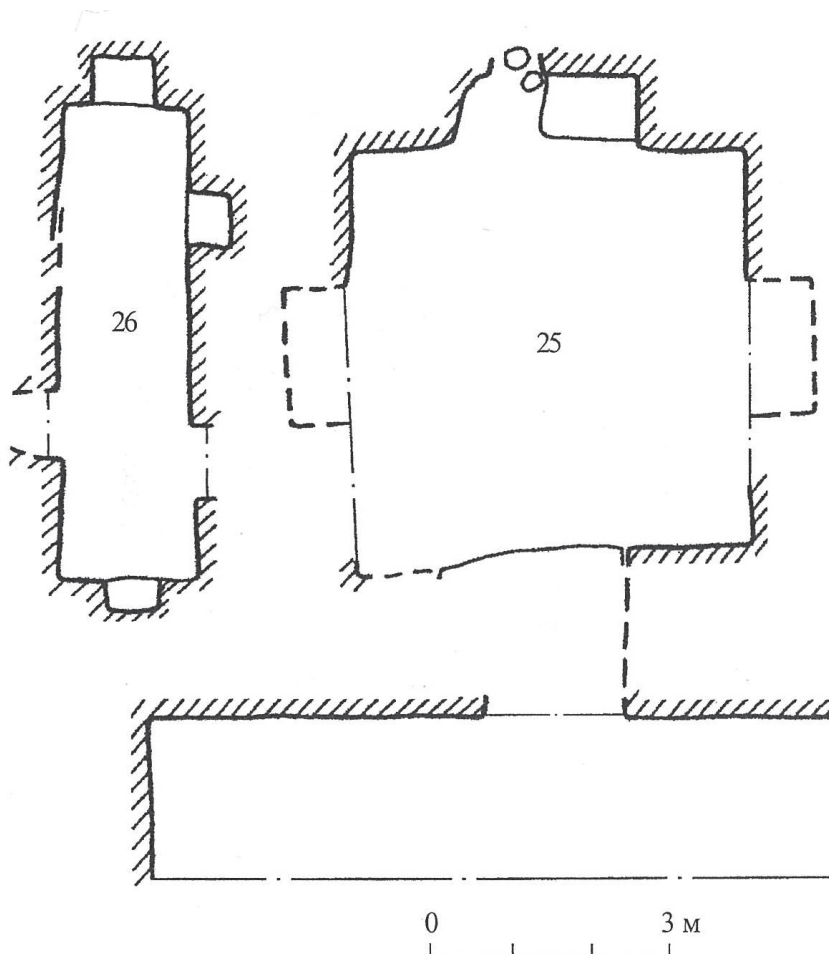


図 44. 複合体 C : 平面プラン



図 45. 部屋 26：西壁の壁龕



図 46. 部屋 26：西より

3. 複合体 C（図 44）

3-1. 部屋25

部屋24の南側〔北側の誤り〕に位置し、厚さ2mの壁を共有している。正方形の平面プランの部屋であり、大きさは5×5mである。大きさと設計は部屋21および部屋2と同じである。幅1.7mの主要な出入口は西側にあり、「中庭」と繋がっていた。反対側の東壁の中央部には幅2.25m、奥行き90cmの壁龕があった。

北壁と南壁にも同じような壁龕があった。南壁は、東側の側壁面のみが良く残っている。部屋は、上層の床まで、つまり西側の出入口がレンガで埋め込まれた時期のレベルまで発掘された。出入口に相対する壁龕もレンガで埋められ、プラスターが塗ら

れていた。壁龕のプラスター層および前方〔上面〕には赤い顔料の痕跡があり、上に薄い金箔が貼られた青い顔料の断片が出土している。

床の上には、部屋21とは異なる不規則なレンガの堆積がある。壁龕の上の堆積のなかでは、北壁に沿って東西方向に長手面を上下にしたレンガが発見された。かつては、東側の壁龕の南側部分に小さなアーチが造られていた。アーチ内の堆積のなかからは、直径35～40cmの石が見つかった。壁龕から西の方では、部屋の堆積中で良く似た石が見つかっており、両者はほぼ同じ軸線上にあった。

3-2. 部屋26

幅が狭く、通路の形をしており、大きさは6×1.6mで、部屋25の西側〔北側の誤り〕に位置して

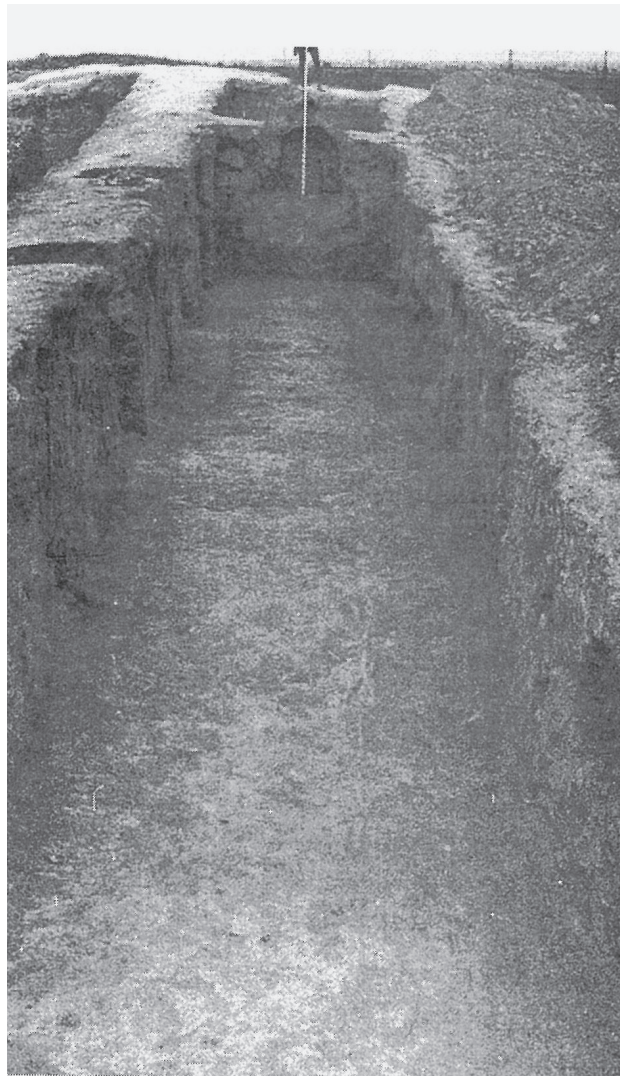


図 47. 部屋 30：西より



図 48. 部屋 29 ～ 30：東より

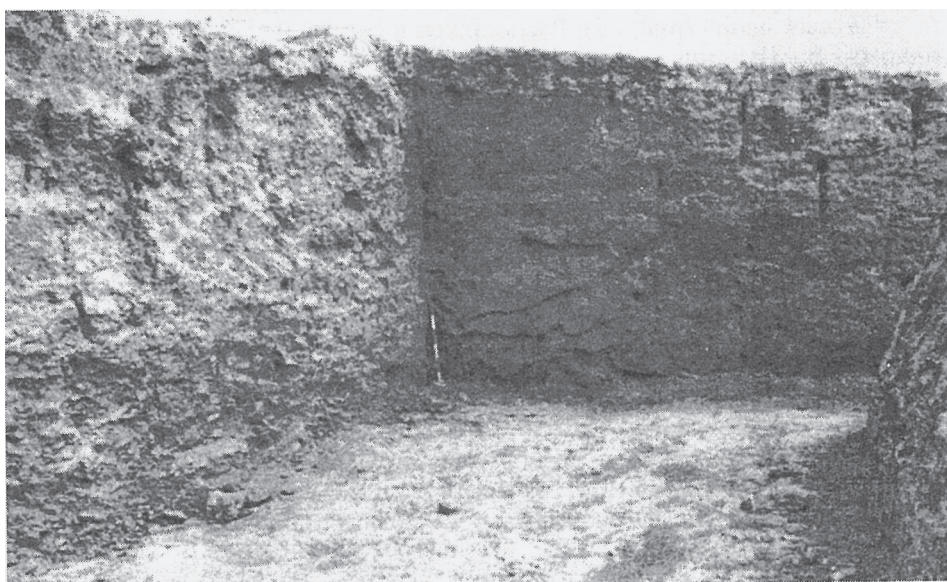


図 49. 小中庭：東南隅

いる。壁の方向に対し斜めになっている狭い出入り口で部屋25と繋がっているが、もともとはそうでなかった可能性もある。この部分の壁が壊されているという事実のほかには、部屋25の正面の出入り口が埋められた以後であっても、床が高くなり続けたということは、他にも出入り口があったということを示している。

壁に対して斜めになっている別の出入り口で、この部屋の北側に位置している部屋27と繋がっていた。東壁および西壁にはアーチ状の壁龕があった。西壁の壁龕は幅70cm、高さ115cm、奥行き40cmで、東壁の壁龕は幅60cm、高さ80cm、奥行き60cmである。

東壁の壁龕の上部は、プラスター層があるために尖頭アーチの形に見えるが、ほかの壁龕と同じように半円形のアーチがレンガ積みで造られている。南壁の西側部分には、幅80cm、高さ110cm、奥行き80cmのもう1つ別のアーチ状の壁龕がある（図45）。さらに南壁の西側部分には、高さ約60cmの、かなり崩壊した壁龕もあった。部屋の天井はヴォールトで、部屋の東側部分ではヴォールトの迫持ちははっきり見えているが、西側では変形している。ヴォールトの迫持ちはアーチ〔部分〕より高い位置で始まり、パフサ・ブロックの上に積まれた2段の平積みのレンガがあるところから始まっている。

3-2-1. 部屋の堆積〔状況〕

床は高いレベルで始まり、アーチの上部にかぶって、東から西に向かって低くなっている。いくつかの上層の床が発掘されたが、その間には泥の水性堆積層があった。基底の床までは発掘されなかった。

3-3. 部屋29～30（図47～48）

細長い部屋30（長さ25m、幅2.3～2.7m）およびその東側にある長方形の平面プランの部屋29（2.7×5m）、そして、これらの間にある幅138cmのアーチ形の出入り口からなる一連の部屋である。アーチ形の出入り口の向かい側、部屋29の東壁には部屋23への出入り口があり、より狭く低い。幅80cmのもう1つの出入り口（または奥行きが深い壁龕）は、部屋29から南側の「大中庭」に通じていた。北壁には、65～80cmの間隔を空けて柱の溝に類似する崩壊した部分がある。部屋は上層の床のレベルまで発掘された。部屋の壁は厚さおよそ2mで、パフサ・ブロックで構築されていた。

部屋30の北壁および南壁には幅1.5mの出入り口が2か所見つかっており、部屋と「大中庭」および「小中庭」を結んでいた。壁の2つの出入り口の間には、幅1.56m、奥行き1.2mのアーチ形の深い壁龕がある。西壁には出入り口があり、おそらく複合体の西側の屋外へと導くものと思われる。部屋は上から2番目の床まで掘られた。上の床のレベルでは、壁の前にレンガ（47×19×7cm）が並べられている。壁には土のプラスターが塗られており、赤く焼けている。基底の床と次の床の間には1.07mの間隔がある。

3-4. 「小中庭」（図49）

「大中庭」の北側に位置し、長さは「大中庭」と同じく15mで、幅は10mである。東側には、東西方向の中心の軸線上に正方形のプランの部屋25があり、「小中庭」と出入り口で繋がっている。「大中庭」に関するすべての想定は、「小中庭」にも当てはまる。中庭の東壁沿いのトレンチでは天井の痕跡は発見されなかったが、東南隅では壁画が描かれたプラスターの破片が見つかったので、中庭に天井があったことは明らかである。

4. 複合体D（図50）

複合体Cの北側に位置しており、おそらく、これ〔複合体C〕に増築されたものと推測される。複合体Dの建設の際に、外壁に部屋26および27を結ぶ出入り口が造られた。おそらく、そのころ部屋25への出入り口も造られた。

4-1. 部屋27（図51）

複合体の北東隅に位置し、南側の部屋26および西側の部屋28と出入り口で繋がっている。部屋は正方形のプランであり、3.5～3.6×3.65～3.6mである。南壁は斜めになっており、外壁のように見える。壁は、残存している高さまでプラスターで覆われており、迫持ちの痕跡はなかった。〔南〕壁は、高さ70cm、幅65～70cmのパフサ・ブロック積みで構築されている。〔南〕壁には、部屋26と通じる幅60cm、高さ1.5mの狭い出入り口があり、その横〔東側〕には、床から1mの高さに壁龕がある。壁龕は高さ0.76m、奥行き0.55m、幅0.5m、上部は半円形で、パフサ・ブロックのなかに設置されており、プラスターが塗られている。

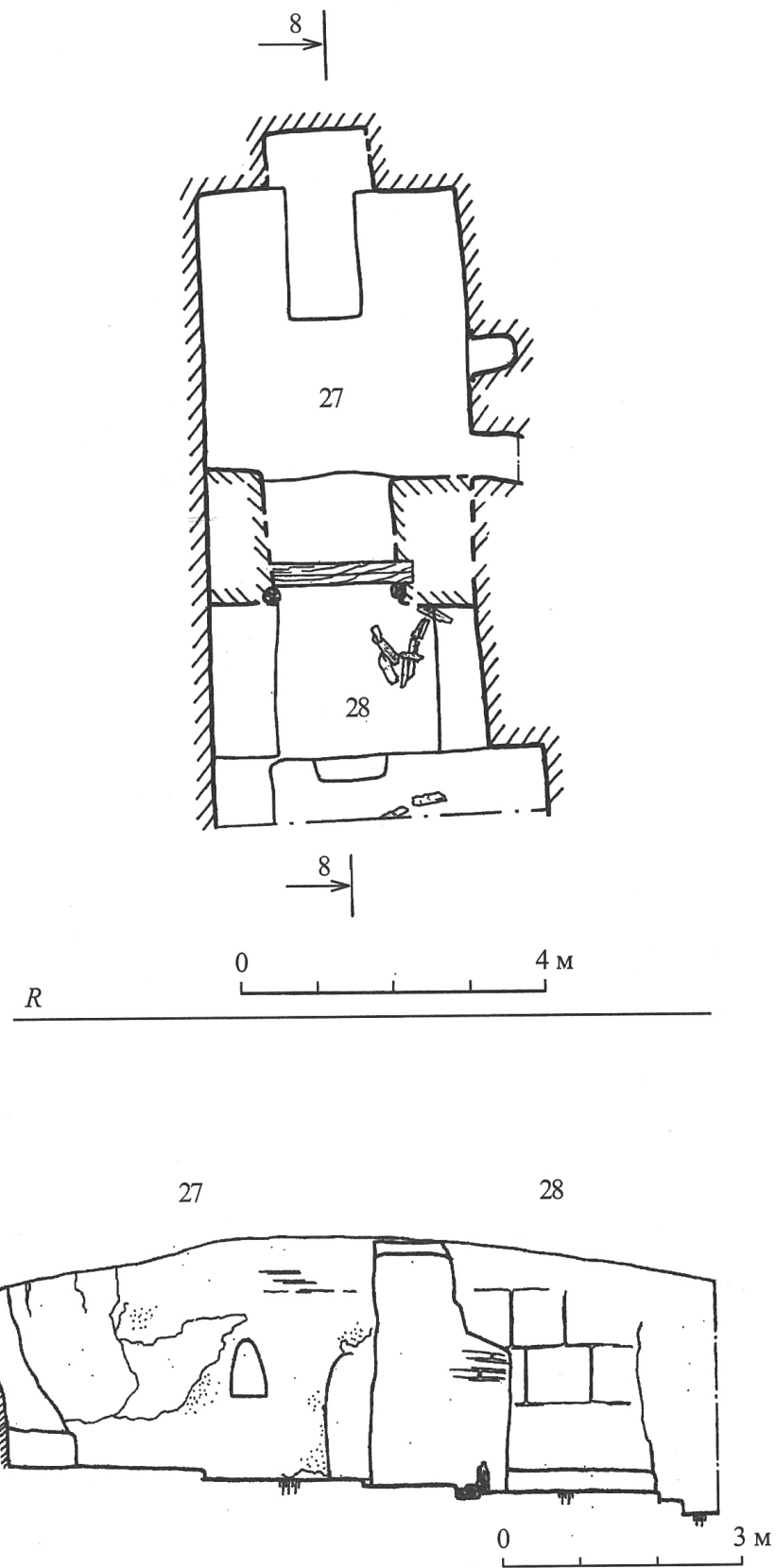


図 50. 複合体 D：平面プラン、断面図 8-8

部屋 28 との出入り口がある西壁はレンガで構築されており、[きちんと] 接合しておらず、南壁に接しているだけである。現在、この壁は角から分離し、倒れそうになっており、出入り口の方に傾いている。出入り口の幅は 1.8m である。東壁は日干しレンガ（ $40 \times 20 \times 8$ cm）および焼成レンガで構築されている。中央部には幅 1.37m、奥行き 0.8m、上部が残っていない壁龕がある。北壁には丁寧にプラスターが塗られているため、プラスター層を除去しない限り、壁の構造は不明である。西壁および東壁は日干しレンガで構築されていることから、おそらくそれより早い時期にパフサで構築された南壁とは[時期が]異なるものと考えられる。

基準点から -5.76m の地点では、唯一の部屋の床が検出された。部屋の中央部の床の上では、高くなった祭壇が検出されており、東壁の壁龕の中央部に接している（図 52）。祭壇の長さは 1.8m、幅は 0.85m、高さは 12cm である。東壁の前では、細い縦溝が付

けられた灰色の焼成レンガ（ $16 \sim 18 \times 4 \sim 4.5$ cm）と日干しレンガ（ $36 (?) \times 20 \times 6.5$ cm）の破片が^{訳註27)}集積しているのが見つかった。部屋 28 への出入り口でも同じような集積が見られた。この上層には、ほぼ表土のレベルから、割れて 2、3 の破片になった崩落した天井の日干しレンガの破片があった。下の方にあったいくつかのレンガには、プラスターと石膏の層が残っていた。堆積の断面観察によれば、部屋の中央に向けて徐々に方向を変えながらレンガが長手面を向けて積まれており、壁の近くでは小口面を部屋の中心に向けている（図 53）。堆積の状況に基づけば、部屋 21 および部屋 25 と同じように、「バルヒー・ヴォールト」^{訳註28)} [Balkhi vault] で天井が構築されていた可能性がある。

4-1-1. 遺物

部屋 27 の床では、孔が空いた小さな青銅コイン（直径 0.6 ~ 1 cm）が 3 個、嵌め石 [中石] がなく



図 51. 部屋 27 ~ 28 : 西より

なった青銅製の指輪、小さな青銅製の釘が3本、鉄製の釘、環状の上部を持つ遺物の破片、曲がったピン、片面は黒くて、片面は赤い漆で塗られた製品の破片、内面が白くて〔外面が〕青い陶製のビーズの破片、このビーズ内部には灰茶色の凝固した塊がある（外部の直径は0.8～1cm、内部の直径は0.2～0.4cm）、緑釉が掛けられたものを含めて陶器のいくつかの破片、施釉のランプの破片、背景は黒くて正方形のなかに何かの絵が描かれていた鎌の破片などが見つかった。さらに床では、十字架が描かれ、裏面に銘文が記された焼き物製のスタンプ〔型〕の破片が見つかった（図54、55）。

4-2. 部屋28

部屋27と同じ東西方向の軸線上に位置して、出入

り口で繋がっている。部屋27と同じく、部屋の幅は3.5mであり、北壁および南壁は部屋27のそれぞれの壁の続きである。東側の部分のみ、長さ2.75mにわたって発掘された。隣接する部屋とこの部屋の床には段差がある。床は部屋27への出入り口から構築され、角が丸みを帯びた幅29cmの敷居の横木によって出入り口と区切られている。横木に縁があるので、扉は部屋28の方に開いたといえる。端には扉枠の縦柱がある。〔出入口の〕境には、高さ12cm、長さ25cm、幅80cmの段が造られている（図51）。段の前面の床に直径15～18cmの穴があり、なかには炭化した小さな木柱があった。部屋の東側部分、北壁および南壁に沿ってスーファがあり、北壁に沿ったスーファは幅48～53cm、高さ22cmで、南壁は幅45～55cm、高さは26cmである。



図 52. 部屋 27：東壁の前の祭壇

スーファの長さは1.9mである。西側に向かって部屋の床が30cm低くなっている。南壁の西側部分には奥行き74cmの壁龕がある。壁龕の西端が発掘範囲の外側にあるため、[全体は]発掘されていない。南壁のスーファは壁龕があるところで切れており、北壁に沿ったスーファは、床のレベルと同じように、段をなして下がっている。

4-2-1. 部屋の堆積

[堆積は]間に挟まる床面や泥の水性堆積層がなく、均一で、日干しレンガの破片と土からなっていた。部屋のさまざまな地点の床の上、とくに南西隅に集中して、直径6～15cmの焼けた木製の横木が出土している。北壁沿いのスーファの上には直径25×18～20cmの横木の破片があった。床で発見された

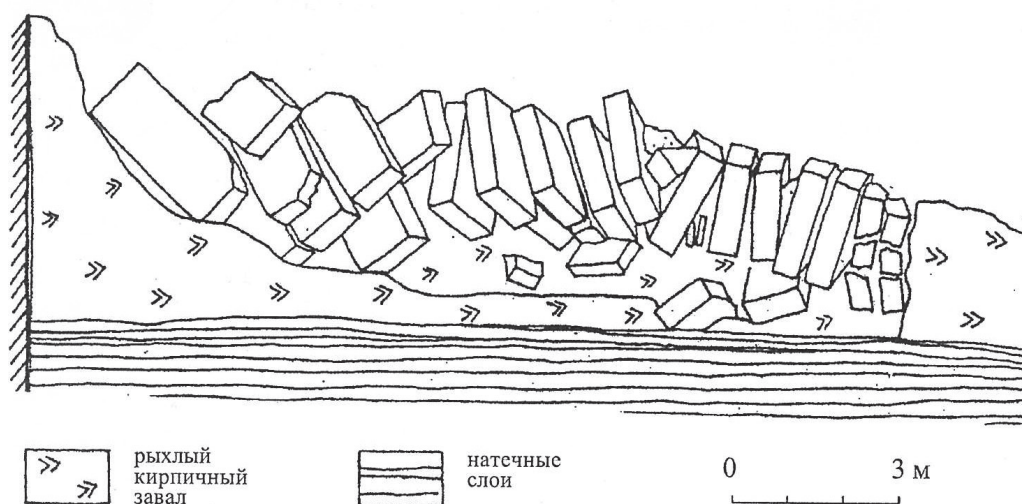
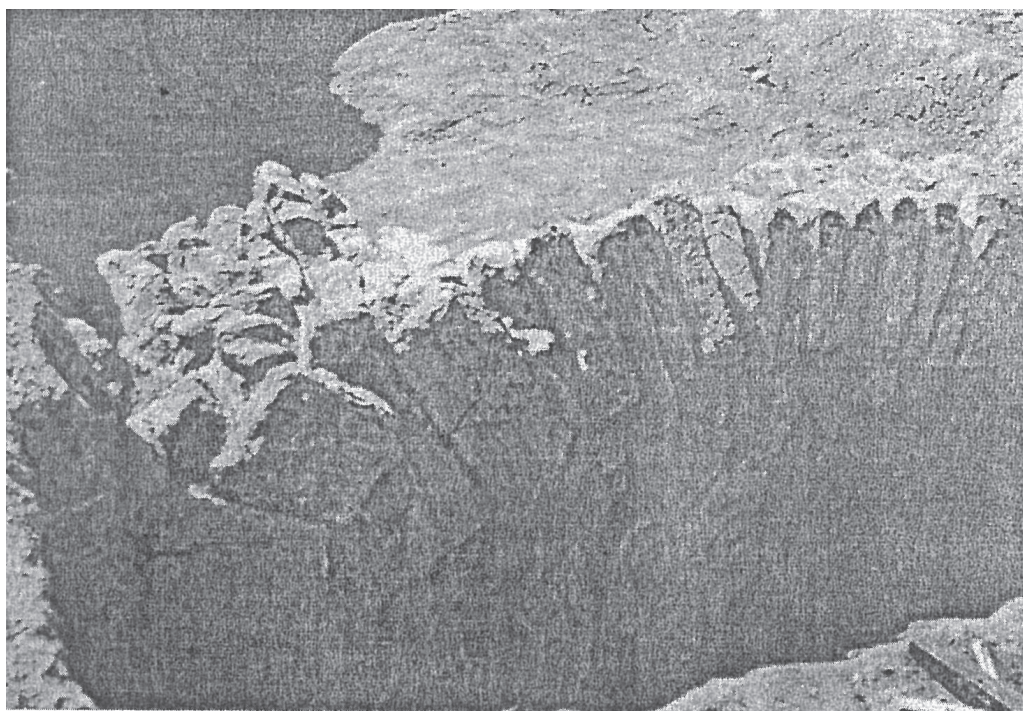


図 53. 部屋 27：堆積状況、東より：柔らかいレンガの堆積；水性堆積層

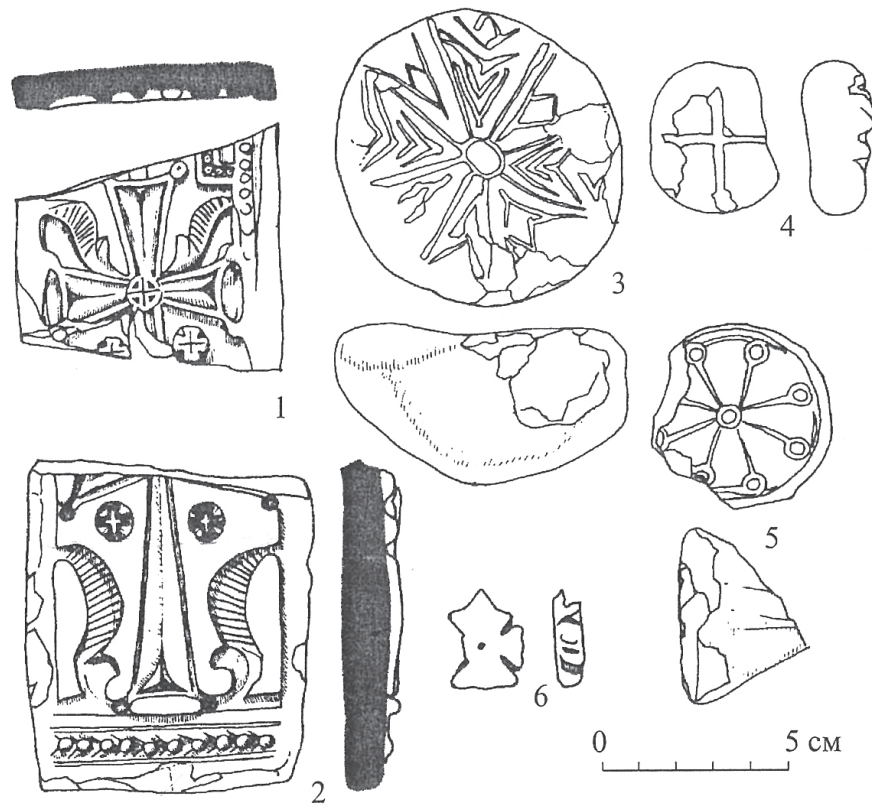


図 54. 十字架の文様、1-5. 焼き物製のスタンプ〔型〕の破片、6. 部屋 5 出土のネフライト〔軟玉製〕の十字架

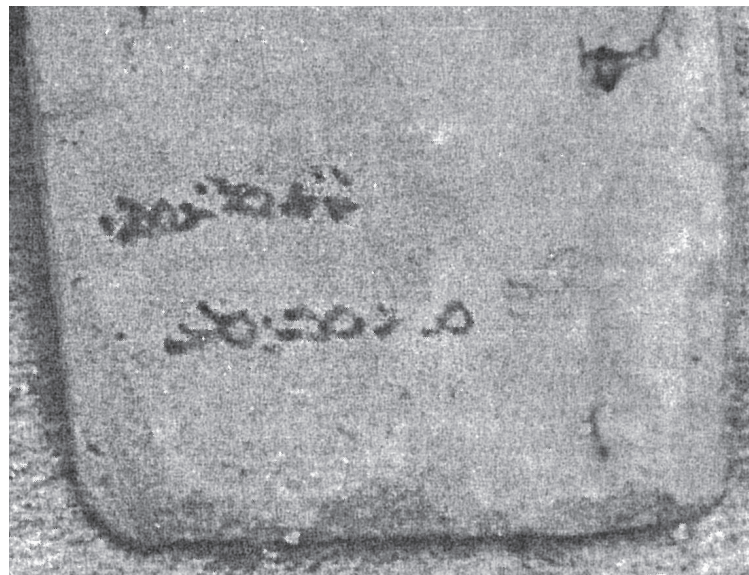


図 55. 部屋 27：焼き物製のスタンプ〔型〕の裏面の銘文

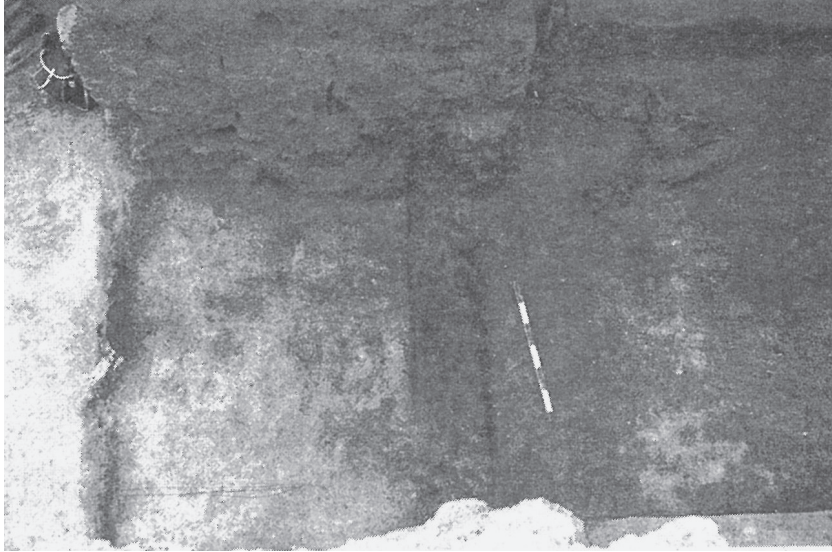


図 56. 部屋 28：部屋 27 からの出入り口、敷居の横木



図 57. 部屋 28：段

遺物のなかには、突起の付いた鉄製の矢、2本の釘、固定用の釘がある鉄製の環（敷居の横木の上で発見された）、青銅製の針金でできた環の破片、いくつかの陶器の破片があった。

5. 設計および層位

発掘された建物については、設計「プラン」の観点から、いくつかの部分に分割することができる。

5-1. 複合体 A

南側の独立した建造物であり、部屋 1～9 で構成されている。中心部分は祭壇がある正方形のプラン

の部屋 2 およびその西側に接する長方形の部屋 3 である。この中心部分の周りを長いヴォールト〔天井〕の部屋 31 および部屋 4～部屋 9 が囲んでいる。発掘された部屋 1 の北壁の一部は外向きに傾斜していることから、ファサード〔外壁〕のようである。この事例に基づけば、北側にある部屋は後の時期のものであり、もともとあった建造物に増築されたと考えることが可能である。

5-2. 複合体 B

部屋 19 および部屋 20 は独立しており、もともとほかの部屋への出入り口は設置されていなかった。それは、さらに北側の複合体 B を構成する部屋と同

時期に建設された。正方形のプランの部屋21および東側から隣接する〔つまり、西側の〕「大中庭」は複合体Bの基本〔核となる〕部分である。おそらく、北側に隣接して位置し、出入り口で繋がっている部屋22～24はこの複合体の一部だと思われる。

5-3. 複合体C

複合体Bの北側に位置し、正方形の平面プランの部屋25と「小中庭」で構成されていた。おそらく、その北側にある部屋26も複合体Cの一部であろう。部屋29および部屋30は、「大中庭」と「小中庭」を区画する通路である。

5-4. 複合体D

部屋26の北壁は外側に傾斜していることから、外壁のようである。おそらく、部屋27および部屋28は後で増築されたもので、別の区画を構成している。上述のそれぞれの部分に正方形の平面プランをもつ部屋2、21、25、27があることは、とくに注目すべき点である。完全に発掘された部屋2および27によれば、東壁には祭壇が接していることになる。複合体Dの部屋27は正方形であるが、側壁には十字形の平面プランを形作る壁龕がない。しかしながら、部屋2との共通点は祭壇があることである。各複合体には祭壇室の東側〔西側の誤り〕に細長い部屋3、28、「大中庭」、「小中庭」が位置している。

6. 建設の歴史

おもに2期の建設期がある。第1期は複合体Aの建設、それと複合体BおよびCの増築である。おそらく壁画の破片もこの時期のものであろう。

第2期には、壁と床の漆喰に関連する複合体の床2が関係している。同時に、ワイン製造施設(部屋4、7、8)、部屋2から部屋6への階段付きの出入り口が造られる。部屋22では、北側の壁龕が埋め込まれて、白く塗られ、そのなかに小さな壁龕が造られる。部屋23では、白く塗られたオジーアーチがある2階建ての東側部分が構築される。おそらく、この時期に、漆喰層がなく1面の床をもつ部屋27と部屋28の増築も行われた。

その後の遺構の変遷は上層の床に関係している。西側の部屋25への出入り口を埋めたことや、部屋19への出入り口の設置、いくつかの部屋で発見され

た灰溜まりの層などが改変として挙げられる。

7. 年代確定の問題

1998年には、発掘中に36個の貨幣が発見された。現場で応急的なクリーニングが行われた。同定は外観に基づいている。

35個のコインのうち(No.34はツィタデル〔城塞〕で出土)、中央に正方形の孔がないのは4個だけである。4個のうち、2個の中央部にはイスラーム教のシンボルが描かれている。そのほかの貨幣はトゥルギシュまたはツフス〔ワナントマーフ〕・コインである。部屋24でもっとも数多く発見された。もっとも早い〔古い〕床の下で正方形の孔がある小さなコイン、下層の3つの床で正方形の孔があるコイン、3つの床のなかでもっとも上〔新しい〕の床ではトゥルギシュの貨幣が1枚発見された。より新しいコインで年代を確定するとすれば、おそらくNo.16はカラハン朝のコインであることから、部屋3の下層の床は10世紀以降となる。部屋1の上層の床の上にあったNo.28もカラハン朝の貨幣であろう。いくつかの部屋の下層の床で見つかった施釉陶器もこの年代を裏付けている(図58～59)。素焼きの土器もこの年代とは矛盾しない(図68～72)。

部屋8で出土した大甕の口縁部のスタンプはA.N.ベルンシュタムが発表したセミレチエ地区のカラハン朝の陶器のスタンプと同じである⁵⁾。部屋2の天井画とロゼット(図9)は10～11世紀の敦煌石窟の天井画ときわめて似ている(第440～442号窟、第150号窟、第157号窟、第302号窟)。

数多く武器が出土している上層の床は、10～11世紀の間であると推定するべきである(後述参照)。したがって、複合体全体の建設および使用は約100年間で、比較的短期間で終わっている。

8. キリスト教会復元図

遺構の壁が良く残っていることから(最大高3.5m)、一部の部屋の天井や複合体全体の外観を復元できる(図62～67)。

8-1. 複合体A

8-1-1. 部屋1、7、4、6

もっとも残存状態が良い部屋1、7、4、6では、



図 58. 施釉土器の破片

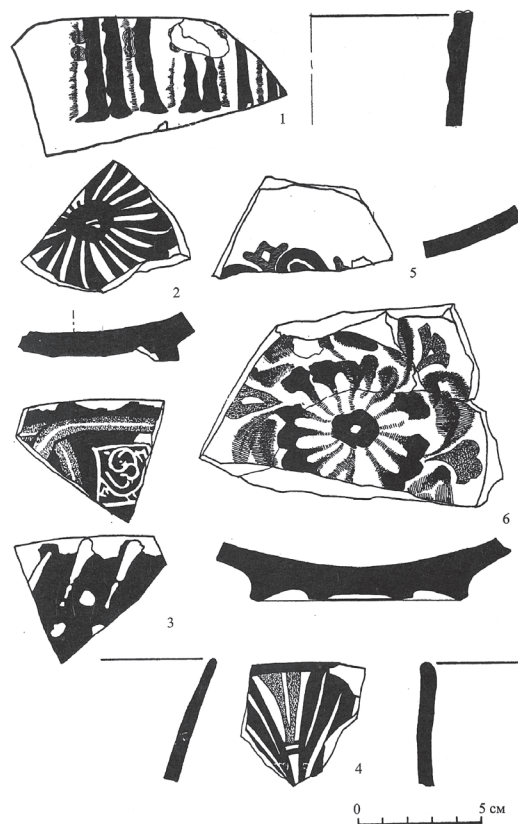


図 59. 施釉土器の破片

壁は3段のパフサ・ブロックで構築されており、その上に4段残っているヴォールトの迫持ちのレンガ積みが始まる。複合体Bの部屋24では、ヴォールトの迫持ちは7段のレンガでできており、その上には、断面で見ると斜めになったレンガが積まれている。複合体Aのヴォールトの構造と類似しているとすれば、復元できるヴォールトの頂点までの部屋の高さは3.5mとなる。出入口のアーチ天井は、ヴォールトの迫持ちまで終わるはずであるので、高さは2.4mとなる。

8-1-2. 部屋8および5

これらの部屋の幅はより広く、壁はパフサ・ブロックの4段目が始まる場所まで残っていたので、おそらくさらに高かったものと思われる。提案された復元案では、見積もった部屋の最小限の高さとして、パフサ・ブロックの4段目、そしてその上に部屋1、7、4、6と同じようなレンガの迫持ちおよびヴォールトがあったものと推測できる。この場合、部屋の高さは4.4mとなる。

8-1-3. 部屋3

部屋の大きさは25×5mである。残っているパフサ・ブロックの壁の最大高は、部屋8と同じく4段目の始まりまでである。北壁および南壁で検出されている、相対する3組の木製の柱は、垂直に埋め込まれており、高さ2.6mまで残っていた。部屋の横断面では、東側の第1組の柱の間で、長手面が見えるレンガの塊が確認された（図66）。B.I. マルシャクの提案によれば、これは支持アーチから崩落したレンガである。

提案されたヴォールトの構造は以下の通りである。それぞれの側〔北壁と南壁〕に沿った2本の木製の柱の上に木製の板1枚もしくは複数の板からできた台が置かれ、これによって支持アーチが支えられていた。支持アーチの間に生じる4つの正方形の空間（4.35×5：4.75×5：4.9×4.8：5.4×4.7m）は、「バルヒー・ヴォールト」で覆われていた可能性がある（図67）。「バルヒー・ヴォールト」の利点は、通常のドームのように正方形の部屋だけではなく、長方形の部屋にも使えることである。「バルヒー・ヴォールト」は穹隅〔ペンデンティブ〕式の回廊ヴォールトであり、部屋の隅から傾斜している断片によって小アーチの列が造られ、主軸の上で「

松状（檜垣模様）」に結合する。「入隅迫持のヴォールト」として定義されることもある（A. ゴダール）。

このような型式のヴォールトは、紀元後以降、中央アジアの建築のなかで知られるようになり（〔アフガニスタン北部の〕ディリベルジン〔Дильбержин〕のサルダープ〔сардоба、氷室、地下室〕）、とくに11～12世紀には広く分布していた（メルブの住居、〔ウズベキスタンの〕デッガロン・モスク〔мечеть Диггарон〕、〔トルクメニスタンの〕タルハタン・ババ・モスク〔мечеть Талхатан-баба〕やダヤー・ハティン隊商宿〔караван-сарай Дая-Хатын〕、〔ウズベキスタンの〕ラバティー・シャリーフ隊商宿〔караван-сарай Рабати-Шариф〕など⁷⁾）。それ以前はバルヒー・ヴォールトの分布範囲はトルクメニスタン南部、北アフガニスタン北部、ホレズムおよびブハラに限られていた。

部屋の高さを復元する際の前提は、レンガ積みは隣接する部屋8および部屋5と同じレベル〔高さ〕から始まるということである。〔この部屋8および部屋5と〕同じ高さから支持アーチが構築される。「バルヒー・ヴォールト」は支持アーチの構造の上に構築される。復元される部屋の高さは最低限に見積もって8.4mである。

8-1-4. 部屋9

完全には発掘されていないが、1.5m 間隔の木製の柱が見つっている。想定される天井は多くの点で部屋3と同じである。壁のなかの木製の柱は、「バルヒー・ヴォールト」の基礎となる2つの支持アーチと2つの壁龕を支えている。小アーチの列は、ヴォールトの要石より高くなることはなく、またはわずかに低いこともある。

8-1-5. 部屋2

正方形の平面プランの部屋であり、〔大きさは〕5×5mで、3面に壁龕がある。複合体における部屋〔2〕の中心的な位置を考慮に入れば、隣接する部屋3より〔天井が〕低くなることはないと思われる。部屋は正方形であったことから、通常、斜めに積まれた断片によるヴォールトが予想されるが、「バルヒー・ヴォールト」であった可能性もある。というのも、隅で入隅迫持の痕跡が確認されていないためである。

8-2. 複合体 B

8-2-1. 部屋 23 および部屋 24

隣接する部屋23および部屋24はもっとも保存状態が良い。3段のパフサ・ブロックの壁の上にレンガの迫持ちの7段、および東壁に支えられる斜めに積まれた断片によるヴォールトの積み始めがある。部屋の高さは3.6mである。

8-2-2. 部屋 22

隣の部屋23と同じ場所〔高さ〕でレンガ積みは始まっており、迫持ちが始まるものと思われたが、壁は残存している高さまで垂直に積まれていた。これは、少なくとも部分的には、北壁のアーチ形の壁龕と関係があるのかもしれない。天井は壁龕のアーチより高い地点〔レベル〕で始まっていたものと思われる。当初、部屋の天井は日干しレンガの断片を斜めに積んでヴォールト状に造られていたと想定されていた。この場合、北壁および南壁の上部のレンガ積みは、床から2.7mの高さからレンガで積まれたヴォールトの迫持ちの始まりになる可能性もある。しかしながら、壁の上部のレンガ積みは壁面からいくらか突き出ているが、迫持ちの独特な垂れ下がり形成していないことに留意すべきである。おそらく、部屋の3.57mの幅は、斜めに積まれた断片〔レンガ〕によるヴォールト〔天井〕の部屋の幅の限界なのであろう。

堆積の断面は、上部から崩落して落ち込んだヴォールト〔天井〕の堆積を示している。壁の近くのレンガは長手面、そして部屋の中心に向かうにつれて胴面が見えている。このようなレンガの落ち方は斜めに積まれた断片によるヴォールトに典型的ではなく（すべてのレンガは中心に向かって胴面の上に広がる）、「バルヒー」に特有である。

8-2-3. 部屋 21

上層にあったいくつかの床のなかの1面まで発掘されている。正方形の平面プランで（大きさ5×5m）、3つの壁龕を有している。堆積のなかでは、崩落して落ち込んだドームが発見され、レンガは「バルヒー・」ヴォールトの特殊な「松状」（檜垣模様）の列〔構成〕をなしている（図29）。部屋の高さに関しての情報はなく、ヴォールトは壁龕のアーチの終わりよりも高いところで始まっていた。複合体のなかにおけるこの部屋の優位的な位置を考慮すれば、部屋の高さは8mと想定される。

8-2-4. 部屋19～20

実際には、部屋20のみが部屋であり、おそらくヴォールト〔天井〕があり、部屋23および部屋24に類似している。東壁に壁龕がない唯一の部屋である。中庭やほかも部屋と出入り口で繋がっておらず、袋小路（となる部屋19）だけと繋がっていた。ここ〔部屋19〕では、水を外に出す導管が見つかっている（勾配は5mで9cm〔上述では「8cm」〕）。導管は屋外に特徴的な灰の層で覆われていることから、おそらく部屋19には天井はなかったのであろう。

8-3. 複合体 C

8-3-1. 部屋 25

部屋21と類似していて、壁の保存状態も同じである。北壁の壁龕の堆積のなかでは崩落したレンガが観察され、〔断面で〕長手面を部屋に向けた14個のレンガは、おそらくアーチの上部からの〔崩落した〕ものであろう。すべての壁龕は、この壁龕の例に基づいて復元されている。部屋21と同じような条件に基づいて部屋の高さを推定できる。

8-3-2. 部屋 26

ヴォールト〔天井〕の迫持ちまで残っており、斜めに積まれた断片〔レンガ〕によるヴォールトがあった。

8-3-3. 部屋27および28

正方形に近い平面プランの部屋であり、南壁は傾斜している（勾配は2mに対して25cm）。隣接の部屋26では、ヴォールトの迫持ちが始まるレベル〔高さ〕では、これらの部屋において天井の痕跡はなく、レンガ積みの壁が続いていた。部屋27の堆積のなかで天井のレンガは方向を変えて落ちている。おそらく「バルヒー・ヴォールト」である。部屋28の発掘は完了していない。

8-3-4. 部屋29および30

部屋23と出入り口で繋がっており、「大・小中庭」に〔向かって〕左右対象の出入り口をもつ長い通路である。壁はパフサ・ブロックの4段目の始まりの部分まで残っている。復元図では、このパフサの段を完成させ、迫持ちおよびヴォールト〔天井〕を復元している。したがって、部屋19および20の高さは、これらの東側にある部屋23および部屋24より高く、

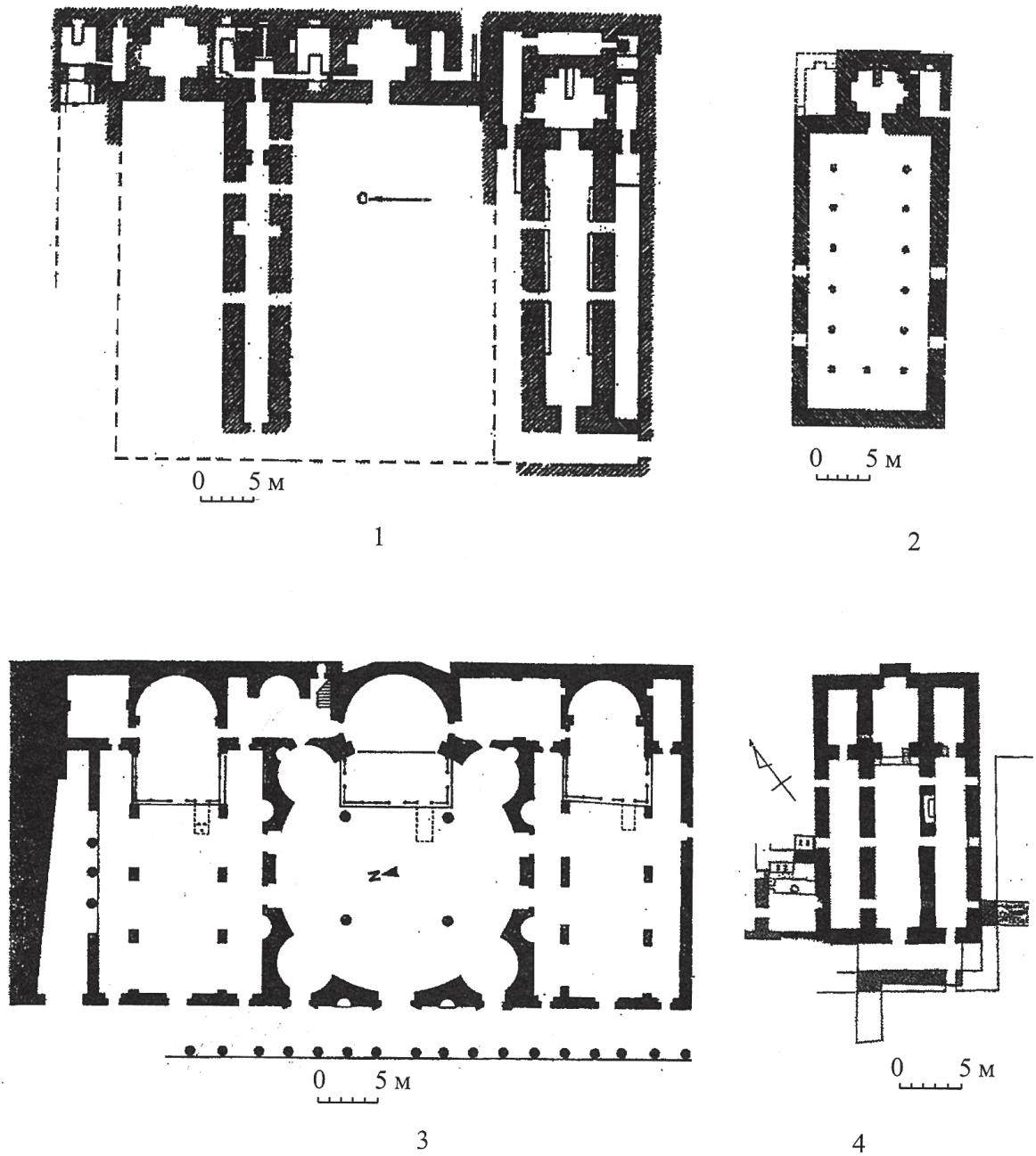


図 60. 教会の平面プラン

1. アク・ベシム第 8 号遺構 [AKB-8 区] ; 2. アク・ベシム第 4 号遺構 [AKB-4 区] ;
3. ヘラスの教会複合体 (ヨルダン) ; 4. アイン・シャーイア

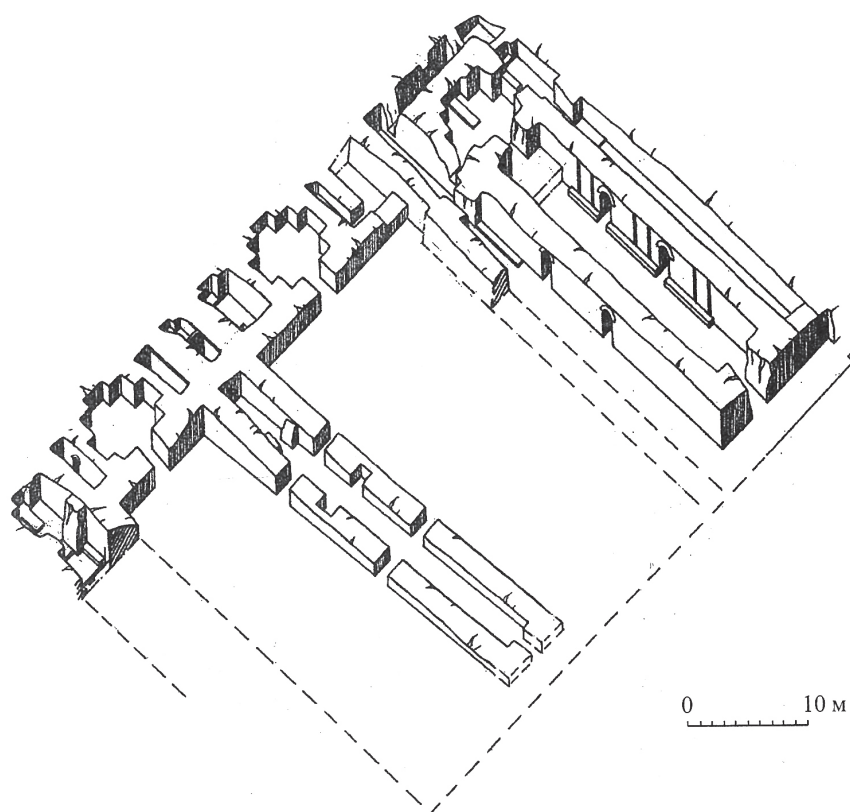


図 61. 第 8 号遺構：投影図

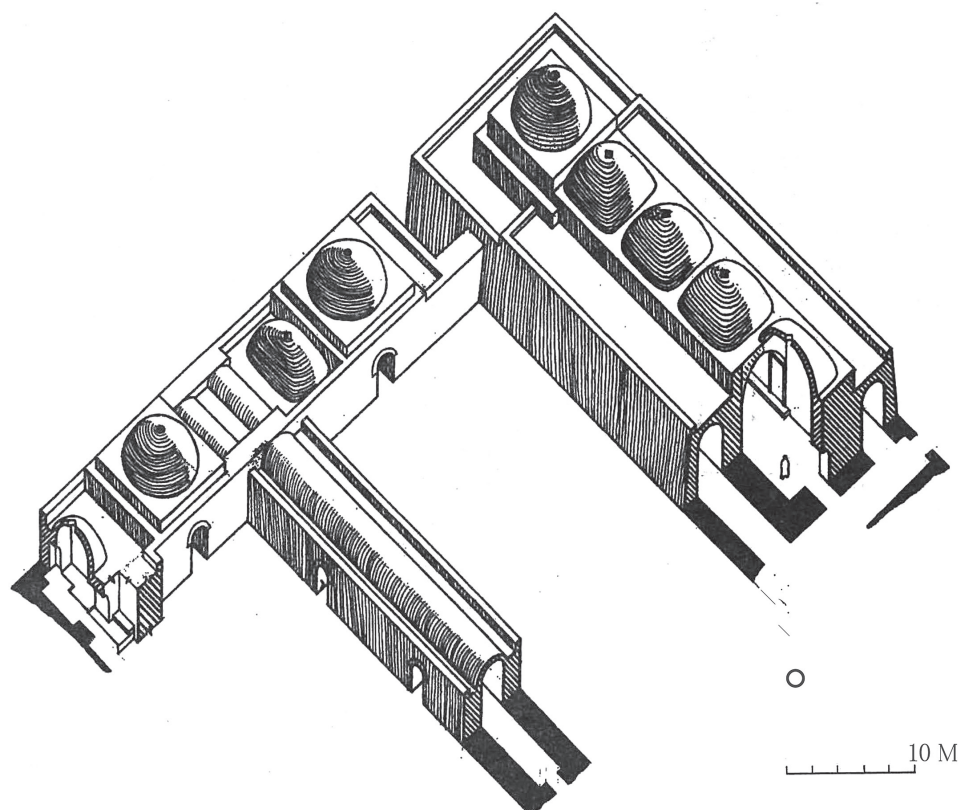


図 62. 第 8 号遺構：復元図

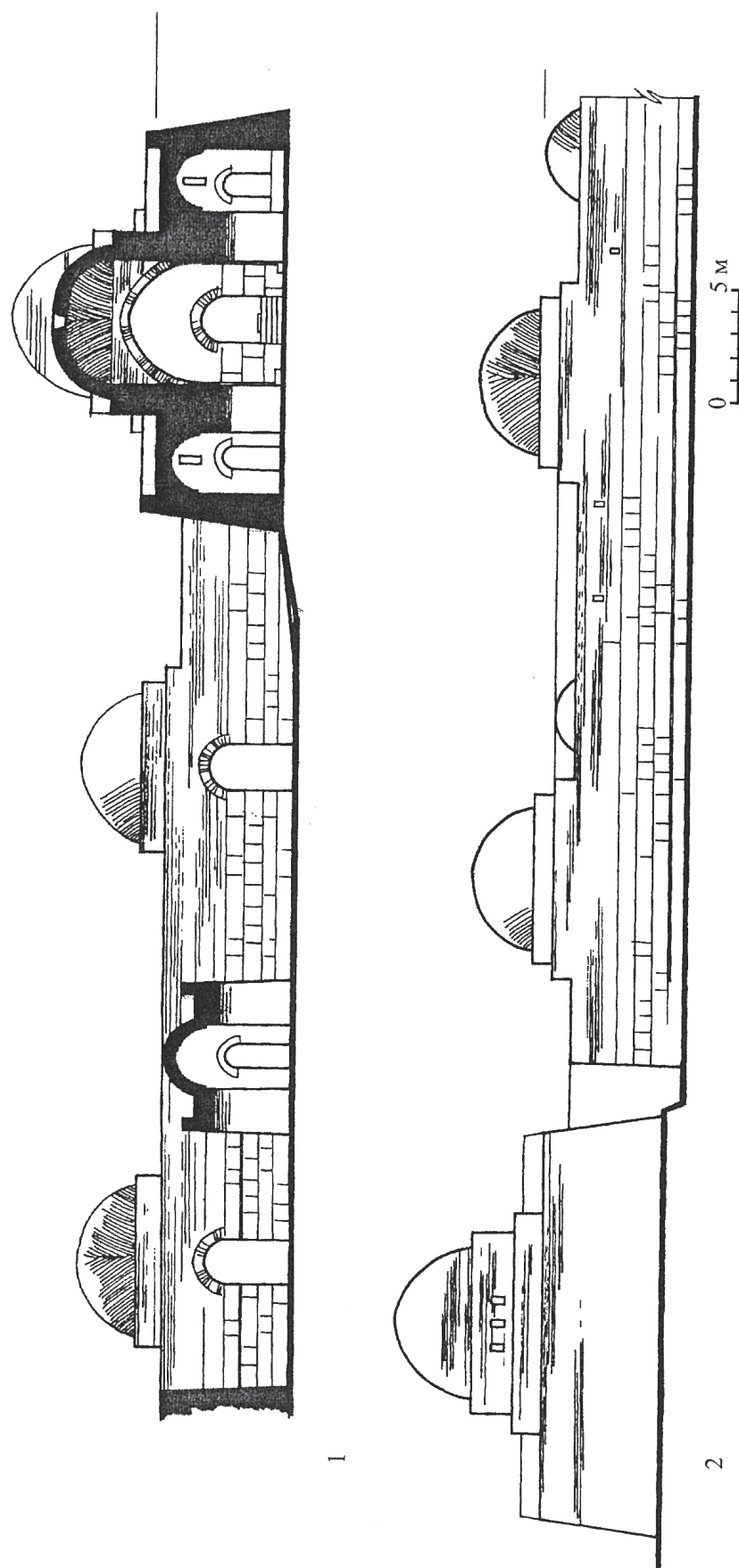


図 63. 第 8 号遺構：復元図、1. 南北の断面図 2. 東のファサード

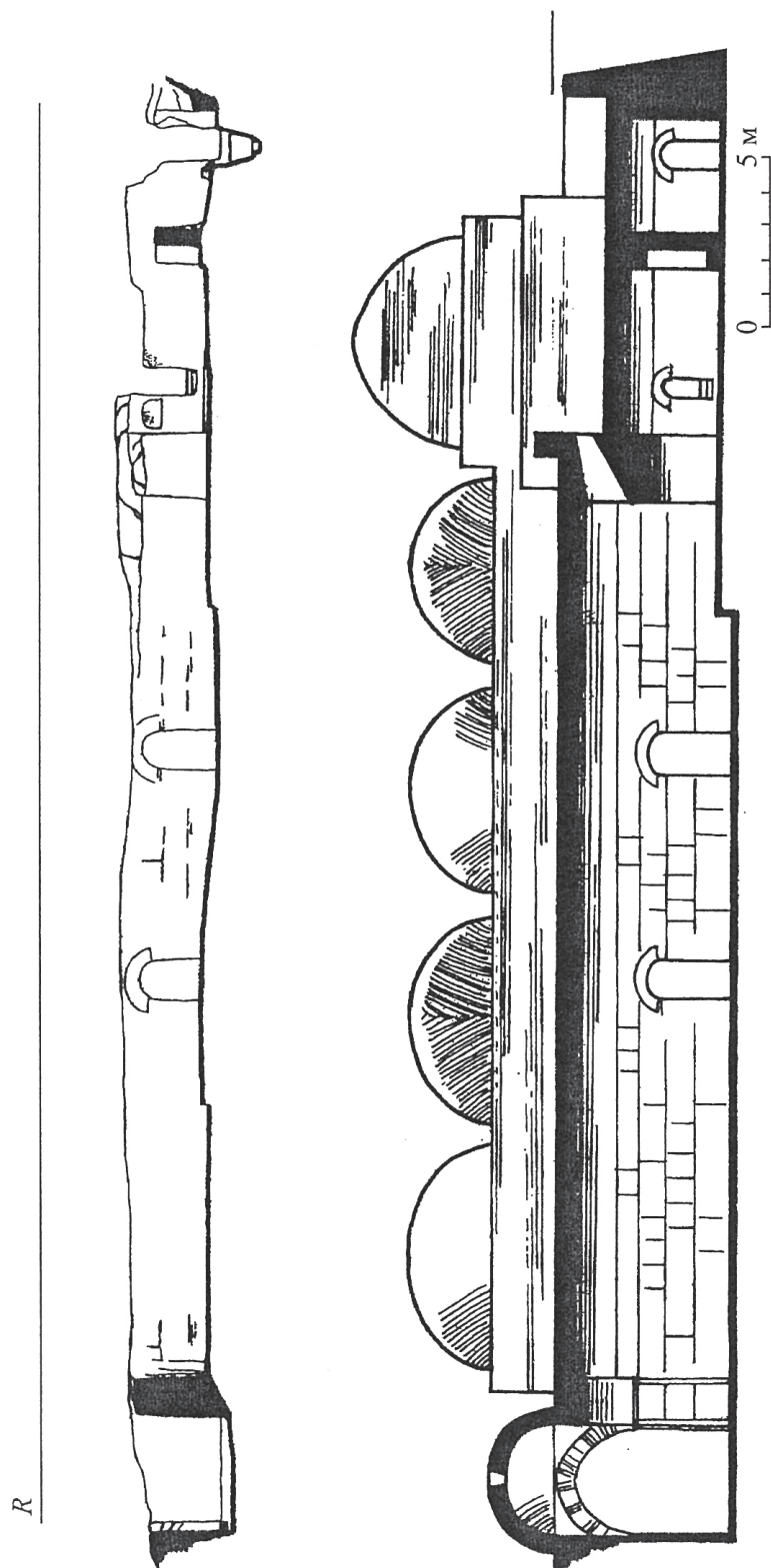


図64. 第8号遺構：断面図2-2および復元図

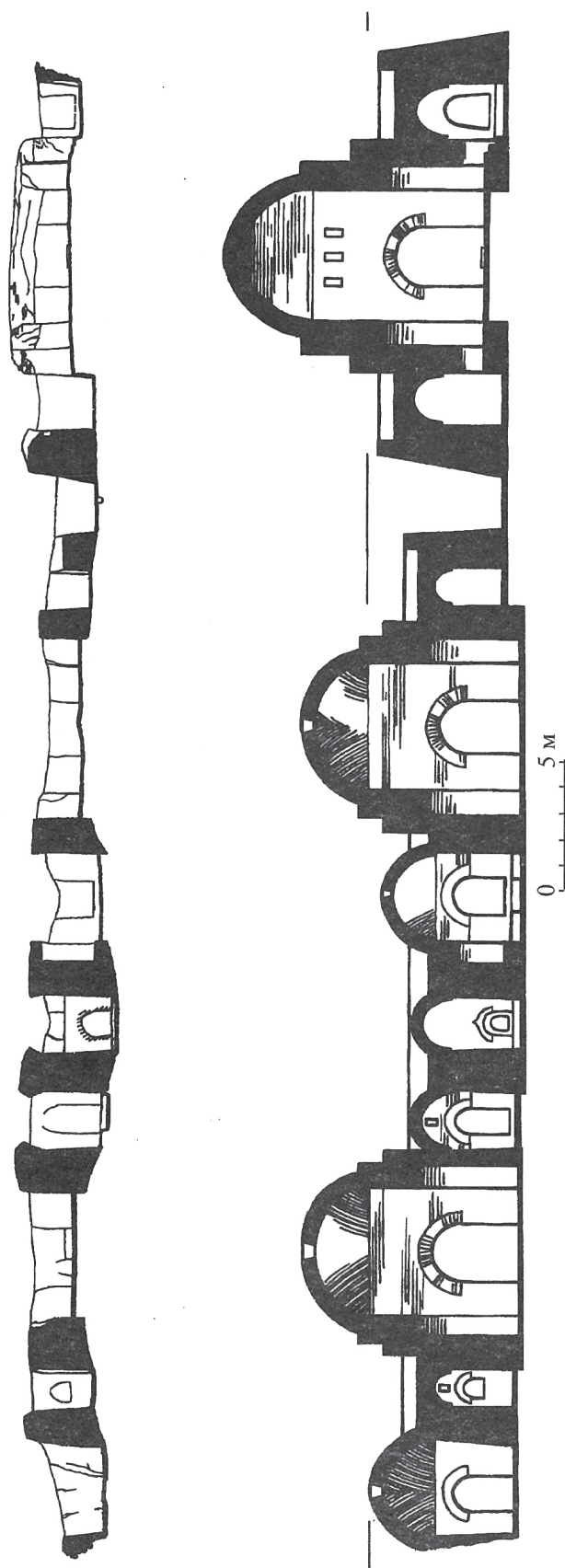


図 65. 第 8 号遺構：断面図 3-3 および復元図

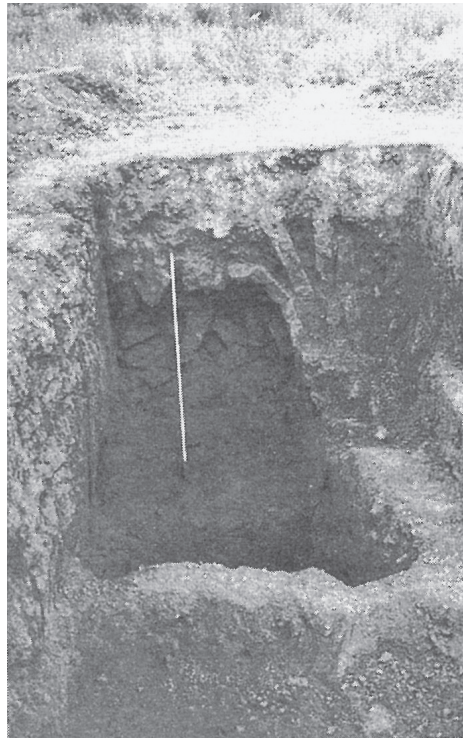


図 66. 部屋 3：堆積状況の断面図

部屋の間の東壁は部屋23、部屋34³¹⁾のヴォールトの天辺〔天頂〕よりも高かったはずである。

部屋の採光の方法に関する考古学的な情報はない。採光の方法は復元図で提案されている。ドーム状〔天井〕の部屋はドームに造られた孔、ヴォールト状〔天井〕の部屋は東側の側壁のヴォールトの頂辺の下、または壁龕の上部のアーチの下にあった鉤山式の窓〔垂直または斜めに配置されたトンネル型の窓〕を通して採光された可能性がある。

9. 複合体の用途

平面プランと配置に基づけば、発掘された遺構は明らかにキリスト教の教会建造物に属しているものである。平面プランおよび建築技術の類似性は、初期中世の建物と一致している。L.R. クズラソフによってアク・ベシム遺跡において発掘された8世紀の教会は、平面プランおよび大きさが複合体Aに類似している⁸⁾。さらに類似している遺跡はアイン・シャーイア遺跡（イラク）の教会址やペルシア湾に位置するファイラカ島のアリー・カスル教会およびハールグ島の僧院の中央部である⁹⁾。アク・ベシムの〔例の〕ように、1つの建造物にいくつかの教会を組み合わせる点はヨルダンのヘラス複合体〔建物群〕

に似ている（図60）¹¹⁾。いくつかの十字架が異なる部屋で見つかった点も、アク・ベシムの遺構が教会の複合体〔建物群〕であることを証明している（図54）。

いくつかの部屋の機能については明らかではない。確実に祭壇がある部屋2および27は祭壇室（内陣）である¹²⁾。おそらく部屋21および25も祭壇室と推定されるが、これらの部屋は基底の床までは発掘されておらず、祭壇も見えていない。しかし、別の機能を考えることも可能である。たとえば、洗礼堂である。金箔で飾られた部屋25の壁画の破片は、この部屋の厳粛さを強調するものである。長い部屋3および28、おそらく「大、小中庭」は身廊であり、教会における信者〔信徒〕用の部屋だった。祭壇と身廊の間には仕切りが発見されていない。一般的に、教会では、祭壇室の南側にデアコニコン〔聖具室〕が設けられており、司祭が典礼の準備をする場所であった。部屋6および26はデアコニコンであろう。

部屋23は特別に興味深い。改築ののち、東側を仕切って2階建てにしてある。1階の低く、狭いヴォールト状の〔天井をもつ〕部屋では、別の場所から運ばれた人間の遺骨の一部が発見された。2階には、部屋24と小さな出入口をもつ小さな部屋があった。これには参籠〔おこもり〕といわれる昔の

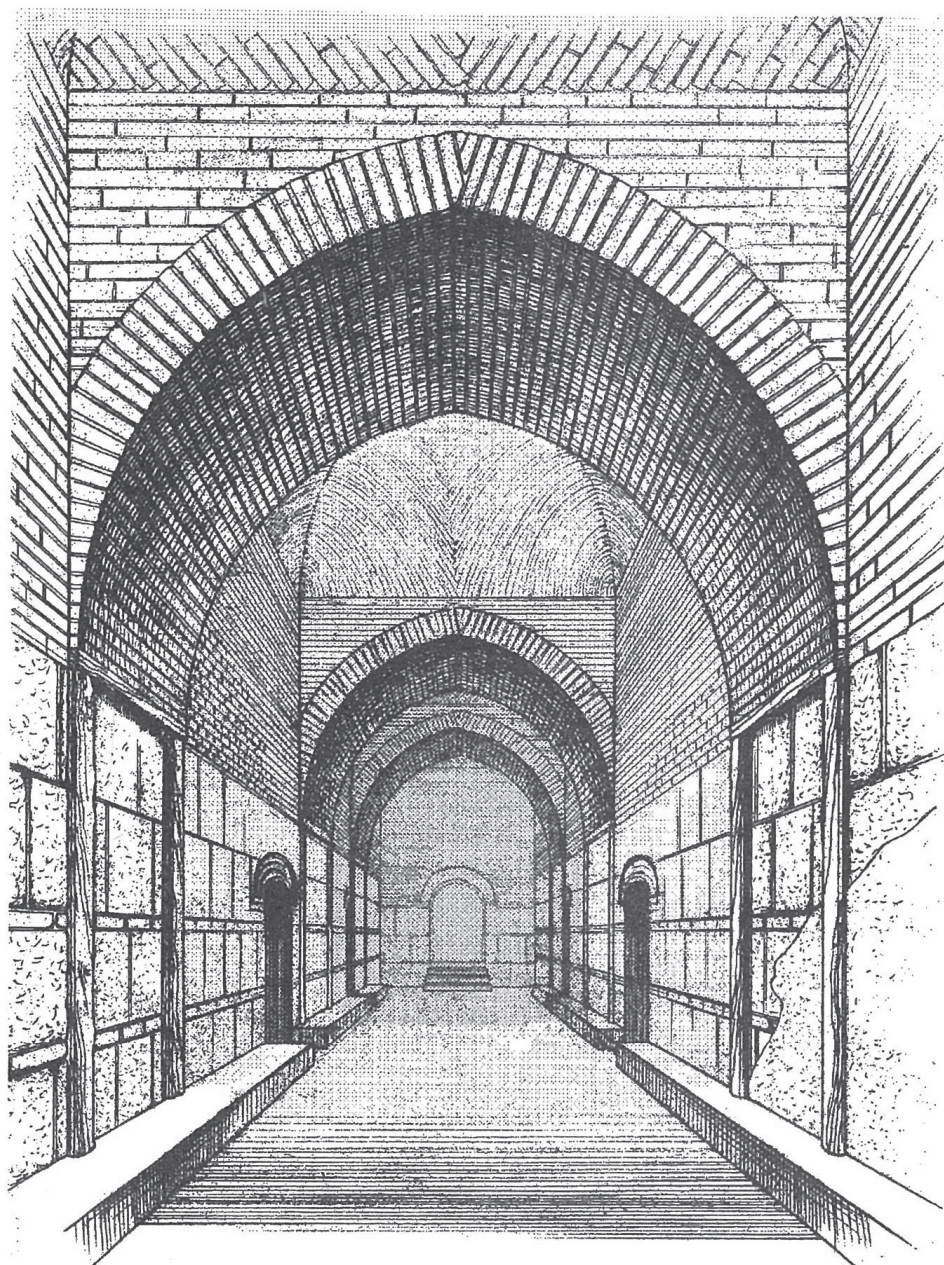


図 67. 第 8 号遺構：部屋 3、復元図

伝統が関連するものと思われる。聖人のお墓または聖遺物の上には小さな部屋が設けられており、そこで一晩を過ごすと思われ、病気が癒されると考えられていた。¹³⁾ 1 階の部屋、および出入口の前で発見された土製のランプはおそらくネール・ターミード「永遠の灯火」であろう。隣接する部屋 24 の床では書物の破片が発見された。この部屋の機能が本を保管することにあったのか、または発見された書物の破片が偶然にここにあったかを説明することは難しい。部屋 9 については、配置から検討すると、拝廊の役割を果たしていた可能性がある。

建物は、存続している間に何度か改築されている。たとえば複合体 A の東北部分にはワイン製造施設「ブドウの破碎や搾汁施設」やワインの貯蔵庫が設けられた。スィヤブにおいてワインの醸造施設があったことは確かに興味深い点であるが、これは唯一の現象というわけではない。イスラーム時代以前には、¹⁴⁾ ワインの醸造施設は中央アジアの全域に存在していた。セミレチエ地域では A.N. ベルンシュタムによってクラスナヤ・レーチカ遺跡¹⁵⁾で、そして K.M. バイパコフによってアク・トベ遺跡¹⁶⁾で発見されている。

629年、三蔵法師はワインでもてなされた³²⁾。アク・ベシム遺跡のワインの製造施設は2つの事実によって特別な関心を集めている。10世紀という時代は、この地域において広くイスラーム化が進んでいた時期であること、そしてワインの醸造施設が教会の一部をなしていたという事実である。消費だけではなく、ワインの生産もイスラーム教徒に³³⁾禁じられていたことが知られている（コーラン5、90）。イスラーム世界では、ゾロアスター教徒、キリスト教徒およびユダヤ教徒がこの役割を果たしていた。サマッラでは、キリスト教の聖職者が描かれた9世紀の数個のワインの容器が発見された。記された銘文に基づけば、これらはワイン容器であると推定されている。アリー・フィールーザーバーディーによれば、この名称は sammas（助祭）という言葉に由来し、キリスト教徒によって製造されたワインを意味している¹⁷⁾。

以前から、セミレチエ地域では大甕に書かれたいくつかのソグド語の銘文が知られており、そのなかにはワインと聖職者に言及した銘文もある。金石学によれば、9～11世紀のものと推定されている。アク・トベ遺跡のワイン製造施設「ブドウの破碎・搾汁施設」水槽の底部は、十字架が刻まれたレンガで作られていた。スイヤブの新しい発掘調査で「出土した」大甕は同じ出土品のグループに分類されるが、考古学的な複合体の構造「建物群」から発見されたのは初めてである。スイヤブの碑文の年代を確定するためには、クラスナヤ・レーチカ遺跡の「パスツン [Пастун という] 職人」の名が記された口縁のスタンプの性格および配置の順序の点で、「アク・ベシム遺跡出土の」大甕の口縁のスタンプと同じであることが重要となる¹⁸⁾。この両方の例では、これらが同じ工場「工房」の製品であることを排除できないからである。スイヤブの発掘調査に基づけば、セミレチエ地域ではキリスト教徒の住民だけではなく、ネストリウス派の教会もワインの製造および貯蔵に関わっていたと主張することができる。

1886年、ビシュケクおよびブラナ付近の2か所の墓地において、13～14世紀の十字架が描かれ、シリアおよびシリア・チュルク語の銘文が書かれた数百基の墓石が発見されて以降、セミレチエ地域のキリスト教について明らかとなってきた¹⁹⁾。この発見を契

機に、V.V. バルトルドは文献資料に基づいて、中央アジアのキリスト教について優れた論文を書いた²⁰⁾。それ以来、発表された数多くの論文は、本質的には同じ文献資料の範囲にとどまっている。新しい考古学的な資料を使って書かれた論文だけが例外である²¹⁾。

もっとも早期で信頼できる資料は8世紀のものである。ソグド中央部では、ペンジセントから「出土している」シリア語銘文が書かれたオストラコン²²⁾（740年頃）、そしてセミレチエ地域ではL.R. クズラソフによって発掘されたアク・ベシム遺跡の教会である²³⁾。

スイヤブの新しい教会の建物群の建設の時には、古い教会はすでに荒廃していた。8世紀から10世紀の間には、セミレチエ地域におけるキリスト教の歴史において空白があったからであろうか。文献資料によれば、この時期、キリスト教を庇護していたカルルクからカラハン朝に支配が変わるが、文献では、カラハン朝がキリスト教徒を迫害したという記録が残されているわけではない²⁴⁾。

サーマーン朝の時代、支配下にあった東方の僻遠の地域に教会が存在していたことが知られている。893～894年にイスマーイール・サーマーニーはタラスを支配し、教会を中央モスクに変えた²⁵⁾。メルケのモスクも、もともとは教会であった。この情報は、キリスト教に関する9～11世紀のソグド語碑文の発見とともに、この地域においてキリスト教が継続的に発展していたことを物語っている。B.I. マルシャクは有名なアニコフスコエ [Аниковское] およびグリゴロフスコエ [Григоровское] の銀製の皿をキリスト教の主題と関連させている²⁶⁾。さらに最近になって発見されたダビデ王 [царь Давид] およびバト・シェバ [Вирсавия] が描かれた皿もこのグループに属する²⁷⁾。サリグ [Сарыг] の「ゲオルギ鍛冶屋 [кузнец Георгий]」の墓石は11～12世紀のものであり、ビシュケクおよびブラナの墓地の墓石の碑文は13～14世紀のものである。したがって、考古学的証拠に基づけば、少なくとも8世紀から14世紀にかけて、セミレチエ地域でキリスト教が継続的に存在していたといえよう。

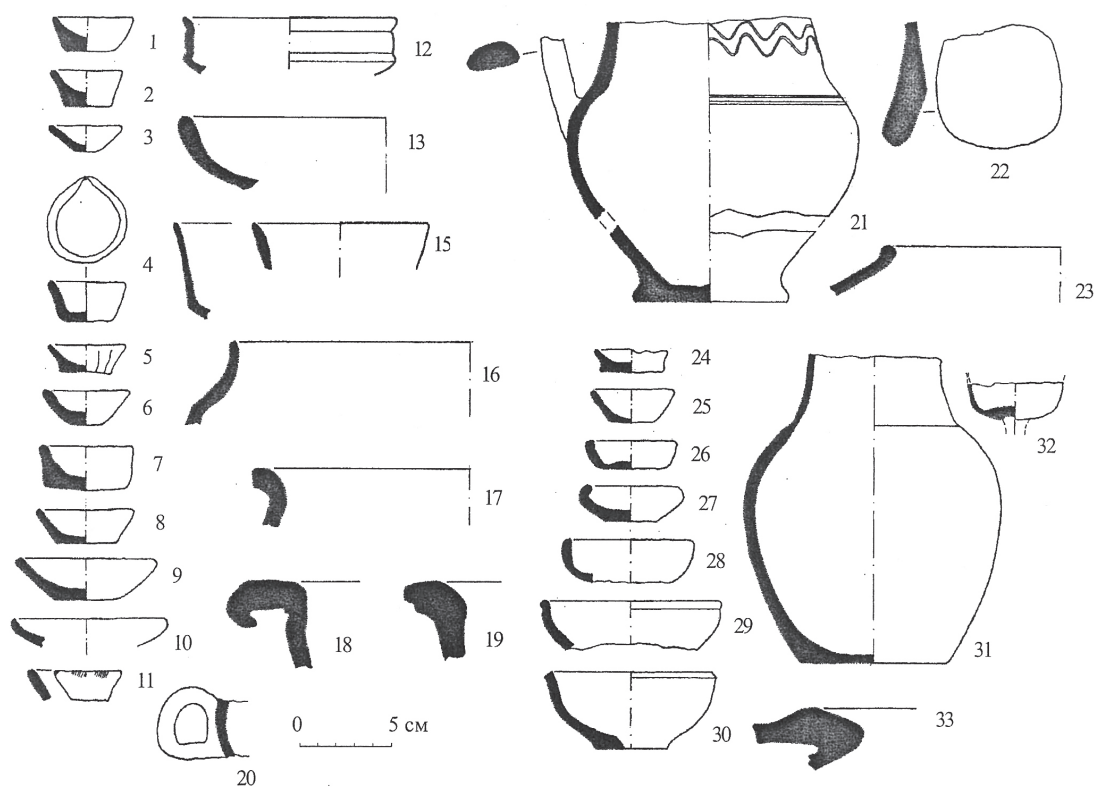


図 68. 素焼きの土器：第 8 号遺構、1 ～ 20 は部屋 23；21 ～ 23 は部屋 24；24 ～ 33 は部屋 24

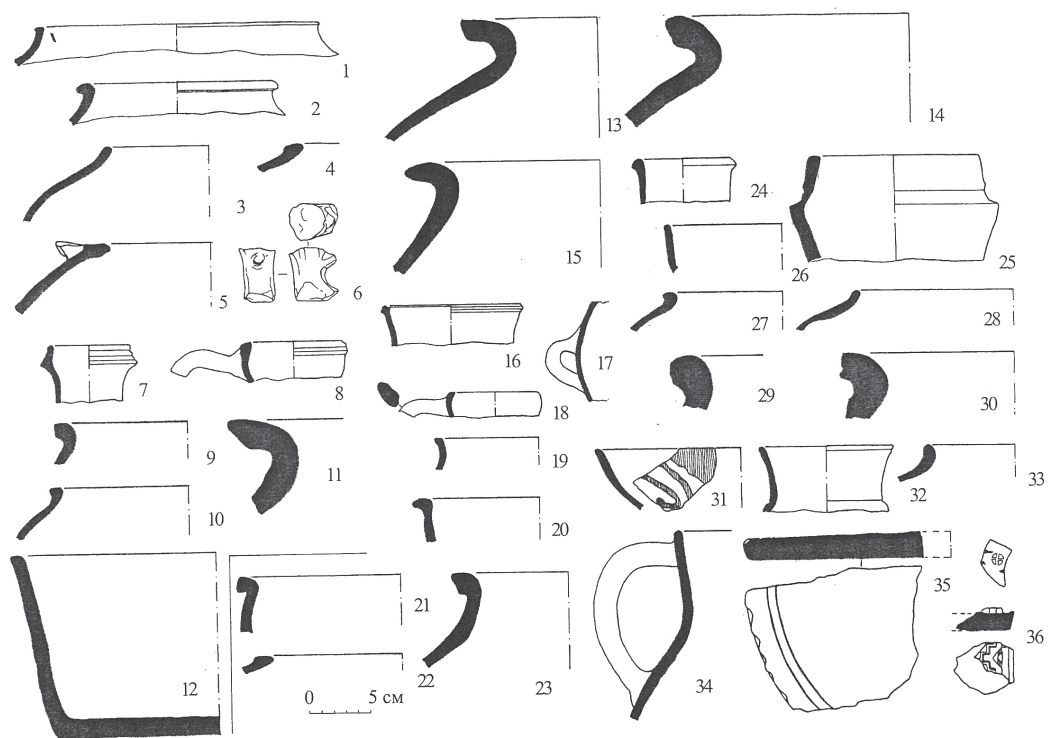


図 69. 素焼きの土器：第 8 号遺構、1 ～ 6 は部屋 21；7 ～ 12 は部屋 22；
13 ～ 15 は部屋 24；16 ～ 23 は部屋 25；24 ～ 30 は部屋 26；31 ～ 36 は部屋 27

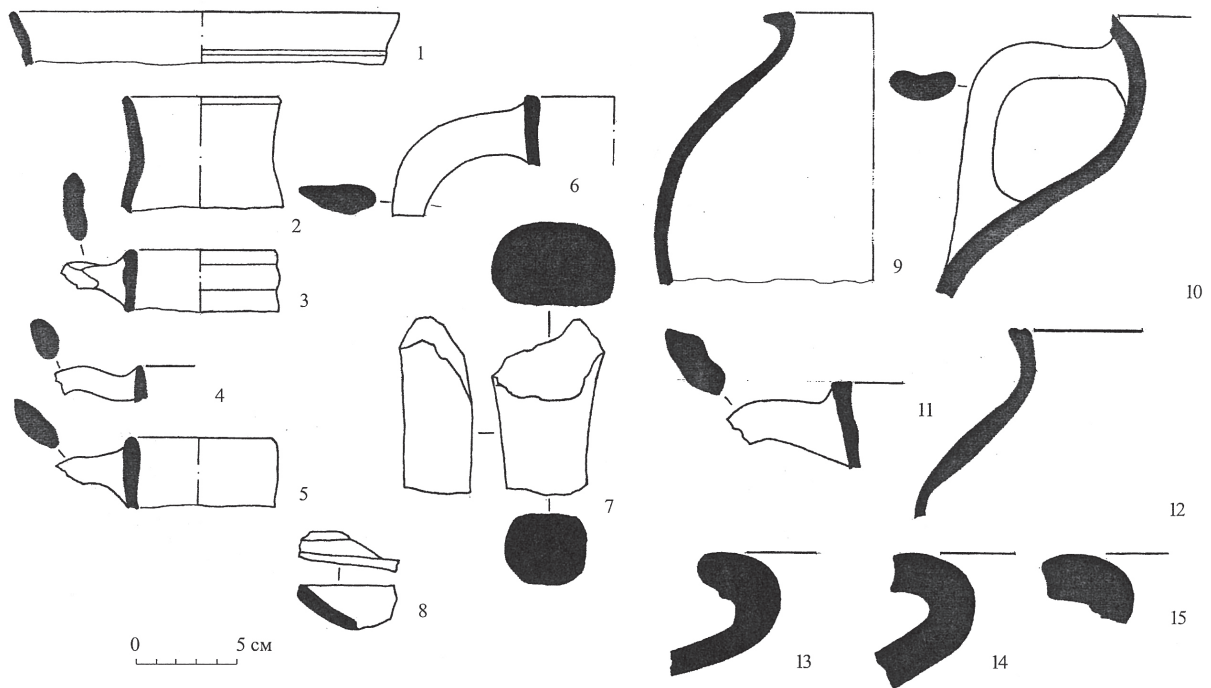


図 70. 素焼きの土器：第 8 号遺構、1～8 は部屋 20；9～15 は部屋 30

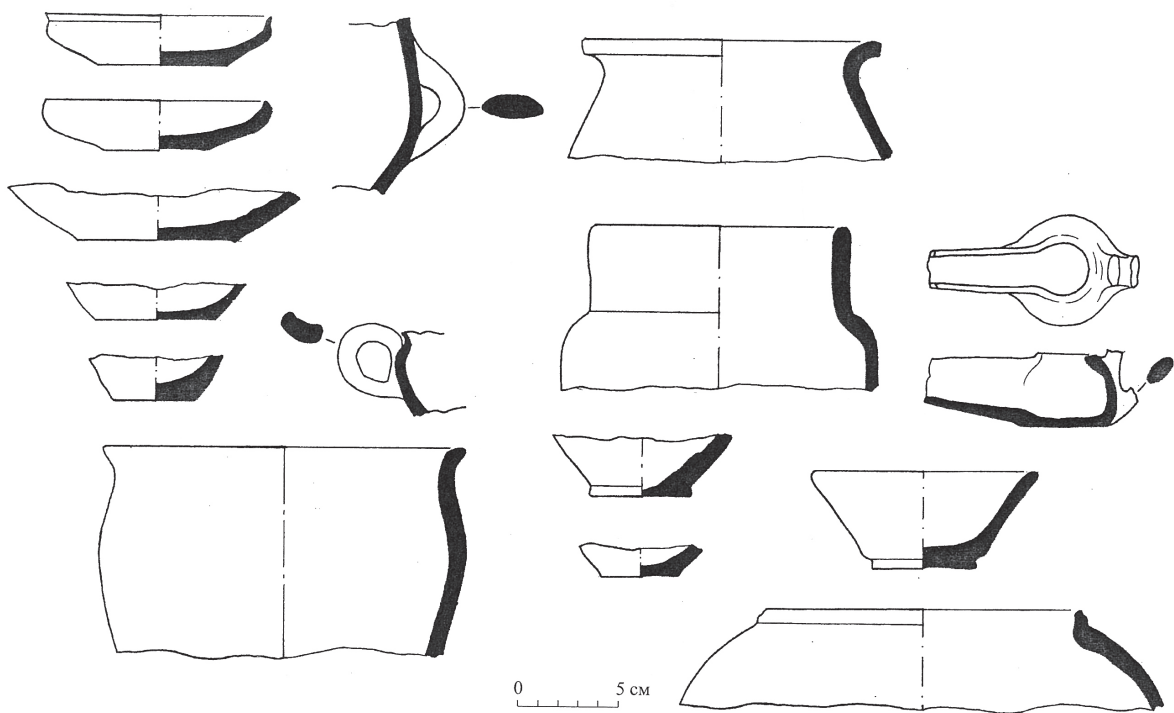


図 71. 素焼きの土器：第 8 号遺構、部屋 9

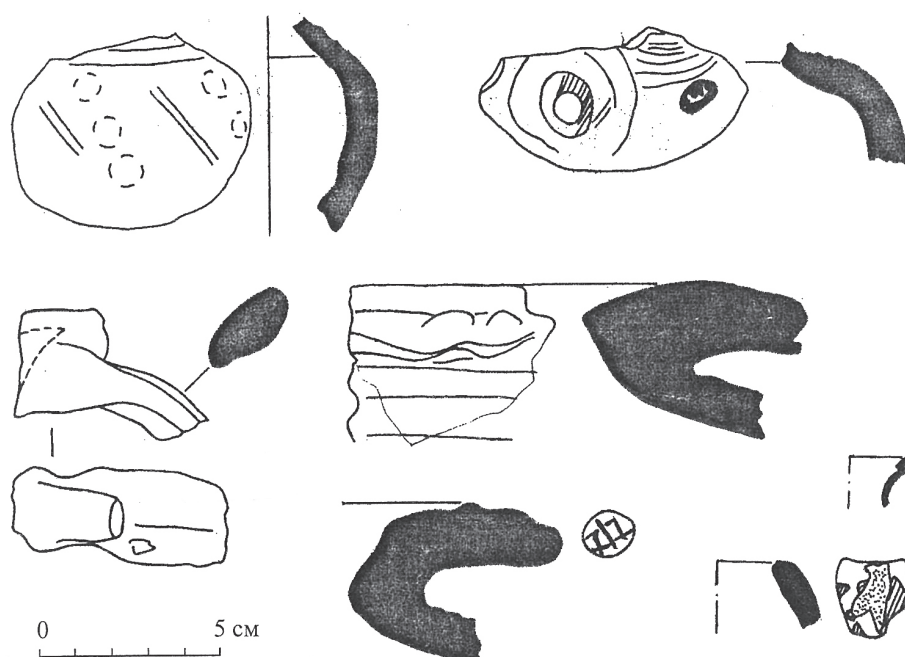


図 72. 素焼きの土器：第 8 号遺構、部屋 5、上から 2 番目の床

表 1. 1998 年の発掘で出土したコイン

No.	遺物番号	コインの型式	備考
1	AB-8/24	方孔あり	直径 20mm、ヴォールトの堆積
2	AB-8/24	方孔あり	弓型のタムガ、直径 25mm、上層の床
3	AB-8/24	方孔あり	直径 20mm、上層の床
4	AB-8/24	方孔あり	直径 18mm、上層の床
5	AB-8/24	方孔あり	直径 22mm、下層の床
6	AB-8/24	方孔あり	直径 14mm、下層の床の下、H. 5.84
7	AB-8/24	方孔あり	直径 12mm、下層の床の下、H. 5.84
8	AB-8/24	方孔あり	直径 8mm、同所
9	AB-8/6	方孔あり	直径 14mm、泥の水性堆積層、壁の上から 120 [cm]
10	AB-98/1	方孔あり	直径 13mm、泥の水性堆積層
11	AB-98/ 部屋 1 から 部屋 2 への 出入口	方孔あり	弓型のタムガ、直径 26mm、石膏の床の下
12	AB-98/6	孔なし	直径 24mm、石灰の床
13	AB-98/4	方孔あり	破片 3 つ堆積、浴槽のレベル
14	AB-98/9	方孔あり	直径 15mm、床 5 の上の堆積
15	AB-98/9	フィルス・コイン	直径 24mm、上層の堆積
16	AB-98/3	フィルス・コイン	直径 24mm、南側部分、下層の床
17	AB-98/20	方孔あり	弓型のタムガ、直径 26mm、堆積
18	AB-98/21	方孔あり	直径 18mm、堆積
19	AB-98/21	方孔あり	直径 1.5mm、(破片 2 つ)、堆積
20	AB-98/22	方孔あり	直径 26mm、ヴォールトの堆積
21	AB-98/22	方孔あり	直径 21mm、ヴォールトの堆積
22	AB-98/23	方孔あり	直径 25mm、スーファの上
23	AB-98/25	方孔あり	直径 14mm、床の上の堆積
24	AB-98/27	方孔あり	貨幣 3 個、直径 0.5 ~ 0.7mm、床
25	AB-98/23	方孔あり	直径 11mm (半分)、スーファの上部
26	AB-98/3	方孔あり	直径 12mm、出入口のプラスター
27	AB-98/1	方孔あり	直径 17mm、第 2 期の堆積
28	AB-98/1	孔なし	直径 26mm、下床の上の堆積
29	AB-98/1	方孔あり	直径 19mm、下床層の上の堆積
30	AB-98/1	方孔あり	弓型のタムガ、直径 25mm、床 2 の層
31	AB-98/2	方孔あり	弓型のタムガ、直径 25mm、東側壁龕、石膏床の上の泥の水性堆積層
32	AB-98/2	方孔あり	弓型のタムガ、直径 25mm、部屋 1 への出入口、石膏層の下
33	AB-98/1	方孔あり	直径 15mm (3 分の 2)、下床の上の堆積
34	AB-98/цит [ツィタ デル] [部屋] 15	方孔あり	弓型のタムガ、直径 26mm、床
35	AB-98/3	方孔あり	直径 25mm、堆積
36	AB-98/3	方孔あり	直径 21mm、南側部分、深さ 1m

- 1) П.Н. Кожемяко. *Раннесредневековые города и поселения Чуйской долины*. Фрунзе, 1959, с.73. [Kozhemyako, P. N. *Rannesrednevekoveye goroda i poseleniya Chujskoj doliny*. 1959, Frunze.] (P.N. カジミヤカ『中世初期のチュー盆地の都市および集落』フルンゼ、1959年、p.73.)
- 2) 発掘調査は、1997年に著者〔セミョーノフ〕の指導の下、A.V. ベフテル [A.B. Бехтер] の参加の下に I.K. マルキエLEM [И. К. Малкиелем] によって実施された。部屋9は L.M. ヴェツトワ [Л.М. Ведутова]、部屋1、2は T.I. ゼイマル [Т.И. Зеймаль]、部屋3～7は A.V. ベフテルの現場報告書に基づいて記述されている。部屋4および19～30は V.A. コルチェンコ [В.А. Кольченко] によって発掘され、部分的に記録されている。修復および現場での保存作業は G.I. テル・オガニヤン [Г.И. Тер-Оганьян] および A.U. ステパノフ [А.Ю. Степанов] によって実施され、建築の測量および遺構の復元は L.U. クラコワ [Л.Ю. Кулакова] によって行われた(1997年には、N.A. アドリャノワ [Н.А. Адрианова] および P.P. ガフリレンコ [П.П. Гавриленко] が測量に参加)。
- 3) 東から2番目の溝はトレンチの下に位置しており、復元したものである。
- 4) 発掘現場で破片の強化処理が行われ、現在はビシュケク市のキルギス共和国国立科学アカデミーの歴史研究所で保管されている。残念ながら、研究者が利用することは不可能である。
- 5) А. Н. Бернштам. *Историко-археологические очерки центрального Тянь-Шаня и Памиро-Алая*. МИА СССР, 26. М.-Л., 1952, рис. 70. [A. N. Bernshtam. *Istoriko-arheologicheskie ocherki central'nogo Tyan'-Shanya i Pamiro-Alaya*. MIA SSSR, 26. M.-L., 1952, ris. 70.] (A.N. ベルンシュタム『中央天山山脈およびパミル・アライ山脈の歴史・考古学論文集』ソビエト連邦の考古学資料および研究、第26巻、モスクワ・レニングラード、1952年、図70。)
- 6) デッガロン・モスクの支持アーチは同じくように造られており、直接に土の壁ではなくて木製の板に支えられている。同様の板は柱の上部およびアーチの間にある。С. Хмельницкий. *Между арабами и тюрками*. Берлин-Рига, 1992, с. 74-75. [S. Xmel'nickij. *Mezhdurabami i tyurkami*. Berlin-Riga, 1992, s.74-75.] (S. ヘメリニツィキ『アラブ人およびチュルク人の間に』ベルリン・リガ、1992年、p.74-75。)
- 7) Г. А. Пугаченкова. К познанию античной и раннесредневековой архитектуры Северного Афганистана. *Древняя Бактрия*. М., 1976, с.130, рис.70. [G. A. Pugachenkova. K poznaniyu antichnoj i rannesrednevekovej arkhitektury Severnogo Afganistana. *Drevnyaya Baktriya*. M., 1976, s.130, ris.70.] (G.A. プガチェンコワ「北アフガニスタンの古代および中世初期の建築に関して」『古代バクトリア』モスクワ、1976年、p.130、図70)；Своды в архитектуре Южного Туркменистана. *Труды ЮТАКЭ*, т. VIII. Ашхабад, 1958, с. 240-242, рис.33-34. [Svody v arkhitekture Yuzhnogo Turkmenistana. *Trudy YUTAKE*, t. VIII. Ashxabad, 1958, s. 240-242, ris.33-34.] (『南トルクメニスタンの建築におけるヴォールト』南トルクメニスタン総合考古学調査隊報告書、第8巻、アシハバド、1958年、p.240-242、図33-34。)
- 8) Л.Р. Кызласов. *Археологические исследования на городище Ак-Бешим*. Труды КАЭЭ, II. М., 1959, с.231-233. [Kyzlasov, L. R. *Arheologicheskie issledovaniya na gorodishe Ak-Beshim v 1953-1954gg*. Trudy Kirgizskoj Arxeologo-Etnograficheskoy Ekspedicii. T. 2. 1959, Moskva.] (L.R. クズラソフ『アク・ベシム遺跡の考古学調査』キルギス考古学・民族学調査隊報告書第2巻、モスクワ、1959年、p.231-233。)
- 9) Y. Okada. Early Christian Architecture in the Iraqi South-Western Desert. *Al-Rafidan*, vol.XII, Tokyo, 1991, p. 72-74.
- 10) Y. Calvet. Monuments paléo-chrétiens à Koweit et dans la région du Golfe. *Orientalia Christiana Analecta* 256. Rome, 1998, p. 671-673.
- 11) 南側の聖ゲオルギオス教会は529～530年に建造され、1年後には、北側に洗礼者ヨハネ教会が増築された。533年には、北側に聖コスマスとダミアス教会が建造された。Byzantinische Mosaiken aus Jordanien. Katalog. Wien, 1986, S. 96-97.
- 12) 典礼の規定に基づき、祭壇の周りを回れるように、ネストリウス派の教会では祭壇はアブスの西壁の前に、ヤコブ派教会では中心に位置している。I. Pena. *The Christian Art of Byzantine Syria*. Madrid, 1997, p.92.
- 13) I. Pena. *The Christian Art*. p.146.
- 14) Н.В. Савваниди. Виноградодавиельни близ древнего Пенджикента. *Информационный бюллетень МАИКЦА [Международная Ассоциация по изучению культур Центральной Азии]*. Вып. 17. М., 1990, с. 53-59. (N.V. サツヴァニヂ「古代ペンジケント周辺のワイン製造施設」『中央アジア文化研究国際協会 UNESCO 紀要』、17号、モスクワ、1990、p.53-59。)
- 15) А.Н. Бернштам. *Труды Семиреченской археологической экспедиции. Чуйская долина*. МИА, 1950, № 14, с.43-46. [Bernshtam, A. N. *Trudy Semirechenskoj arxeologicheskoy e'kspedicii. Chujskaya dolina*. Materialy i issledovaniya po arxeologii SSSR, No 14, 1950, Moskva-Leningrad.] (A.N. ベルンシュタム『セミレチエ地域の考古学調査隊の報告書「チュー盆地」』ソビエト連邦の考古学資料および研究、第14巻、1950年、p.43-46。)
- 16) К.М. Байпаков. *Средневековая городская культура Южного Казахстана и Семиречья*. Алма-Ата, 1986, с. 184. [K.M. Bajpakov. *Srednevekovaya gorodskaya kul'tura Yuzhnogo Kazaxstana i Semirech'ya*. Alma-Ata, 1986, s. 184.] (K.M. バイパコフ『南カザフスタンおよびセミレチエ地域のの中世の都市文化』アルマトイ、1986年、p.184。)

- 17) D.S. Rice. Deacon or Drink: Some Paintings from Samarra Re-examined, in *Arabica* 5 (1958), p. 15-33.
 - 18) A.H. Бернштам. Уйгурская эпиграфика Семиречья. *ЭВ*, 1947, вып. 1, с. 34-37. [A. N. Bernshtam. Ujgurskaya e'pigrafika Semirech'ya. *E'V*, 1947, вып. 1, s. 34-37.] (A.N. ベルンシュタム「セミレチエ地域のウイグルの碑文」『東洋の碑文学』、1947、1号、p.34-37。)
 - 19) D. Chwolson. Syrisch-nestorianische Grabinschriften aus Semirjetschie. *Mémoires de l'Académie Impériale des Sciences de St.-Petersbourg*, VII ser., t. XXXVII, No.8, SPb, 1890.
 - 20) В. В. Бартольд. О христианстве в Туркестане в домонгольский период. *В. В. Бартольд. Сочинения*, т. II (2), М., 1964, с.265-314. [V. V. Bartol'd. O xristianstve v Turkestane v domongol'skij period. *V. V. Bartol'd. Sochineniya*, t. II (2), М., 1964, s. 265-314.] (V.V. バルトリド「前モンゴル期のトルキスタンのキリスト教について」『V.V. バルトリド論文集』第II (2) 巻、モスクワ、1964、p.265-314。)
 - 21) 遺物の説明および文献は以下を参考：А. Б. Никитин. Христианство в Центральной Азии (древность и средневековье). *Восточный Туркестан и Средняя Азия*. М., 1984, с. 121-137. [A. B. Nikitin. Xristianstvo v Central'noj Azii (drevnost' i srednevekov'e). *Vostochnyi Turkestan i Srednyaya Aziya*. М., 1984, s. 121-137.] (A.B. ニキチン「中央アジアのキリスト教（古代および中世）」『東トルキスタンおよび中央アジア』モスクワ、1984年、p.121-137); G. Semenov. *Studien zur sogdischen Kultur an der Seidenstrasse*. Wiesbaden, 1996, S. 56-68. 最近の論文のなかでは、V. クラインによるキルギスのキリスト教についての博士論文を挙げるべきである。著者は墓石の碑文の新たな解釈とともに、史書を詳細に分析している。W. Klein. *Das Nestorianische Christentum an den Handelswegen durch Kyrgyzstan bis zum 14 Jh.* Silk Road Studies III. Brepolis, 2000.
 - 22) A. V. Paikova. The Syrian Ostrakon from Pandjikant. *Le Museon*. T. 92. 1979. p. 159-169.
 - 23) ペトル [Петр] およびガブリエル [Гавриил] の名が記されたタラズ [Тараз] から出土したマグカップはベルンシュタムによって5～6世紀のものとして推定されている。А. Я. Борисов. Сирийская надпись на сосуде из Тараза. *Изв. АН Каз. ССР*, 1948, с. 105-108. [A. Ya. Borisov. Sirijskaya nadpis' na sosude iz Taraza. *Izv. AN Kaz. SSR*, 1948, s. 105-108.] (A.Ya. ボリソフ「タラズ出土の容器のシリアの碑文」『カザフ・ソビエト社会主義共和国の科学アカデミーのイズヴェスチヤ [機関紙]』、1948、p.105-108)。しかしながら、セミレチエ地域の考古学では、これまで5～6世紀の層は発見されていないので、このような早い時期の年代は疑問である。
 - 24) V.V. バルトリド「[[前モンゴル期のトルキスタンの] キリスト教について」、前掲書、p.290.
 - 25) V.V. バルトリド「[[前モンゴル期のトルキスタンの] キリスト教について」、前掲書、p.287.
 - 26) B.I. Marshak. *Silberschätze des Orients. Metallkunst des 3-13. Jhrd. und ihre Kontinuität*, Leipzig, 1986, S. 320-324.
 - 27) A. В. Бауло. Серебряное блюдо с малой Оби. *Археология, этнография и антропология Евразии*. 4, 2000, с. 143-153. [A. V. Baulo. Serebryanoe blyudo s maloj Obi. *Arxeologiya, e'nologiya i antropologiya Evrazii*. 4, 2000, s. 143-153.] (A.V. バウロ。「小オビ川出土の銀製大皿」『ユーラシアの考古学、民族学および人類学』第4巻、2000年、p.143-153。)
 - 28) А. Я. Борисов. Эпиграфические заметки. *ЭВ*. 15, 1963, с. 56-57. ([A. Ya. Borisov. E'pigraficheskie zametki. *E'V*. 15, 1963, s. 56-57] (A.Ya. ボリソフ「碑文学ノート」『東洋の碑文学』第15巻、1963年、p.56-57。)
- 訳註1) 原文では、внешние фасадные стены (外側のファザードとなる壁)。「ファサード」は「建築物の正面部分」の指す言葉であるが、翻訳では「外壁」と訳した。
- 訳註2) 後述では「大中庭」と呼ばれているものである。なお、北側に位置する中庭は「小中庭」と名付けられている。以下、「大中庭」、「小中庭」とする。
- 訳註3) 図4と図27によれば、部屋21という番号が異なる2つの部屋に付けられており、番号が重複していることが確認できる。本文によれば、部屋21は「部屋群の中央[に位置する] 部屋」であり、かつ「部屋2と平面プランが類似している」ことから、図27が正しく、図4の部屋21は部屋19の誤りであると考えられる。
- 訳註4) 原文では、ганч。ガンチとは、中央アジアにおいて石膏(40～70%)と土を含む岩石を焼いて作られる建設材料の名称で、粉末状の水溶液は成形が容易で、プラスターや彫刻装飾、塑像に用いられている。本翻訳では、石膏と訳した。
- 訳註5) 原文では、саман (サマン)。藁などの繊維が混じった建築用の土のことである。
- 訳註6) 原文では、натек (ナチョーク)。ナチョークの字義は「流れたもの」であり、壁などから融け出した細かい泥が層状に堆積した状況を示す語である。ナチョークの語そのものには、「泥」の意味は含まれていないことから、本翻訳では「水性堆積層」と訳した。また、適宜、「泥の水性堆積層」といった表現を用いることもある。
- 訳註7) 原文では、суфа。一般的に、壁際に構築されるベンチ状の遺構を指す。
- 訳註8) 図4によれば、北壁には2組の溝(柱穴)しか図示されていないが、南壁に残された痕跡に基づき、3組としたものか。
- 訳註9) 迫台となる壁の上にあって、ヴォールトを形成する迫持ち構造の迫石を支持するもの。本翻訳では、「迫元」と訳した。

訳註10) この状況に基づけば、床2の時期ののち、この床面を利用して、この教会とは関係のない人たちが居住し、簡易的な炉を造っていた可能性がある。後述のように、この灰溜まりからは施釉陶器の破片も見つかっていることから、いわゆるカラハン朝期には、教会はすでに機能を失っていた可能性が考えられる。

訳註11) 原文では、кубур。本翻訳では「導管」と訳した。

訳註12) 原文では、алебастровый（アラバスターの）。本翻訳では、「石灰の」と訳した。

訳註13) この「水性堆積層」は、建物の天井や壁の土が溶け出して生じたものというより、碎葉鎮城、つまり第2シャフリスタンの建設にともなう第1シャフリスタンの東壁（第2シャフリスタンの西壁）の改築以前に存在していた濠の堆積土の可能性はある。AKB-16、つまり第1シャフリスタンの東壁（第2シャフリスタンの西壁）の発掘調査では、壁の基部の下層には、水性堆積層が確認されており、これと同じものである可能性がある。また、東壁および北壁の項で述べられている、壁の基礎の下層にある砂層も同じく、濠の水性堆積層である可能性がある。

訳註14) 「tukhus（ツフス）」コインとされているコインは、ワナントマーフ Wanantmax コインのこと。吉田は、このコインについて、「おそらく、蘇祿以降弱体化したトゥルギシュの緩やかな支配下にあった、ソグドの都市国家の支配者が発行したコインであったのであろう」と述べている（吉田豊「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57、2018、155-182：156-159）。

訳註15) 原文では、винодельня。この語は、一般的に「ワイン醸造所、ワイナリー」と訳されることが多いが、本翻訳では、「ワイン製造施設」と訳した。発掘された遺構は、より正確に言えば、ワイン製造におけるブドウの破碎工程のための施設であろう。

訳註16) 原文では、выкружка（フィレット）。「フィレット」は「角もしくは隅の部分が丸くしたもの、隅丸にしたもの」、「湾曲した凹面の線形」を意味することから、ここでは、床と壁が直角に交わっていない、つまり、「曲面になっている」もしくは「丸みを帯びている」形状を指すものと考えられる。本翻訳では、「隅丸」と訳した。

訳註17) 平面図によれば、部屋6の東側に位置するのは部屋4である。原文では部屋5となっているものの、「部屋5」は「部屋6」の誤りであると考えられる。

訳註18) 原文は、жирная глина。字義は「脂肪質の粘土」で、粘性の高い粘土を指すものと思われるが、ここでは「ローム土」と訳した。

訳註19) 原文は、чаша。ここでは「鉢」と訳した。

訳註20) 原文では、полочка свода（「ヴォールトの線形・迫持ち」）。

訳註21) 原文は、чирог。ここでは「ランプ」と訳した。

訳註22) 原文では、дастархан [dastarkhan]。「テーブル」や「食布」を意味する語であるが、ここでは「台」と訳した。

訳註23) 原文では、винодави́льня で、一般的には「ワイナリー」や「ワイン醸造所」と訳されるが、上述のとおり、より正確には、ブドウの破碎や搾汁を行う施設であろう。

訳註24) 上述のとおり、図4では、「20」と「21」の部屋番号が記されている。しかしながら、図27にも「21」の部屋があること、また部屋の記述に基づけば、この図4の「21」は誤りであり、「19」が正しいと考えられる。

訳註25) 原文では、скользящий проход。ロシア語では「壁の端にある出入り口」で、本翻訳では「スリッ式［スライド式］の出入り口」と訳した。

訳註26) 「P-5.98」の「P」は、ロシア語の репер [reper]（レベル）、つまり「基準点、水準点」、もしくは расстояние（ラスタヤニエ）、つまり「距離」の略号であると思われる。後述を参照すれば、「レベル（基準点、水準点）」の略号である可能性が高い。その場合「基準点からマイナス5.98m」を意味するものと考えられる。

訳註27) ここでいう「小さな縦の溝が付けられた灰色の土の焼成レンガ」は、第2シャフリスタンで出土している灰色焼成レンガ、つまり「塼」であると考えられる。この建物では、構造物の基礎として、この焼成レンガが転用されたものと考えられる。なお、この焼成レンガは部屋22でも見つかっている。

訳註28) 原文では、свод «балхи»。中央アジアで用いられるヴォールトの種類のひとつである。バルヒー・ヴォールトは正方形に近い長方形の建物の上に造られる。各コーナーから積み始められるレンガ積みの小アーチは壁面に対して45度の角度で配置され、それぞれの壁の中央部で「松」（檜垣模様）を形成する。

訳註29) 原文では「部屋31」と記されているが、図4によれば、「部屋1」の誤りであると思われる。

訳註30) 「各複合体には祭壇室の東側」と記されているが、「各複合体には祭壇室の西側」の誤りであると思われる。

訳註31) 部屋34については報告されていないこと、また、文脈からして、部屋24の誤りであると考えられる。

訳註32) 『大慈恩寺三蔵法師傳』によれば、玄奘は、ワインではなく、「蒲桃漿」、つまりブドウジュースを飲んだとされる（長澤和俊訳、慧立／彦棕『玄奘三蔵』講談社学術文庫、1988：72）。

訳註33) 第5章「食卓」の第90節には、「あなたがた信仰する者よ、誠に酒と賭矢、偶像と占い矢は、忌み嫌われる悪魔の業である。これを避けなさい。恐らくあなたがたは成功するであろう。」とある。また、第91節には、「悪魔の望むところは、酒と賭矢によってあなたがたの間に、敵意と憎悪を起こさせ、あなたがたがアッラーを念じ礼拝を捧げるのを妨げようとするのである。それでもあなたがたは慎まないのか。」とある（『日亜対訳・注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会、1982：141-142）。

訳註34) 原文では、дьякон。

訳註35) 原文では、с лировидным знаком で、「竖琴の文様」の意であるが、本翻訳では「弓型のタムガ」とした。

